

僕が美少女になったせいで幼馴染が百合に目覚めた。

楠富　つかさ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ある朝、目覚めたら女の子になっていた主人公と主人公に恋をしていたが、女の子になって主人公を見て百合に目覚めたヒロインのドタバタした日常。

# 目次

プロローグ おやすみ“僕” おはよう  
“ボク”

# 1 姫宮家の日常 | 1

# 2 幼馴染み 雛田麻琴 | 6

# 3 Wake up sweet

girl | 10

# 4 何はともあれ君が好き | 14

# 5 買い物しよう! | 17

不意ながら花の女子校生です

# 6 初登校です | 22

# 7 女子高生活スタートです

26

# 8 あらためまして | 30

# 9 部活日和です(前編) | 36

# 10 部活日和です(後編)

41

新入生研修というか、林間学校だよな

# 11 新入生研修 | その前の話 | 45

# 12 新入生研修 | その朝の話 | 52

# 13 新入生研修 | 1日目 | そのい

ち | 57

# 14 新入生研修 | 1日目 | そのに

61

#15 新入生研修 1日目 そのさ

#21 父との遭遇／本屋さんへ

ん  
#16 新入生研修 1日目 そのよ 66

95

#16 新入生研修 1日目 そのよ

#22 未来へ駆け出す 100

ん  
#17 新入生研修 2日目 そのい 70

#23 お出かけしよう 104

#17 新入生研修 2日目 そのい

#24 お買い物しよう 109

ち  
#18 新入生研修 2日目 そのに 76

近づく夏と二人の距離 113

#18 新入生研修 2日目 そのに

#25 くもり空かえり道 113

—  
#19 新入生研修 2日目 そのさ 81

#26 雨と相合い傘とお姉ちゃん

#19 新入生研修 2日目 そのさ

116

ん  
#20 新入生研修 最終日 それか 86

#27 虹色アーチ 119

#20 新入生研修 最終日 それか

#28 生徒会選挙(1) 123

ら  
91

#29 生徒会選挙(2) 128

幕間 ゴールデンウィーク編

#30 生徒会選挙(3) 131

	# 3 1	夏休みまったなし	——	136	# 4 0	お泊まり会	そのさん	
	# 3 2	温泉に行くのは誰?	——	141	177			
	夏休み				# 4 1	お泊まり会	そのよん	
	# 3 3	いざ温泉地へ	——	145	180			
	# 3 4	露天風呂に行く、その前に			# 4 2	夏祭り	前編	184
149	# 3 5	露天風呂	——	153	# 4 3	夏祭り	後編	191
	# 3 6	温泉旅行? 勉強合宿?			二期といえは文化祭だよね			
157	# 3 7	UNO大会	——	161	# 4 4	新学期事件 (1)	——	196
	# 3 8	お泊まり会	そのいち		# 4 5	新学期事件 (2)	——	200
167	# 3 9	お泊まり会	そのに	172	204	# 4 6	文化祭に向けて (1)	
			——		# 4 7	文化祭に向けて (2)		210

短い三学期はさよならの季節

# 5 7	初詣	256	
# 5 6	新春	252	
# 5 5	決別	248	
# 5 4	離別	244	
	ふゆやすみ		
# 5 3	家族会議	240	
# 5 2	月明かりの下で	236	
	悠希	228	
# 5 1	happy birthday		
# 5 0	大錠祭 (3)	223	
# 4 9	大錠祭 (2)	218	
# 4 8	大錠祭 (1)	214	
294	# 6 5	桜よりも君を見ていたい	289
	番外編		
	# 6 3	卒業式	284
	281		
	# 6 2	三年生のために (4)	
	278		
	# 6 1	三年生のために (3)	
	271		
	# 6 0	三年生のために (2)	
	266		
	# 5 9	三年生のために (1)	
	# 5 8	ぬくもり	261

二年生になりました♪

#66 新しいクラス ———

303

#67 絶対☆ライバル宣言!?

307





プロローグ おやすみ“僕” おはよう“ボク”

## #1 姫宮家の日常

春休みも残り二週間に迫った三月某日。とある地方都市にある、比較的大きな家にて。

「ど、どういふことなの〜!!」

朝の洗面所に美しいソプラノボイスが響き渡った。

僕の名前は姫宮悠希<sup>ひめみやゆうき</sup>。字面からだけでは分かりづらいけど男子だ。折角の長男なんだから『雄』の字とか入れてくれてもいいのに……。そうすればもつと男らしい名前だったし、こんな女々しい育ち方はしなかっただろう。名は体を表すとはよく言ったものだ。

事実、中性的な名前の僕は顔だつて中性的で、毛深くもない。強いて言えば睫毛が長い……。いや、それは逆に女々しいか。一度、男らしさを磨くために一人称を“俺”にしたら、姉に物凄く怒られたし、弟からは悲しそうな目を向けられた。解せない。

体格は平均的な中肉中背だ。基本的に母親似のスペックが悪いんだ。料理も裁縫も

出来ちゃうし……。その他の家事も全般的に問題なくこなせるからなあ……。クラスメイトにお前が女子だったらと言われたことを思い出して少し暗くなる。

スポーツは出来ないが護身術として少林寺拳法を習っていた。真面目に練習したお陰か二段まで取得したのだが……。いやいや、そもそも男なのに護身術が必要ってなんなんだ!!

「兄さん、暇ならボタン直してくれないかな?」

僕が自室で今までの人生に悲観していると、弟の姫宮夏希ひめみやなつきが入ってきた。

弟はバツチり父親似だ。……僕と大差ない中性的な名前のくせに。僕がこの春に高校入学すると同時に中学二年に上がる十三歳なのだが、身長は僕より二センチ低い164センチ。成長期を前にして十分な体格だ。部活もバスケだし、まだまだ伸び白がある。166センチで止まってしまった僕からすれば羨ましい限りだ。

さらに、声変わりしたかも分からない僕に対して夏希の声は既にやや低くテノールボイスになっている。そんなことは、どうでもいいのだが、

「母さんに頼んでよ……。今は何もしたくない……」

弟の頼みをスルーしようとしたら、そうはさせてもらえなかった。

母が忙しいようだ。母の姫宮希ひめみやのぞみは服飾デザイナーといって、平たく言えば服とか靴のデザインをしている。

アイドルプロデューサーの仕事をしている父の姫宮光ひめみやひかるとは見合い結婚だったらしいが、これは母が計画したものだと思う。なにせ今や雑誌のインタビュアーを受ける程に有名なデザイナーになったのだから。お母さんがデザインした衣装をアイドルが着て、話題になれば母さん本人が徐々に有名になる。……実際にこうなつたからすごいや。ちなみに父は多忙を極めていて年度末の今月も某アイドルのツアーコンサートに同伴している。しかも、来月は大半を海外ですごさなくてはならないらしい。最近のアイドルはグローバルだなあ。まあ、僕には関係ないけど。

「はあ。取り敢えず直しちやおうか」

やむなく弟のポロシャツのボタンを直すために愛用のソーイングセットを取り出す。針と糸を取り出して簡単に縫う。手馴れた作業だ。にしても、何でポロシャツのボタンが取れてしまうのやら。まあ、どうでもいいけどさ。

「はい完成。これでいいでしょ?」

お礼をドゥプラー効果させながら部屋をでていく弟に溜め息を吐くのだった。

「ただいま。——悠希い、夜食作つてえ」

夜の十時過ぎ……家に帰ってきたのは姉の姫宮光希ひめみやみつぎだ。この春から女子大生になる十八歳なのだが、今はバイトにご執心だ。本人曰く『稼ぐ時に稼ぐ! それだけ!!』だ

そうだ。つまり、深い理由などないということだ。

にしても、夜食を所望するのは珍しい。

取り敢えず階段を降り台所へ向かう。お手製のマイエプロンを着て冷蔵庫をチエツクする。

「オムライスにする？」

オムライスは姉の好物だ。歓声を肯定と捉え、冷蔵庫から鶏肉、卵、ケチャップを取り出す。フライパンを温め炊飯器からご飯を投下——以下略——あつという間に完成だ。

仕上げはチキンライスに載せたオムレツをフライ返しで割って広げる。

「はい、おまちどおさま」

台所に美味しそうな匂いが漂う。洗い物をする僕の耳にスプーンと皿のぶつかる音が聞こえてくる。そんなにながつかなくても誰も取りやしないのに……。

「ふう、ご馳走さま。やっぱり自分で作るより悠希が作った方が旨いよ」

「お粗末様です。姉さんだって本気出したら出来るんじゃないの？」

姉さんは基本的に器用で勉強もスポーツもそつなくこなす。文学部に進学した根っからの文系人間のくせに家電の扱いや説明書の読み込みが早く、僕も何度か助けてもらったことがある。

「悠希は私のことを小器用だと思っっているだろうけど、実際は……………器用貧乏なのよ!!」

どうでもいいわっ!! 姉さんは生き方が不器用だ。そうに違いない。

## #2 幼馴染み 雛田麻琴

翌日、春の陽気に惰眠を貪っていると、ケータイに一通のメールが届いた。

その文面に深い溜め息を吐いたのだが、取り敢えず着替える。

三十分後に僕は駅前の噴水という待ち合わせにしてはベタすぎる場所にいた。

「お待たせ。悠希」

手を振りながら現れたのは僕の幼馴染みの雛田麻琴だ。ひなたまこと紛らわしい名前だが女子。

とはいえ、決して僕の彼女ではない。家が近所っていうのもあるが、小学生の頃に出席番号が近かったことから話すようになっただけなのだ。ただ、不思議とウマがあつたんだ。気楽に話せるし、運動神経のよさに憧れてもいた。

人懐っこい性格で、男女問わず話し易いタイプでもある。また、容姿はそこそこ良くパツチリした瞳は二重で僕と同じくらい睫毛が長い。……僕自身は睫毛の長さにはさほど好印象を持っていないのだが。また、スレンダーな体型はアスリートのようなものである。事実、陸上部に所属する麻琴はアスリートと言えるし、その長い足は筋肉質すぎず、細くしなやかである。それに足が長い分、等身が高くモデル体型でもある。背も僕より1センチ低いだけで、一昨年ようやく抜いたのだ。

「じゃ、服選びをお願いしちゃおうよ」

そんな麻琴も完璧な人間ではない。どちらかというところ、欠点の方が……いや、なんでもない。だが最も致命的な欠点がファッションセンスの無さである。次点は家事スキルの低さだな。今日の格好は淡いイエローのブラウスとカーキのスキニーパンツである。勿論、僕が指定した服装であり、麻琴が自力で選んだ服で出歩いたら……。目も当てられない。僕や母さんが選んだ服装の時に何度か読者モデルをやらなかったかと誘われたこともあった。おそらく、麻琴が自身で選んだ服を着ていたら……スルーしていただろう。

「まったく……女子の服選びなんだから母さんに頼んでよ……」

せめてカタログで話をするとかにして欲しい。わざわざデートみたいにデパートで服選びなんて……恥ずかしい。そんな麻琴の服を選ぶのは多忙な母に代わって僕の仕事になりつつある。不本意ながら！

「ほら、悠希には若さがあるからね。それに青は藍より出でて藍より青しってことわざがあるでしょ？ やっぱり悠希じゃなきゃ」

「母さんの前で言ったら怒られるよ？ それに、そのことわざの意味を正しく理解しているなら麻琴は僕を買い被りすぎだよ」

そうは言いつつもデパートに向けて歩き出す。頬を撫ぜる春風が心地いい。……

まあ、周囲にいるのがカップルばかりでなければ、の話だが。当の麻琴がなんの意識もしていないからこそ……かえって居心地が悪いのだろうか。ちくしょう、春だからってどいつもこいつも浮かれやがって!! なんてことを思いつつ、傍から見たら……僕と麻琴も同じように見えるのだろうか。僕は麻琴をどう思っているんだろう？

「あれ？ 服の売り場って二階だっけ？」

無邪気に尋ねる麻琴を見て、そんなことは考えるだけ無駄だと悟った僕であった。

買い物を終え、家に帰る。今回買ったのは値下げされた春モノと初夏まで着られるパステルカラーのトップス。オフショルは欠かせない。ボトムスは七分丈をメインに数本。靴は早めだがサンダルを一足買った。麻琴は雛田家の一人娘だから資金は潤沢なのだ。母さんへの報告用に、ガラケーの画素数の少ないカメラで撮られた写真たちを見ながら確認していると、ケータイが鳴った。鳴り響くはエルガー作曲、威風堂々。中学の音楽の授業で麻琴が気に入り、以降麻琴からの着信音に採用されている。今回はメールではなく電話だ。

「もしもし。どうしたの？」

「いや……今日はありがとうって言いたくてさ」

「今さら気にしなくていいのに……もう慣れたし」



それでも、なんとなく嬉しくなった。

春休みの平和でいつも通りの一日が過ぎていく……。この一日が僕の男としての最後の一日だなんて知らなかったんだ。

えっマジで!? いや本当に!! ていうか疑ったのは誰だよ!? ……僕か? 僕だね

……。

## #3 Wake up sweet girl

麻琴との買物から一夜明けた朝のことだった。

いつもよりは早く起床し、階段を降りて洗面所に向かう。

今朝は不思議な感覚だ。身体全体は軽いのだが肩は重い……。昨日の荷物持ちで筋肉痛かな？ 重いものを買った記憶はないのだが……。靴を買ったのだが、ブーツのよ  
うな重いものではなく、サンダル系だった筈なのだが……。

それに視点が低い気がする。10センチは違う気がする。

「ん、ん〜」

軽く伸びをしながら階段を降りきると珍しく母が台所に立っていたのだが、僕の顔を見ると途端に驚いた表情をした。春休みにしては早起きをしたが、驚くようなことではないだろうに。

洗面所で顔を洗い、歯ブラシを取ろうとしたら……。おや？ 鏡に写っているのは女の子だ。僕の知らない女の子が何故に僕の家洗面所に？ 思わず顎に手をあてて考えようとしたら、鏡に写るその少女も顎に手をあてたのだ。そもそも、着ているジャージが僕のだ。てことは……。つまり、僕！ この鏡の娘って僕！

「ど、どういふことなの〜!!」

慌てて洗面所を飛び出す。今日ほど洗面所から居間の距離の短さに感謝した日はない。ごく僅かな時間で廊下を移動し、引き戸を力いっぱい開ける。……力なくなったなあ。

「母さん!! どういふことになっているの!？」

自分の耳に届く声が自分のではないことによく気付く。優しく甘い可愛い声だ。

母さんを問い質しても意味はないだろう……。でも、どうしたらいいのか全く分からない……。懊悩とする僕を余所に母さんはのんびりと引き出しを開け閉めしている。

「保険証とかアルバムを見てみたけど、姫宮悠希は女の子だと書いてあるのよ。にしても、背が低くなつたねえ」

立ち上がった母さんが歩み寄ってくる。年齢を感じさせない大きな眸が目の前にある。こうも視線が近いということは……160を下回っているのか……。せつかく成長したのに……。

「それもそうだけど……本当に可愛いわね、あなた」

ダメだ……。この状況は。母さんが恍惚とした表情になりつつある……。しかし、ハツと意識を取り戻したようだ。どうしたのやら？

「服よ!! 新生悠希用の服を用意しなきゃ。採寸するわよ!! 脱いで脱いで」

新生って……。未だに少年の魂が残っているためか母の前で脱ぐことに抵抗はあったが、母の機嫌が悪くならないうちに従った方が賢いと悟った。

「私より背は低いのに胸が……。大きいなんて……。辛いわ……。えー上から86の56の83ね。Eくらいかしら。Fでも……。でも、アンダーがなあ……」

僕の耳に届いたのはトップモデルみたいなスリーサイズだった。しかもグラビアの。髪も女の子仕様になっていて背中をサワサワと擦ってきてくすぐったい……。でもすつくくいい香りがある……。小説やアニメだと、柑橘系だとか、花みたいなの……。なんて表現をされることがあるが、僕の鼻腔をくすぐるのはミルクみたいな匂いだ。

「少なくともこの家に悠希に合う下着がない……。うう、どうしよう……。あ、取り敢えずあれか!」

唸っていた母さんはダッシュで二階へ上がり、すぐに戻ってきた。手には一着のワンピースが。

「下着なしでもギリギリ平気なワンピースだから、これを着て服を買いに出掛けましょ。裾は短いけど気にしないで。ゆったりとしたデザインだけど、今の悠希なら胸につつかかって落ちないでしょうに」

微妙なセクハラ発言を受けながらもワンピースを着る。改めてキレイな鎖骨や豊満

なバストに目がいく。男なら大興奮だが、徐々に精神が女の子化してきたのか、興奮とはかけ離れた心持ちだった。

ワンピースは確かに胸に引っ掛かっている。そのせいか短い裾がさらに上がりミニワンピースになりかけている。

足がスースーする……。こんな姉さんの悪ふざけで女装させられた時以来だすると二階から姉さんと夏希が降りてきた。

姉さんなんて開口一番に、

「その蠱惑的な可愛さの美少女は誰!？」

なんて言うし、夏希は夏希で、

「この睫毛のバツサバツサ具合は兄さんだよ!!」

なんて言い出す。いや、事実なんだけど……。むしろ事実であることの方が辛い……。

母さんがチャラツと説明をし、皆も納得した。しかし、それでいいのか姫宮家……。そんなこんなで僕は昨日に続き駅前のデパートに買い物に行くことになった。

## # 4 何はともあれ君が好き

「た、ただいま……」

いったいどれだけの服を買ったのだろうか……。

凄い金額だったなあ……。サイズの大きい下着って値が張るものなのね……。靴も買ったかったし。

やばい、脳内の会話口調が徐々に女の子化してきた……。

それにしても、母さん元気だなあ……。水を得た魚みたい。

「あら、麻琴ちゃんじゃないの。いらっしやい」

あ、麻琴が来ているのか……。今の僕を麻琴はどう見るかな……。いや、そもそも僕が男子だったことすら記憶にないだろう……。不思議なことに僕の友人に僕が男子だったことを覚えているというか知っている人は居なかった。むしろ皆は、どうして僕のメアドを知っているのか疑問に思っていたくらいだ。麻琴もそうなんだろう……。

「悠希よね？ 男のクセに私の服とかの選んでくれちゃう悠希だよね!」

お、覚えている……。だと!!

「そうそう!! その悠希だよ!! 覚えているんだ。良かったあ……」

「驚いちやつたよ。ふいに中学の卒業アルバム見たら悠希の写真がすごく可愛い女の子になつててさ。試しに友達に『悠希ってすごく可愛かつたよね』ってメールしたらさ、『男の子に生まれたらとつくとくに告白して玉砕されたらうね。ていうか玉砕すんのか!!』って返信きたもん」

メールの相手はあの人なんだろうなああと中学時代のクラスメートを思い出しつつ。

「ま、とにかく悠希の服を買ってきたから悠希は着替えようか。夏希は出ていきなさい」身体は女の子なので、夏希を追い出しワンピースを脱ぐ……。麻琴から歓声が聞こえた気がするが気にしたらいかん。買ってきた服をてきぱきと着ていく。

買ってきた服は白や薄いピンクといったシンプルな色を中心に、グリーンやオレンジといった温かみのある色遣いのものばかりだ。

今着るトップスをカットソーしてみたのだが、胸元スースーするなあ……。スカートは落ち着いたカラーリングのミニフレアだ。

心もとない短さだなあ……。とはいえ女性陣には好評のようだなによりだ。

すると突然、麻琴がわた……。僕の手を取って外に出た。いかん、一人称までブレてきた……。

「どうしたのさ突然？」

麻琴は俯いたままボソボソと話し始めた。

「女の子になった悠希を見て、言う機会はなくなっと思ったけど、私は悠希が好きだった……。一人の女の子として。でも……。女の子になった悠希が——」

麻琴……。僕は彼女の想いに気付けなかった……。そんな風に想われていたなんて。

「女の子になった悠希があまりにも可愛くて、今の悠希の方が愛せそうな気がするのよ!!」

僕のさつきのしんみり感を返せ!! 何を大声で!

ひでえよ……。これはひどい……。想定外だったなあ……。確かに麻琴は可愛いものに目がないけど……。あ、今のは自分が可愛いって言いたかった訳じゃなくて……。面倒だな!!

はあ……。どうやら、僕が美少女になったせいで幼馴染みが百合に目覚めたみたいで  
す。



## #5 買い物をしよう！

「いろいろ考えなきやいけないわね」

麻琴の衝撃的な告白をなんとか保留にしてもらった夜。夕飯の席で母さんがおもむろに口を開いた。

「何を？」

食卓につく唯一の男子になってしまったことを全く気にするでもない夏希。そんな夏希が母さんに尋ねると、母さんは僕の方をじっと見て口を開いた。

「まず、悠希のことについて。部屋の模様替えの要ありね。あと学校のこと。今の悠希を共学の高校に入れるのは不安ね。あと二週間で新学期。それまでに女子道をあらかじめマスターしないと、隙だらけの女の子になってしまい、男子高校生たちに……。これから先は夏希もいるから言えないような内容になってしまおうわ」

「年齢制限かしら？ 年齢制限なのかしら？」

三人の子供がいるとは思えないくらいに艶やかな笑みをうかべる母の、言葉の意味を理解してしまった僕から血の気が引く。嫌だ。ちよつと前まで同性だったはずの人間に……。

「そこで、私のコネクションを使って星鍵女学園に通ってもらおうと思うんだけど? どうかしら?」

「……うはあ。悠希も星鍵に入れるんだ。というか、コネって?」

「光さんがプロデュースしているアイドルのお母様が経営なさっているの。もちろん、私とも仲良くさせてもらっているわ」

「……なるほど。道理で私も通わせてもらえた訳だ」

星鍵女学園というのは、市内中央部にある中高一貫の私立女子校だ。もちろん、高校受験の頃は男子だったから、姉が通っている学校以外に認識を持つてはいなかった。ただ……。

「そしたら……麻琴と離れ離れになっちゃうじゃん……」

自分でも想定していかないくらいに寂しげな声が出た。確かに麻琴は僕が好きだといった。女の子になった僕をだ。それはつまり……アブノーマルなわけで。遠まわしに母さんは私と麻琴を切り離そうとしているのだろうか。

「麻琴ちゃんも入れてもらうつもりよ。あそこ、陸上で活躍できる女の子を喉から手が出る勢いで欲しているから。授業料免除くらいしてもらえるだろうし」

分らない。母さんの真意がさっぱり分からない。ちなみに今日の夕食はおろし大葉のハンバーグ。こちらさっぱりである。……言うてる場合か。

「女子高に通うことに反対はしない。麻琴がいるなら尚更。でも……模様替えは意味ある？」

僕が母さんに質問すると、ずっと食べることに集中していた夏希も、確かにと声をあげた。母さんは察しの悪い僕らになんだかなあといった表情をしながら答えた。

「今の悠希の部屋なんて女の子が過ごす部屋じゃないじゃない！ 壁紙から津学習机から……あと、クローゼットだよ！ 置かなきゃ!!」

まあ、体格が変わった以上、もろもろの家財を買い換える必要があるんだろう。それは分かる。……夏希の部屋も去年、学習机や椅子を変えたんだよなあ。しかも成長に合わせて大きくできるやつ。僕のは……結構長く使っているんだっけ。

「家具屋？ ネット？」

聞けばモールとは逆方向にある家具屋まで行くそうだ。

翌日向かった家具屋では、壁紙やカーテン、ラグや机といったインテリアを買った。模様替えなんて初めてだけど、まさかここまでの金額が動くなんて。水色系が好きなのは変わらないけど、寒々しくなりそうだからグリーンをベースにコーデした。服と同じで大事なものは色調とバランス。ある程度自分でものを決めてから、母さんと相談して最終決定をした。現在、部屋にあるものは捨てることになるので、廃棄の準備には夏希が

大活躍だろう。……非力になったことを再確認させられた。

あと、移動中に母さんのところへ星鍵の理事長である星井さんから入学を許可するという連絡があったため、洋装店に立ち寄って制服も作った。グレーをベースとしたブレザータイプ。姉が着ている姿を何度か見ているので、特別に新鮮という感じではない。ただ……試着で自分が着るとなると。まあ、昔の自分の面影なんて見いだせないが。

「うんうん。似合うわね。流石、私がデザインした制服ね」

……今、軽く衝撃的なセリフが。

「これも母さんの作品だったの!? 制服まで作ってるの!？」

「ほら、この制服って四年前に新しくしたでしょ?」

そう、姉が入学する年だ。どうやら、制服のデザインを引き受ける代わりに姉が入学できたのだろうか。まさか……。

「元はと言えば、星井さんの娘さん。まあ、アイドルのね。彼女に似合う制服をデザインしてくれてという依頼でね」

「なるほど。じゃあ、先輩にあたるのかな?」

「そうね。星鍵にはアイドルとか役者とか声優さんとか、副業を持っている女の子がちらほらいるのよ。別に、そういう科があるわけじゃないのよ? あ、家に資料があるから見とくのよ。麻琴ちゃんの家にも郵送してあるから」

制服購入の手続きを済ませながら淡々と話す母さん。ちなみに、麻琴の制服は姉のものが流用されるらしい。……あの二人が姉妹じゃないかというくらいに体格近いし。

「さてと……明日からは特訓ね」

「と、特訓?!」

母の運転する日産リーフで家に向かう車中。母が僕に言った特訓という言葉。その意味を知るのもう少し先になる。

## 不本意ながら花の女子校生です

## # 6 初登校です

お母さんによる修行が始まって二週間が経った。いよいよ、新学期である。

ボクは新品のブレザーに腕を通し、リボンタイを正す。指定カバンに持ち物は全て入れてある。後は、カバンのポケットにケータイをしまい、櫛や絆創膏をブレザーの内ポケットに入れる。

「よし・準備万端だね」

ちなみに、ケータイには中学時代の男子友達のアドレスがかなり入っていたので、お母さんの指示で機種変更。ついでと言ってはいけないが、スマホに新調することになった。前々から欲しかったから嬉しいのだが……家族と麻琴のアドレスしかないケータイに一抹の寂しさを感じるのは……仕方ないよね。買い換えて一週間しか経っていないので扱いなれていないのだが。

この二週間で家族への呼び方というのも改め、母さんがお母さんになった。姉ちゃんもお姉ちゃんになった、と。基本的に丁寧な言葉遣いを心がけるようにしているし、身だしなみや立ち居振る舞いも、お母さんに徹底的に教え込まれた。あとは力が弱くなっ

てしまったので、重いフライパンを効率的に持つ方法だったり、小柄になった身体に慣れたり、思いのほか忙しい日々を過ごした。あと、一人称だけは可愛いからと、ボクで通すこととなった。イントネーションが少し僕とは違うらしい。まあ、ボクはボクでも構わないけど。

「それでは、行つてきます」

玄関を開け高校生としての第一歩を踏み出そうとするのだが……。

「おはよう悠希!! 朝から美人さんなんだから!!」

麻琴の様子が奇つ怪だ……。こんなことをする女の子じゃなかった筈だが……。

「久々ね、悠希と外で話すのは……。二週間も家で缶詰になつていたのね……。思わず缶切りを探しちゃつたよ」

麻琴に悠希と呼ばれると、つい昔みたいな振る舞いをしてしまう。

「メールで私のことをユウちゃんと呼んで呼んでつて伝えてあるはずよ?」

なので、なんか無難なあだ名を付けることで対策しようとしたのだが……: 本人が使おうとしないのだ。

「どんなことがあつても、悠希と同じ学校っていうのは嬉しいね。しかも、陸上部で成果を上げれば学費免除でしょ? 堪らんねえ。あ、星鍵に進んだ同級生ついていないから、悠希と違うクラスだつたら嫌だなあ」

まあ……それは認める。ていうか話聞かないなあ。

「にしても制服似合うなあ。こう、チエツク柄のスカートから覗く足がさあたまらんなあ！　ちゃんとパンツ穿いてるかあ〜？」

「スカート捲らない!!　やめてよ……本当に。ていうか、穿いてるからね!!」

まさか麻琴からセクハラを受ける日々を送るなんて、考えてもいなかった……。

何度も迫る魔の手をかわしながらの登校。朝からテンションの下がり幅がひどいな……折角の高校生活なのに。まあ、図らずも花の女子高生としてですが。

ボク達の通うことになる星鍵女学園高等部は進学率こそそれほど高くはないが制服も可愛く、校舎も新しいので志願者数はそれなりに多い。……そんな学校に二人もねじ込んでしまう母のコネクションって凄い。

意外と風格のある校門を抜け、テニスコート沿いの窓に貼られたクラス分けの紙を遠目から見て名前を探す……あ、

「麻琴。幸か不幸か同じクラスよ」

それはストレートに幸せって言うてよ!!　なんて言っちゃ麻琴をスルーして教室へ向かう。

なんとなくソワソワした雰囲気とこちらへの視線を感じた。



座席表を見ながら着席する……。ボクの前には麻琴が着席した。それは奇しくも初めて麻琴と出会った時と同じだった。

## #7 女子高生活スタートです

取り敢えず麻琴にこの二週間の話を事細かに話してやった。そうしてのんびりしている。

「君ら二人して美人だね。どこの中学校？ つとその前に自己紹介。アタシは初美綾はつみあやっていうの。好きに呼んでね。そうそう、中学は田島南だよ」

颯爽と現れて、手口のいいナンパのように話し掛けてきた少女を眺める。背は麻琴より高く、スポーティーな印象を受ける。ペツタンコ感が否めないが自覚があるのか、さつきからボクの胸元をチラチラ見ている……。このムツツリさんめ……。

「よろしく初美さん。ボクは姫宮悠希で、こっちは雛田麻琴よ」

「中学はすぐそこの土橋一中だよ。悠希は幼馴染みで、私の嫁。盗っちゃだ——あた  
!! 何すんのさ嫁!?!」

叩かれても尚、ボクを嫁と呼ぶ麻琴に制裁をもう一発だけ下し初美さんに向き直る。

「勘違いしないでよねっ。そういう関係じゃないんだから!!」

……しまった……なんかツンデレみたいな台詞を口走ってしまった。

「まあ、ツンデレっぽい部分もあるけど本当は優しくいい娘だから。よろしくな、綾」

麻琴がギリギリのところまで話を結んだ。初美さんは自分の席に着いた。『は』から始まる名字だから近い席だろうと思つたが、麻琴の前の席だつた。

それから暫くすると、担任の男性教師が入つてきた。三十路だが、そこそこ若く見えた。容姿も悪くなく女子生徒からの評判も良さそうだ。元男子の自分が言うのもアレだが……。

副担任は女性で、こちらは年齢に対してさらに幼く見える。採用から二年目の先生らしいが……、この人つて車の運転をしても平気なのかと疑いたくなるほどだ。正直言つて同い年くらいにしか見えない。ちなみに、ボクが入部しようとしている料理部の副顧問をしているようだ。

さて、先生の紹介も終わり身体検査となつた。女子高とはいえ、更衣室で着替える。まあ、担任みたいに男性教員も数名いるから当然だろう。ちなみに、男性教員がいるのは防犯や学校行事での力仕事要員だと予想している。

「麻琴、ボクは……」

そう、いくらお母さんの修行を経て女子力を高めたからつて根は少年のままだ。女子の着替えなんて……。

「悠希は私だけを見ていればいいの」

……それもアウトでしょうに……。

微妙に気後れしながらも入った更衣室の窓には厚手のカーテンがされていた、入り口の戸のガラスもすりガラスになっていた。また、カギもかけることができる。こういった細かい心遣いが女子達からの人気に繋がるらしい。

壁には棚が据え付けられ、そこに服を置けるようになっていた。

その棚の方を向いて着替えを始める。取り敢えずスカートの下から短パンを穿き、スカートを下ろす。一息吐いてからブレザーを脱ぎ、リボンタイを取る。ブラウスのボタンを幾つか外すと、

「やっぱり大きいな……クラスでダントツじゃないか？」

「綾もそう思う？ だよねえ」

初美さんと麻琴の会話が筒抜けなんですけど……。無視して体操服を着る。

……肩こり、辛いなあ……。

体操服に着替えたら学校のアチコチを回って検診を受ける。分かったことは正確な身長と視力が落ちたことくらいかな。席によっては眼鏡が必要になるらしい。女の子になってから視力が落ちたような気はしてたし。

残りの午前には検診に全て費やされた。お昼はボクと麻琴と初美さん。それから、初美さんの親友の支倉明音さんとお弁当を囲むことになった。明音さんは、最初に座席表を

見た時にはあかねさんだと思っただけ『音』の字が『と』と読むことを初めて知った。

それはさておき、お弁当です。今朝から丹精込めて作りましたよ。つい気合いが入っちゃったや。甘めの玉子焼きにタコさんウインナーや彩りのトマト

一番のこだわりは小さな唐揚げ。女の子になつて食べられる量は減ったけれど、幸いにして味の好みは変わらなかった。鶏肉に下味をつけて、あまり脂っこくならないように注意して作ったのだ。レモン汁をかけてサッパリと……って麻琴!!

「一つ貰ったよ。また腕上がった？ 中学の頃に貰ったのより美味しい!!」

いつもだ。ボクがお弁当を作ると麻琴が必ずどれか貰っていつてしまう。唐揚げがあると確実に唐揚げを……。二人して好物なのだから仕方ない……。でも!

「あなたのために作った訳じゃないんだからね!! 褒められたって……。うう」

「まただ……。ツンデレじゃないんだよボクは……。八重歯ないし。いや、八重歯があったらツンデレって訳でもないけど……。」

「ごめんな。でも、あまりに美味しそうで」

くう……。最近、ボクの幼馴染みが天然ジゴロな気がする……。

## #8 あらためまして

お弁当も食べ終わり、のんびりタイムです。

そこで改めて明音さんを観察してみる。背はそれほど高くなくて、ボクと麻琴の中間くらい。髪型はツーサイドアップといってツインテよりも結び目が奥だってお母さんが言っていた……と思う。ツインテは真横だけどツーサイドアップは違うみたいな判断でいいのかな？ 違ったら教えて!! ……って私は誰に聞こうとしたんだろう……。ちなみにボクは、いろいろ試した末にポニテにした。ゴム一個で済むし可愛いし。でもなあ……ツインテいいよね……。でもツインテにしたら麻琴に、やっぱりツンデレはツインテ似合うよなって言われそうだからやめておこう。

明音さんは可愛さもある。小動物系で護りたくなる可愛さだね。あどけないという印象も受ける。

「明音さん、支倉っていう名字も珍しいよね？」

明音みんとという一発じゃ読めない名前もだが名字も珍しい。「なんかねえ、北の方にそんな地名があるらしいよお」

……この娘、ユルいな……地震とかきたらアウトな娘だね。

感じた印象に狂いはなかったのよ。

「気になるんだけどさ、さん付けは……会って初日だから仕方ないけど……何であたしだけ名字で呼ばれてる？　ねえ、ユウちゃん？」

話しに乱入したのは初美さん。初美さんは……だって、

「ナンパみたいな登場だったし、好きに呼んで……」

ボクは初美さんを初美さんと呼ぶけど、初美さんにはユウちゃんって呼んでももらっていません。あまり悠希と呼ばれるのが好きではないというキャラ付けですね。

「そうだけど……むむ」

「ま、初美さんって呼ばれて名字だと気付かれる人なんて男の人くらいなんじゃないかな？」

麻琴が正論を言った。麻琴は良くも悪くも素直だ。そこが天然ジゴロである所以だろうか。

そうして喋っていると昼休みの終わりのチャイムが鳴った。それぞれが席に戻る。とはいえ、四人して一直線だけどね。明音さんを先頭に四人が続く。暫らくすると担任の村瀬先生がプリントの束を抱えて戻ってきた。

どうやら、午後の時間を利用して自己紹介をするようだ。それと並行して掲示物だと

か係り決めも行うらしい。三十人程のクラスなので一人一分でも三十分以上かかる。学期初めは忙しい。

「じゃあ、一番から。井口」

先生のやる気のない声から自己紹介がスタートした。この先生、大丈夫なのだろうか。勤務態度ないし健康状態とか。村瀬先生を眺めながら首をかしげていると、麻琴が振り返って口を開いた。

「悠希、何て言えばいいかな？」

「え、ボクだつてこういうのは苦手なだけ……」

「そうだったね。まあ、もう少し考えてみるよ」

昔から自己紹介は苦手だった。好きなことで家事を挙げると笑われたからである……いや、今ならもういいのかな。諸々考えているうちに、自己紹介は明音さんの番まで進んでいた。

「出席番号21番、支倉明音です。出身校は田島南です。吹奏楽やってみました。えつとお……そう！ 明るい音って書いてミントと読みます。アカネさんと読み間違えられることが多いので困ったら名字で呼んでくださいね。名字の読み方をド忘れしてしまつたらクラちゃんって呼んでください。たぶん振り向きますから。それじゃあ、こ



れからよろしくですう」

明音さんはあのユルい口調を直そうとしてはいるんだね。直ってないけど……。あと、吹奏楽部だったんだあ。実質運動部だって聞くけど、大丈夫だったのかなあ。

「はい、出席番号22番の初美綾です。呼ばれ方は……。もう気にしません。出身校は田島南中で明音とは親友です。スポーツは実際にプレイするのも観戦するのも大好きです。中学では長身を活かしてバスケットやってみました。高校では新しい競技に挑戦してみたいです。けっこう気さくな人柄だと思うのでガンガン話し掛けてオツケーですよ！ そんじゃ、ヨロ〜」

軽いな……。ノリが。呼ばれ方は気にしないんだ……。責任の所在は……。ボクか……。な？ にしても、バスケットボールやってたんだ……。ふうん。ボクの少年時代―あなたが間違った表現ではないと思う―はインドア派だったからなあ……。今もだけど……。

さあ次は懸念材料の……。

「出席番号23番、雛田麻琴です!! 中学時代はヒナッチって呼ばれるのが多かったの  
で、呼んでくれる方を募集しちゃいます。体の七割をノリとテンションで構成されている人間だって言われたことがあります、それって水分足りてないよね？ ノリとテン

シヨンって水に溶けるのかな？　なんて、どうでもいいことを言っちゃいましたが、好きな食べ物も唐揚げで、好きなものは可愛いものです。特に、姫宮悠希は格別でつ、もうあたしは嫁だと——いてっ……以下略して、よろしく!!」

最後に人差し指と中指の二本を、こめかみの辺りから手首のスナップで決めるジャンプをみたいなモーシヨンを繰り返す麻琴に、アンタなんだよって言いたくなかった。

さて、ボクのことを公然と嫁だとほざく麻琴に制裁をくだして立ち上がる。順場回つてきちゃった……まずは、

「勘違いしないでねっ!!　ボクと麻琴は単なる幼馴染みで、別段深い関係なんかじゃなくて、そもそも女子同士だしそんなあり得ないんだから!!——」——「なによ麻琴!?!」

「落ち着こう？　冷静に、悠希らしくないよ?」

しまった……。またツンデレ現象が……。気が動転していたかも……。でもさ、

「いや麻琴のせいで!!　……ああ、もう!——ふう、あらためまして出席番号24番、姫宮悠希です。重ねて申し上げますが、麻琴とは幼馴染みだけです。土橋一中の出身です。特技は家事全般で料理は趣味でもあります。これから一年、よろしくお願

します」

終わった……。私の高校デビュー終わった……。意外と響く拍手と生暖かい視線に、残りの数人の自己紹介の時間をつつ伏して過ごすのだった……。だつて、

「ボクっ娘だ！」

「ツンデレだ！」

「キャラ濃い！」

「胸が大きい！」

といった声が聞えてくるんだもの。というか最後、それセクハラだからね。いくら女の子の発言でも。

最後に、ボクはツンデレじゃありませんから!!

## #9 部活日和です (前編)

四月も二週間が過ぎ、丁度真ん中の15日を迎えました。桜は葉を青々と繁らせ、涼やかな日陰を作っています。10日から12日までの仮入部期間を経て、四人がそれぞれに部活を決めて本入部となり、ボクは設備に定評のある調理部に入部しました。他の一年生とも仲良くすることができてホッとしています。先輩たちも優しいです。

麻琴は中学の頃から続けている陸上部に入りました。やはり手足が長いと走りもキレイなんだなと実感させられます……。次世代のエースだと一年生ながら期待の声が高まっているそうです。

新しい競技に挑戦したいと話していた初美さんはハンドボール部に入部したらしく、ルールを一から覚えるのは厳しいとボヤいていました。

ユルさに定評がついてきた明音さんは意外とアクティブなようで、中学と違ってマーチングもやる吹奏楽部に入部しましたよ。みんな違ってみんないい。ボクたちの日々は、そんな感じですよ。

「お姫さんは調理部かあ。エプロン姿が似合いそうだね」

クラスでも皆、優しくして現実の女子高つてもっとギスギスしたものだと思ってたけ

ど、そんなことなく安心してゐる。今、話し相手になつてくれているのは後ろの席の本条千歳さん。近所の神社の娘さんで、日頃から巫女さんの仕事もしているらしい。

「千歳ちゃんは弓道部だっけ？」

「そうだよ。覚えてもらえて嬉しいね」

「やつぱり巫女さんだから？」

「それでもないよ。袴に慣れてるからかな。剣道はほら、痛いし」

「そっか。あ、先生だ」

朝のシヨートホームルームがもうそろそろ始まる。陸上部の朝練、終わるの遅いなあ……。

授業の方もかなり慣れてきました。ちなみに、今朝の麻琴はシヨートホームルームに遅刻した。少年時代より学力は向上気味で初テストでなかなかの成績を修めました。とはいえ、明音さんには敵いません……ダントツ一位でしたから。のんびりしているけど、凄く優秀なのです。ボクももつと頑張らなきゃ。

さて、月曜の午後。副担の藤島先生による現代文と担任の石川先生による数学の連打を耐えきると、ようやく訪れる部活タイム。

教室のある西棟一階から家庭科室のある東棟三階へ歩く。人もまばらな廊下の奥に

ある調理室の扉を開ける。星鍵学園高等部には、調理室が二つと被服室が一つあって、調理部の活動は第二調理室で行われる。第二と言っても広さはなかなかで、十個の調理台があり、それぞれにシンクと三つ口コンロがある。壁の一面には調理器具の棚が据え付けられ、どれも清潔に保たれている。本当にいい設備です。流石はお嬢様学校。

部長が来るまでは、活動を始めずのんびりしています。一年生は私を含めて四人いて、クラスも出身校もバラバラ。でも、やっぱり料理が大好きという共通点がある。ボクはそれさえあれば平気だと思うのだ。特に話が合うのは二組の双美希名子ちゃん。

家が和菓子屋さんで、実際に手伝いもするそうです。朝も仕込みがあるから早起きで、片付けも手伝う看板娘の鑑ですね。希名子ちゃんは私に和菓子の色々なことを話してくれます。部活の時間に作ってみたこともありました。やっぱり希名子ちゃんが作った物だけ別格でしたよ。

もう二人は、五組の西村千恵ちゃんと六組の片岡美夏ちゃん。千恵ちゃんのお家は精肉店で、コロツケが美味しいと評判だそう。美夏ちゃんは和食が得意らしく、他の料理も勉強したいということで入部したそう。二年生は二人で、副部長の芙蓉柑菜先輩と経理担当の九重流歌先輩だ。二人とも大人っぽくて美人さんだ。三年生は五人いて、皆さん優しいし料理も上手なんですよ。

さて、部長の高須あまほ先輩が来ました。部長は素甘先輩と呼ばれています。苗字の“ず”と名前の“あま”で、すあま。

「やー、姫宮さーん!!」

部長には見学に来た時から気に入られたみたいです。どことなく麻琴に似た雰囲気を感じる人です……。見た目以外は。部長は小柄で背はボクより低い。髪は短く部活中は大きなコック帽を被っている。夢はパティシエールだそうです。似合うんだろうなあ。あと、ほっぺのもちもち感が素甘っぽいかも。

「部長!?」 急に抱き付かないでくださいってば!!」

戸を開けてから一直線に私に向かってきた部長は私にギョツと抱き付いてきた。そして、

「フローラルな香りがする……」

これだ。微妙な身長差のせいとか、部長は胸に顔を埋めるように抱き付く……。こそばゆいし匂いを嗅がれるのは……。いかんともしがたい……。取り敢えず頭をナデナデしてみると、

「もひゅー、気持ちいい〜」

……もひゅーって何!?

満足する程に堪能したらしく部長の方から離れた。そして何事もなかったように教壇に立って、部活を始める挨拶をする。一週間でこの光景に慣れてしまう調理部員の皆さんには驚いてしまう。さて、家庭科部の活動は月曜の調理と水曜のメニュー製作以外は自由参加のティータイムになっている。今日は月曜なので、料理を作れる日なので。

「今日は、春の行楽にぴったりなイチゴの蒸しケーキを作ります！」

「おお、今日は洋菓子ですか。蒸しケーキ……作ったことないからちよつぴり不安だな……。」



## #10 部活日和です（後編）

家庭科室に甘く芳醇な香りが広がる。少しするとコーヒーや紅茶の香りも加わり、雅なるお茶会に来たような感覚になる。

「では、いただきましょうか」

焼き上がった蒸しケーキはほのかなピンク色で春らしさを漂わせている。

一口頬張れば春の訪れを感じ、二口頬張れば春真っ盛りだ。飲み込んだ後は余韻に浸れる……そんな仕上がりがだった。……まあ、作ったのボクだけどね。ちよつと間を開けてからマイマグに口をつける。

「悠希ちゃんってカフェイン系は苦手なの？」

調理台を挟んで向こう側に座る希名子ちゃんが尋ねてきた。そう、ボクが飲んでいるのはホットココア……正直な話、紅茶もコーヒーも飲んだことがないのだ。うくん、飲んでみようかな……。

「そんなことないと思うんだけどねえ」

そうして喋っていると、

「失礼しまーす。悠希？ 迎えにきちった」

ガラガラと扉が開けられ、現れたのは麻琴だった。

「お!! 君かな? 姫宮さんのフィアンセって!」

フィアンセ!? なにそれ!?

「悠希がようやく素直になってくれたか……大丈夫、悠希のご両親なら理解してくれるよ」

何を言ってるんだコイツ……。

「部長!?! 私は部長に麻琴の話は一切してませんのに、なんで麻琴のことを!?!」

麻琴の近く——というか教壇と扉の間——にいた部長はボクのもとに駆け寄って、「私の従妹が、ほら姫川さんと同じ四組なのよ。で、従妹から凄くユリユリしたカップルがいてねってという話を聞いていてさ」

「ユリユリなんてしてません!!」

「まあ、いいや。入って入って」

「いまいち聞いているのか分からないが、部長は麻琴を自然にボクの横に座らせた。」

「これ悠希が作ったの? 美味しそうだね。いただきま〜す」

麻琴は私の前にあった皿から蒸しケーキをつまみ、口にほうった。咀嚼して飲み込む音にドキドキしてしまう……何故だ。

「お、美味しいな。流石だよ悠希」

麻琴はこつちを向いてニコリと微笑んだ。頬が紅潮している気がしてならない。なんで麻琴相手にこんな状態なんだ……。ボクは……。

「お、お粗末さま。ところで、陸上部の方は？」

麻琴の所属する陸上部は、というか運動部は門限ギリギリまで活動をしている。仮入部の頃は一緒に帰れたが、もう一緒に帰れる回数はメッキリ減るだろう……。そう思っていたんだが……。

「一年生の娘が貧血で倒れて流れ解散になっちゃってさあ……。暇だから来てみた」  
そうなんだ。ま、今日だけだろう。

それからしばらくして、片付けを始める。使った食器類を洗い、水切り籠に置く。最後に窓の施錠を済ませ、挨拶をして下校。家庭科部は礼に始まり礼に終わるのです。

「うくん、なんか微妙に陽の落ちた空っていいよねえ」

麻琴が欠伸の後に伸びをしながら呟いた。確かに空が綺麗だ。雲の白や、空色と茜色……混ぜたような紫に近い色。空を見上げていると、麻琴が囁くように言った。

「ま、空も綺麗だけど悠希が最高だよ」

——っ!!

ボクはなんとも言えない心地だった。顔が赤くなるのが見なくても分かる……。嬉

しいような恥ずかしいような……とはいえ、相手は麻琴だ。

「麻琴なんかには褒められたって嬉しくなんかないんだからね!!」

無意識にボクは駆け出していた。赤みを帯びた顔は夕陽のせいにはできて、このにやけた顔は隠せないから。

ま、インドアな私が陸上部の麻琴から逃げれる訳もないのにね。

そんなことすら気付けなくさせる……。これが、乙女心だったりして。沈む夕焼けを見ながら、そんな想いがよぎっていった。

新入生研修というか、林間学校だよね

#11 新入生研修　　その前の話

調理部内で麻琴の存在が知れ渡った週の金曜日、四月十九日。高校生になってから初の大規模行事の説明会が開かれた。まあ、いわゆる学年集会です。

「さて、来週の水曜日から金曜日にかけての新入生研修の話は前々からしていると思うが、今日はその概略を話すぞ」

学年主任の男性教諭——英語科の先生である黒瀬先生——から伝えられる内容は、新入生研修はボクたちが住む高葉市北部で隣接する温泉街花馬市のさらに北にある山中の研修センターで行われるということ。研修センターは星鍵学園の所有なので、小学校や中学校の林間学校で行った場所とは全然違う方向にある。

あと、研修の目的。大自然の中で、協力して生活することで協調性を養い、社会で生きていくという実感を持つこと。あと、ガスや電気をあまり使わないで生活することから、非常時の避難生活に近い日々を体感することなどが挙げられている。

ちなみに、班分けは各クラス座席順で縦一列の五〜六人班。普段の掃除と同じ班分けだ。ボクらだと、明音さん、初美さん、麻琴、ボク、千歳ちゃんの五人だ。

あとは代休の話。四月の二十四から二十六までが研修で、代休は昭和の日の翌日から憲法記念日の前日。つまり、四月の三十日から五月の二日が充てられる。つまり、二十七日から十日間の休みがもらえるのだ。流石の私立高校。公立には出来ない芸当だ。これには一年生の多くがどよめく。

「それでは、あとは各クラスで役割分担等を決めること。解散。六組から速やかに教室へ戻りなさい」

「ということ、縦一列が班なのですが、班長と保健係だけ決めてください。あ、机を下げて各班集まって決めてくださいね」

教室に戻り、石川先生の指示に従って机を後ろへ下げ、麻琴たちと円になって座る。

「班長、どうしようか?」

取り敢えずボクが皆に聞いてみると、

「悠希がいいな」

「そうだね、少なくともアタシとヒナッチにはムリかなあ」

「そうだねえ。わたしもちよつとお」

「ですつてよ、お姫様」

あれ? なんか、ボク以外選択肢がない感じなのかな?

「じゃ、じゃあボクが班長ね。保健係は千歳ちゃん、お願いね」

「はいはい。ウチにお任せなんよ」

たおやかな笑みで快諾してくれた千歳ちゃん。最近は一緒にお弁当を食べるメンバーにも入ってくれた。このメンバーなら皆仲良しだし楽しい研修になりそうな気がするなあ。

「班長と保健係が決まった班は報告に来てください。研修のしおりを渡しますから」

班の番号は窓から何列目かの数字が振られているので、ボクらは五班だ。

「五班、班長はボクで保健係は千歳ちゃんに決まりました」

「分かりました。では、これがしおりでこっちが健康チェックカードね。しおりには持ち物分担表もあるから、誰が何を持つか決めてね。森末さんも聞えたかしら？」

「はい、大丈夫です」

後ろに並んでいたクラス委員長の森末さんと入れ替わるように、皆の方へ戻る。

「はいこれ、しおりね。これの……31ページを見て。ここに、各自の持ち物と班単位の持ち物があるから、分担を決めようか」

腕時計だとかペンライトだとか、一人持つていけばいいものやレクリエーション関係の持ち物が記載されていた。

「じゃあ、ウチはこれを持ってこようかな」

「わたしはく、これなら大丈夫だよお」

「これって百均ので平気？」

皆が率先して決めてくれたおかげで、思っていたより早く決まった。

「持ち物担当が決まったら今日はチャイムが鳴るまでしおり読んでいてね」

そう言いながら先生が既にしおりを読んでいた。先生が研修に行ったのは七年前。ボクたちが行くセンターは五年前に建て替えられたそうなので、先生も初めての場所ということになる。温泉地花馬市に建てられているため、お風呂は温泉を引いているらしい。オリエンテーリングだとかナイトハイクだとか、よくあるイベントもあるらしい。あれこれとしおりを読んでいるとチャイムも鳴り、

「森末さん。号令お願いします」

「はい！ 起立、礼！」

「「ありがとうございます！」」

「じゃあ、机を戻して、掃除がある班は終わったら帰っていいわよ」

机を戻しながら、今週は掃除がないことを喜ぶ。

「それじゃ、あたし部活だから気をつけて帰りなよ」

「分かってるよ。じゃあ、頑張ってるね」



新入生研修直前の火曜日は午前中で授業が終了し、各自帰宅し明日からの準備をするための時間となっている。初美さんや明音さんは自転車通学なので、明日は流石に家人に送ってきてもらうらしい。二泊三日とはいえ、荷物は女の子にとつては重いものとなる。ボクや麻琴は徒歩通学だけれども、明日はお母さんに送ってきてもらう予定になっっている。

「さて、確認だけしておこうかな」

ボクは一昨日の日曜日に準備万端の状態にしておいたため、今日は確認以外にすることはない。

「えっと、服の類がこの袋で、体操服二着とジャージ上下、こっちは入浴時に持っていく小袋で、それぞれ替えの下着が入っていて、寝るときのTシャツも入っていて……問題ないね。こっちの小さいリュックにはこのしおりと、明日の昼食と水筒が入る、と」

持ち物を完璧に揃え、大きい方のバッグを玄関に置いておく。丁度その時、  
「ただいま。あ、悠希。そっか、もう研修の仕度終ったんだ」

星鍵のOGでもあるお姉ちゃんが大学から帰ってきた。手を洗いに洗面所へ向かうとしたお姉ちゃんが急に振り返って、

「そうそう、お父さんが日本に今日戻るって。悠希と入れ替わりになっちゃうかなあ」

仕事の関係上、家を空けることの多い父は今、某アイドルグループのアジアツアーの

最終日で台湾にいるのだろうか。どうも、ボクに会いたいがために急いで帰国するらしいのだが、ごめんよお父さん。ゴールデンウィークはいるから。

「お父さんのことだから、悠希をアイドルにしようなんて考えているんだろうね」

姫宮家の長女として生まれたお姉ちゃんは、昔はバレエだとか普通のダンス教室にも通ったし、ボイストレーニングまでしたことがあると聞いている。

「ど、どうだろうね。ボクは……やりたくないかなあ。あんまり、目立つの苦手だし……」

「だよねえ。悠希はおしとやか系だもの。あと、芸能界って危ない感じするし」

姉妹二人で頷いているところを、帰宅してきた夏希に見られ、どういう状況か聞かれたのはここだけの話。

「って、もうこんな時間なんだ。夕飯の仕度をしないと。って、明日からお姉ちゃんと夏希だけで大丈夫？」

朝ならお母さんもいるけれど、仕事で帰りが遅いから夕飯時は不安しかない。

「大丈夫だって。カレーくらいなら私でも作れるから」

「むう、そうは言うけど……」

「大丈夫だって」

不安が解消されたわけではないけれど、お姉ちゃんも十八歳だし少しは何か出来るだ

ろうと思うことにしておく。

「じゃあ、夕飯の仕度も手伝ってくれるよね？」

新入生研修前夜、姫宮家の夜はゆっくりと過ぎていく。

## # 1 2 新入生研修 ～その朝の話～

そしてやってきた四月の二十四日。朝、大荷物を持って麻琴が我が家まで歩いてきて、二人分の荷物をリーフの後ろへ積み込む。

「二人とも、準備は平気？」

お母さんの確認にボクも麻琴も頷く。ちなみに、麻琴の分のお弁当もボクが用意した。

「それじゃ、行ってくるね」

お姉ちゃんに見送ってもらい、一先ず学校を目指す。ちなみに、お姉ちゃんにはあと数時間で帰ってくるお父さんへあれこれ説明するお仕事が残っている。徒歩だと二十分くらいの距離を、すーっと走りぬけ、星鍵女学園の高等部へ到着。敷地内の駐車場で荷物を降ろし、

「行つてきます」

「お母さん、悠希のことは任せてください！」

お母さんを見送ってから四組と書かれたプレートのあるバスへ向かう。バスへ乗り込むと、副担任の藤島先生から今朝の体温だとか体調についてを健康チェックカードに

記載するよう言われた。点呼が済んだら回収するようだ。

「バスの席は自由なんだね。あれ？ 悠希ってバス酔いするっけ？」

「ボクは大丈夫だよ。麻琴こそ大丈夫だっけ？」

最後に同じバスに乗ったのは中学三年の修学旅行なのだが、その時はまだ異性同士だったため、今日みたいに隣同士に座るということはなかった。

「じゃあ、あたしが通路側でいいよ。ほら、悠希」

麻琴に促され窓側の座席に腰を下ろす。窓の外を眺めると、バスへと向かうみんなの様子がよく見える。まだ出発していないけれど、普段より高い視点で景色を眺めるというのもバス移動の楽しみだと思う。そんなボクを見つめる麻琴の姿が窓ガラス越しに見える。

「麻琴？ どうしたの？」

ボクが首を左へ動かすと、至近距離に麻琴の顔が。息がかかる距離だ……ちよつとだけ脈が上がる感じがする。そんなボクを見ながら、麻琴はにこにこしながら、

「こうしていれば、外の景色も悠希の横顔も見放題だね！」

なんて言うんだ。恥ずかしくなったボクはシートの上で膝を抱えて顔を隠すのだった。なお、研修に向かうボクらの格好は学校指定ジャージなのでスカートの内が見える心配は無用だ。

「着きましたよー！」

バスに全員が揃って点呼や健康チェックカード回収を含めた朝礼を行い、学校を出発して小一時間。ボクたちは既に星鍵学園が擁する研修センターに来ていた。ちなみにここ、新入生研修の他にも各部活動の合宿なんかにも使われている。まあ、一年に数日しか使わないわけがないから当然か。

「あつという間だったね」

「近いもんねえ……」

高葉市北部に住む初美さんや明音さんはちよつとだけがっかりした表情をしている。同じ高葉市でも西から来ている千歳ちゃんはいつも通りといった感じだ。

「各自、荷物を割り振られた部屋に置き次第、広場に集合すること。開始式を執り行いますからね！」

バス酔いから解放されて、ややテンションの高い石川先生の号令のもと、動き出す四組一同。部屋割りと班割りは同じなので、五、六人で過ごす部屋の広さは推して知るべしである。

「お姫さんの部屋もあんくらい広いん？」

広場に出席番号順一列で並んでいたら、後ろから千歳ちゃんに耳打ちされた。まず息

がくすぐったかったし、内容がなんとも言えず反応に困った。

「冗談やって。流石にあんかい広いとは思っておらんよ」

「でもまあ、あの半分よりは広いかなあ。うろ覚えだけど、ボクの部屋は……八畳間だと思っ」

「そうなんや、お姫さんもそんなくらいか」

「ちーちゃん家って神社だっけ？」

会話に麻琴が加わってきた。ちなみに、初美さんは眠そうな明音さんの意識を繋ぎとめようと必死だ。

「そんなに格式の高い場所でもないんやけんね」

「じゃあ、その訛りは？」

それはボクもちよつと気になっていた。千歳ちゃん、たまに関西の人っぽい訛りが混ざるのだ。関西っぽくないのも混ざるけど。

「母が関西の人でね。しかも母方の祖父は四国だし、父はこっちの生まれだけど父の両親が東北の人だったから、ウチ、なんかあちこちの方言に囲まれて過ごしたんやよ」

「す、凄い家系だ……」

「まあ、神社の血筋って嫁いだり婿入りしたりで、あちこち行ってまうみたいだよ」

「なんか……そういうのイヤじゃない？」

少しトーンを落とした声で尋ねる麻琴。千歳ちゃんはいつもと同じさっぱりとした笑顔を浮かべながら、

「ウチはそれでええと思ってるんやよ。でもまあ、高校三年間くらいは女子高で気ままさせてもらうけど」

そう答えた。自分の運命をきつちりと受け入れている千歳ちゃんを、ボクは純粋にカッコいいと感じた。自分がこうして、女の子になってしまったのも……受け入れるべき運命なのだろうか？ 不意にそんな疑問が脳裏をよぎった。無論、答えなんか出ず、開始式の時間を費やすばかりだった。



# #13 新入生研修 1日目 そのいち

新入生研修の初日、その午前中は学年レクリエーションの時間として費やされる。このレクは学年主任の苗字をとって黒瀬杯と呼ばれるらしい。

第一回となる今回の種目はクラス対抗ドッジボール大会だ。研修センターには部活の合宿にも使われるため当然ながら体育館がある。しかも、高校の体育館と遜色ない規模のものだ。ドッジボールのコートなら四面使えるらしい。

各クラスを二つに分けて八人を内野にして、他は外野になる。必ず四回は内野を経験しなければならないというルールもある。チーム分けは出席番号の偶数奇数。ボクがいるチームは四組のBチームで、同じチームには二十二番の初美さんや、三十二番の森末さんがいる。

さらに、このドッジボール。試合時間を短くするために、各チームのリーダーにボールを当てれば勝ちという変則ルールが加わっている。いわゆる王様ドッジのルールだ。四Bは委員長である森末さんがリーダーだ。

「やつほー、悠希。楽しんでる?」

「まあまあかな。そっちは……楽しそうだね」

表情を見ていれば十分に分かる。結構な数の試合をこなして、とうとう四A対四Bの一戦になった。向こうのリーダーは麻琴らしい。

「いくよ悠希！ 君のハートを狙い撃ち！ って、取られちゃった！」

宣言通り、ボクの胸元に飛んできたボールを抱えるようにキャッチ。そのまま麻琴の足下へ投げ返す。

「あだ！」

「はい、試合終了了！」

王様が討ち取られ次第終了というルールが一番光った試合ではなからうか。開始二投で決着がついた。

「うう、悠希相手なら初めての負けでも悔いはないよ……」

そんなこんだで、四組はAチームの十一戦十勝とBチームの十一戦六勝の成績で第一回黒瀬杯を優勝というかたちで終えたのであった。

黒瀬杯の途中で昼休憩を挟んでいたもので、終了後体育館の掃除まで全て完了したのが午後四時ごろ。午後五時から一組と二組が入浴。

ちなみに、この施設には浴場が二つあるため、一組の人とは別々のお風呂ということになる。最後、五組と六組が入浴終了となるのが午後六時半。各グループ30分しかも

らえないのだ。

で、今は入浴前の集会。入浴待ちもしくは入浴後の過ごし方の諸注意と、

「ええ、それから。体調の関係で入浴できない生徒はシャワー室があるので、会の終了後、一組と二組の者から養護教諭の霜野先生に申し出なさい。では、解散！」

月の障りでお風呂に入れない人たちはシャワーなのか。ボクは月初めに経験したけど、あまり痛くはなかった。たしかに、出血はしたけど。再来週辺り来るのかなあ。

「麻琴？」

目の前にある麻琴の背中が少しずつ丸くなっていく。どうしたのだろうか？

「あたし、生理きてるから……悠希と一緒に風呂入れない……。シヨックすぎる」

「そんなことで落ち込まないでよ。まったく……」

「むう……」

むくれてるなあ。別にお風呂なんて一緒に入ってもねえ。

「ヒナツチ。大丈夫だよ、わたしもお風呂入れないから」

「そつか。明音っちもか。シャワーの時は一緒に行こうか」

とぼとぼと歩く二人を見送っていると、初美さんがおもむろに口をひらいた。

「明音、大きい風呂が好きでな、今度、銭湯でも連れてやろうかな」

「初美さんが珍しく大人っぽく見えました」

「失礼だなあ。まあ、アイツが子供っぽすぎるんじゃないかねえの?」

女の子同士の友情というのは、まだよく分からない部分ではあるが、初美さんと明音さんの友情はボクと麻琴との関係に似ているかもしれない。

「ほんじゃ、お二人さん。部屋に戻ろうか」

「そうだね」

「だな」

取り敢えず今は、千歳ちゃんに促されて部屋に戻ることとなった。

# #14 新入生研修 1日目 そのに

「トランプしようよ！」

部屋に戻って開口一番にこれである。リュックから取り出したトランプ片手に、麻琴の一言からトランプ大会が始まった。とはいえ、時間は三十分しかないのだが。

「取り敢えず、ババ抜きからね」

「はい！」

ジョーカーを一枚抜いてシャッフルし始める麻琴。明音さんが楽しそうに眺めている。五箇所に分けられたトランプをそれぞれ持って、ペアを捨てていく。五人でやると、あんまりペアが発生しない。手札に六枚残してゲームスタートだ。

「どういう順番？」

「時計回りかな」

千歳ちゃんが聞き麻琴が答える。時計回りということは、あれ？ 誰から？

「誰からだよ？」

初美さんが聞き、

「わたしから!!」

明音さんが答える。明音さんが楽しそうでなによりです。

「どれにしようかなあ？」

明音さん↓麻琴↓ボク↓千歳ちゃん↓初美さん↓明音さんの順番になる。

「よおし……これだ！ ああつ」

「麻琴、うるさいよ。よつと、あ、揃った」

千歳ちゃんから取ったカードはスペードのQ、手元にあったダイヤのQと共に捨てる。

「これね」

特に迷うことなくカードを取った千歳ちゃん。場にハートとクローバーの4が捨てられた。それから何週かカードを動かして、ボクの手札が二枚、麻琴の手札が四枚、明音さんが一枚となった。

「うう、上がれないよお……」

ババ抜きでよくある一枚から上がれない地獄を彷徨う明音さんを尻目に、明音さんがさつき麻琴から取ったカードを狙って、

「ハートとダイヤの9、上がりだね」

それから二人で何度かカードを交換し、結局は麻琴が負けた。言いだしつぺのくせにね。

「にしても、ちーちゃん強かったねえ」

圧倒的速度で手札をゼロにしたのは千歳ちゃんだった。

「うちなあ、実はこうゆうの強いんやで」

「それはまさか、スピリチュアルな感じかい？」

ちよつと食い気味に麻琴が聞くと、千歳ちゃんはふわりと笑みを浮かべて、

「そうそう、そういうことや。この手の山奥にも……」

「ちよつ、ちよつと待った！　そういうのダメ！」

「おや？　ああ、寝る前じゃなきやつてことかえ？」

ち、千歳ちゃん……。これ、わざとだよね？　ボクが戦慄を覚えていると、ドアが二

回ノックされて、

「森末ですー。四組、お風呂の時間ですよー。あと、保健係の人は入浴前に先生のところ

に集まるように。以上です！」

ババ抜きが思いのほか時間かかっている、ちよつと助かったよ。ただ、お風呂の後が

不安だなあ……。

「そんじゃ、お姫さんに怖くておもしろい話すんのは、後にしましょか」

「しなくていいよお……」

「あたしは好きだよ、怪談。明音っちは？」

「わたしも平気。綾ちゃんは？」

「ん……苦手って程でもないかなあ」

「決まりや」

「もう！ 先、お風呂行くからね！」

こういう時の単独行動って何処と無く死亡フラグっぽい。まあ、そんな危険な事態にはならないだろうけどさ。

そう思いつつ早足にお風呂場を目指すと、森末さんが一人歩いているのに追いついた。

「あ、森末さん。さつきは連絡ありがとう」

「ああ、姫宮さん。いいですよ、お仕事ですから」

そう言ってこちらを向く森末さん。少し長めのサイドポニーがふわりと揺れる。

「羨ましいです。うちの班はあれほど打ち解けてませんから。まあ、今晚、頑張つて仲良くなるつもりですけどね」

「それなら、ボクのこと姫宮さんなんて呼ばなくていいよ。ユウちゃんって呼んで」

「じゃあ私のことも、もなかって呼んでくださいな。あだ名なんです」

「もなかちゃん！ 可愛いね」



「いやはや、ユウちゃん程じゃないよ」

二人でここにこしながらお風呂場へ向かう。引き戸を開けると衝立があつて、その奥が脱衣所になっている。

「この籠、班別だから、ユウちゃんがあつち、私はこつちだね」

籠の中に部屋から持ってきた着替え袋を入れる。脱いだ服は別の袋に入れて、着替え袋より奥へ。最後にタオルを一本もつて、浴室へ。

## #15 新入生研修 1日目 そのさん

「おお……」

銭湯に近い空間が広がっていた。洗い場がけっこうな数あって、浴槽も大きい。おおよそ30人が入るから当然と言われれば当然か。足触りは悪くないが、滑ることもない床を歩いて、開いている洗い場の椅子に腰掛ける。

「隣、いいかな?」

もなかちゃんに声をかけられて、ボクも隣に座るよう促す。

「ユウちゃん、やつぱり大きいね、胸」

「ちよ、もなかちゃん!」

「ごめんごめんと平謝りするもなかちゃんに、ボクも言い返してみる。」

「もなかちゃんだって、小さい方じゃないだろうし、バランスが整ってて綺麗だと思うんだけどなあ」

膨らみはしっかりとありつつ、ウエストはきゅつとくびれていて、魅力的だと思う。……感覚が完全に女の子になってる。目の前に裸の女の子がいるのに、動揺とか全くない。そもそも、お風呂で自分の裸を毎日みていたせいで耐性が出来たのかなあ。

「ちよ、ユウちゃん！ そんなに見られたら恥ずかしいって」

「あ、ごめん……意地悪が過ぎたね」

「まあ、褒めてもらったわけだから、嬉しいんだけどね」

照れたように頬をかいて、一気に頭からシャワーを被るもなちゃん。ボクもシャワーを浴びて、髪を洗い始める。毛先が肩より下まで伸びた髪を、丁寧に洗っていく。泡を全て流し終えた髪を、浴槽に浸らないようにタオルを使って上げる。

「ユウちゃん、手際いいね」

「いつもこうしてるからかな」

「そっかあ。そういうところで女子力の差がついちゃうんだね。私、家だったら妥協しちゃうもん」

「まあ、手間だもんね」

髪を長い時間お湯に浸していると傷んでしまう。ただ、自宅でもタオル巻く人は意外と少ないって聞いたことがある。

「まあ、こういうおおきいお風呂に入る時は上げるけどね」

二人して浴槽へ入ると、既に初美さんがいて、

「随分と打ち解けたみたいだな、アタシも混ぜてくれよ」

なんて声かけてきたり、保険係の集まりから戻ってきた千歳ちゃんも加わったりで、

賑やかなお風呂タイムを満喫できたと思う。

「じゃあ、上がるうか」

麻琴や明音さんもいればもっと楽しかったんだろうけど、こればかりは仕方ない。身体を拭いて、流石に家と同じようにはいかないので、袋から下着を取り出そうとしたら、

「ん？ えー！」

一着のワンピースが出てきた。一緒に入っていたメモに、せつかくだから着なさいという母からのメッセージが記されていた。しようがないか。下着を身に着けてから、ワンピースを頭から被る。一応、半袖になっている。

「お姫さん、可愛いなあ。ほんまにお姫様みたいや」

「千歳ちゃんは浴衣なんだあ。真っ白な肌襦袢を想像していたよ」

「そんなん朝の禊やないんやから」

「巫女さんってそんなんするのか!？」

驚いたのはジャージ姿の初美さん。ジャージ、なんとなく想像していた。

「せえへんよ」

「しないんかい!」

初美さんと千歳ちゃんは全然タイプが違うから、けっこう不安要素だったんだけど、

案外大丈夫なものだね。

「さてさて、麻琴と明音さんが寂しがってるかもだから、いい加減戻ろうか」  
「だな」

「せやな」

時刻は五時五十五分。 新入生研修の一日目は、もう少し続く。

## #16 新入生研修 1日目 そのよん

夕食も終えて部屋に戻ると一時間強の自由時間となる。自由時間と言っても、今日の所感をしおりに書き込んだり、明日の連絡をしたりする時間でもあるのだが。

「トランプしよーよー」

麻琴がややウザい。

「しおりの今日の感想書いたの？ ちゃんと書かなきゃダメだよ！」

六行くらい罫線が引かれているから、全部書く必要があるはず。

「じゃあ、王様ドッジで唯一の敗北が悠希の一投だったって書くね」

「いいわよ、別に」

事実だし。

「じゃあ、ウチは怪談を怖がる姫さんのこと書くね」

「それはだめ！」

事実だけど。

「ふふ、冗談だよ」

「おばけ、怖くないよ？」

……明音さん。怖いものは怖いよ。

「あのね、昔のことなんだけど。ボク、お姉ちゃんがいてさ……お姉ちゃんは怪談とか怖い映画好きでね、付き合わされて夜中に見て以来……ダメなんだ」

「そっかあ。てか、ユウちゃん長女じゃないんだ」

「たしかにい、お姉さんっぽいのに」

……実は長男でした、なんて言えないね。

「あんまり似てないお姉ちゃんなの。どっちかつと言うと麻琴っぽい」

「まあ……背格好は近いよね」

ボクがお姉ちゃんの話の少ししていると、明音さんが欠伸をし始めた。

「ふああ、はう。眠くなってきちゃったね」

「ちよつと早くないかな?」

まだ八時半なんだけどなあ。

「明音さん、普段は何時に寝るの?」

「十時には寝てるかなあ」

「そうなんだよ、コイツ寝るの早くてさ。アタシが夜に明日持つて行くもの何? とかメールしても返信がなくてさあ」

寝る子は育つ……のかな?

「悠希も早い部類だよね？」

「まあ、肌とか考えたら……確かに十時くらいがいいかもね」

「そうね、このもちもちの肌だものね」

「ふあ、ふいーふあん、くふぐつふあいふお」

明音さんのほっぺをくにくにする千歳ちゃん。明音さん、何言ってるか全然分からないよ。

「まあ、今日は早く寝た方がいいかもな。明日の予定しんどいし。そうだろ、班長？」

「え！ あ、そうそう」

初美さんに話を振られて、夕食の後にあった班長会議の内容を伝える。

「明日は、昼間はオリエンテリングとして、ポイントを集めながら山の向こう側にあるキャンプ場を目指すの。お昼は途中のチェックポイントで配布されるみたいだよ。で、オリエンテリングのポイントで夕飯の食材が決まって、夕食後にナイトハイクとして、来た道の逆側を歩いて戻ってくる。それからお風呂っていうスケジュール」

「山を歩き回るわけね。楽しみじゃん」

「まあ、小さい山だし一周してもどうということもないよ」

麻琴と初美さんの超運動部二人は楽勝そうだけど……。

「わたしたちには辛いよねえ？」



「せやね。弓道部も運動部だけど走ることはないし」

「ボクは完全に文化部なんだけど……」

まあ、もなかちゃんの班よりは大丈夫なんだろうけど。

「班長会議の時、もなかちゃんが凄く不安そうでね。何か聞いたら、五班は全員文化部なんだつて」

「そりゃ辛いわ」

頷く麻琴がちよつとしてから首を傾げる。

「ん？ もなかちゃんつて誰？」

……あ、そうか。

「委員長の森末さん。森末真奈歌ちゃんのニックネームだよ」

「ふむふむ。いつの間に仲良くなったの？」

もなかちゃんとのやり取りなんかを話しているうちに、九時も過ぎていよいよ寝ることになったのだが。

「そもそも布団敷くの忘れてたね」

「あちゃあ……。わたし、もう眠いよお」

「あああ、アタシが敷いてやるから寝るな。ほら、明音！」

……明音さん、今朝も眠そうだったな。寝ようとする明音さんと起こそうとする初美

さんのやり取りは日常的なものっぽい。

「ねえ悠希、同じ布団で寝る?」

「却下」

これぞ名案! みたいにドヤ顔した麻琴を一刀両断して、ボクも自分の布団を敷く。

「取り敢えず、隣確保」

「せやったらウチも」

ボクの布団の両サイドに麻琴と千歳ちゃんが布団を敷き、反対側に明音さんと初美さんの布団が敷かれた。

「それじゃ、おやすみ!」

「うん、おやすみ!」

「おやすみや」

「ふい、おやすみ!」

「おやすみい……」

真つ暗になった部屋でふと思う。女子二人に挟まれて寝ているのか自分は、と。

……なんか、眠れるのか不安になってきたな。まあ、隣の片方は麻琴なのだが。

「姫さんや、やっぱ怖い話しようや」

「いや!!」

眠れそうにない不安の種はいくつつかあるようだ。

## #17 新入生研修 2日目 そのいち

翌朝、腕に纏わりつく柔らかい温もりを覚えながら目を開けると……。

「ふみゆう……」

「ていー」

麻琴がボクの腕を抱き枕に寝ぼけていた。……なんていうか、実はあるんだよね。麻琴も。

「んあ……何？ 何が起きたの？」

「おはよう、麻琴」

ボクがチョップしたおでこを触りながら、首をかしげる麻琴。

「そろそろ起床時間だから、みんなを起こして。ボク、先にトイレ行ってくる」

「むう……分かった。おーい、みんな、朝だぞー」

千歳ちゃんを筆頭に、みんな早起きそうな感じだが、七時半を過ぎてようやくの起床だ。昨日が思っていた以上に疲れる一日だったのかもしれない。

「起きてよー。もうじき八時だよー」

ちなみに八時が研修のしおりに書かれている起床時間だ。

「やる気のない起こし方だなあ」

そう言いつつトイレへ。この研修施設は四階建てで、二階からが寝る部屋になっている。ボクらは四組なので三組ともども三階の部屋を宛がわれている。1フロアにトイレが3箇所あり、どの部屋からもそれなりに近い位置にある。

「あ、もなかちゃん!」

「おはよう、ユウちゃん」

起床時間前ではあるが、明るい色の髪をきちんとサイドテールに結った後姿は、もなかちゃんのそれだった。

「寝起きって感じじゃないね?」

「うん。普段の時間から起きてるかな」

山の空気は冷たいねえと言うもなかちゃんに、昨日の様子を尋ねてみる。

「けっこう打ち解けたんじゃないかな? やっぱ全員が文化部ってのもあるよね」

そこまで言うとは、もなかちゃんの表情がちよつと曇る。

「今日のオリエンテーリング、最低限のポイントだけ回って早々にゴールしようって考えてるんだけど……ユウちゃんの班は?」

「夕食が懸かっているってなかなかねえ。でもまあ、ボクから頼めば麻琴は賛成してくれるし……初美さんも明音さんが説得してくれるだろうから、うちも最低限コースか

なあ」

中学生の林間学校でもオリエンテーリングはやったことあるのだが、高得点のチエツクポイントって道からちよつと離れているケースがあつて、歩き回るハメになるからなあ。

「そうだねえ」

と、ここまで話していると、いくらゆつくり歩いていてもトイレに着く。話は中断して、個室へ。手早く済ませて個室を出る。……最初はどうすればいいかよく分からなかったトイレではあるけれど、なんとというか座っているだけって感じだからなあ。一ヶ月もすると平然と済ませられるようになった。水道で手を洗っていると、もなかちゃんも出てきた。

「ユウちゃん、今度……ユウちゃんをモデルに絵を描いてもいいかな？」

「え？ モデルをするの？ ボクが？」

「そうなの。今度のコンクールのテーマが人物画でね、ユウちゃんなら絶対にいい絵になるって思うの」

「ま、まあ……いいけど。いつ？」

「そうだねえ。ゴールデンウィークに部活があるから、その時にお願したいなあ」

「うん。分かった。また連絡して」

「そうだね。連絡先も後で交換しよう」

そんな感じの会話を経て、朝食や健康カードへの記入を済ませ、ジャージに着替えて施設前の広場―開始式をやった場所―に集まる。オリエンテーリングは一組側からスタートする。時間差でスタートしないと、一つの集団になつてしまう。

「四組から六組、スタート地点を変更する。着いてきてくれ」

……まあ、あのまま待ち続けるよりはいいかな。

「どつからスタートするんだ？」

麻琴がボクの持つ地図を覗き込む。そうしている間にも、スタート地点の変更を伝えた先生は歩き進む。

「けっこう動くみたいね」

千歳ちゃんも先生の行く先を見ながら呟く。

「ここだ。地図で言うならC1の地点だ。四組一班から出発してくれ」

今回、オリエンテーリングの舞台となるのは山の東半分だ。AとE、1と5の25マスに地図は区分けされていて、それを頼りに歩く。チェックポイントの番号は1と40まで振られていて、手元のシートにも1と40までの表がある。その表の欄にチェックポイントに書かれている数字と記号を埋めるのが、今回のオリエンテーリングのルールだ。

「さてと、ボクたちも出発だね」



# #18 新入生研修 2日目 そのに

森を歩くこと一時間強。現在の時刻は正午ちよつと過ぎ。必ず通るチェックポイントしか押えていないものの、それなりに楽しく歩いてる。

「り、リベラルアーツ!!」

主にしりとりが白熱しているのだが。

「麻琴、意味を分かかって言ってるの?」

「う、意味は知らない」

昨日のババ抜きと同じ流れで回っている。麻琴の次はボクだ。

「つまさき」

「貴金属」

「く、く……クヌギ」

「義理」

「またり!」

さつきから麻琴が明音さんに「り」を回されまくって大変ピンチ。リール、リード、竜、流星、リップクリーム、リベラルアーツが既出だ。あと、花の品種にリユーココリー

ネっていうのがあるけど、麻琴の口からは出てこないだろう。

「あ。リップ!」

「プレッシャー」

ボクの次は千歳ちゃん。で、初美さんの順だ。

「やで始めていいのよね。社」

「ろ? ローソンしか出てこない……ローソクは出たし……」

ろも意外に厳しいんだよなあ。それに、初美さん語彙少ないっぽいし。

「ろ、ろ……露天もダメだし……路地裏?」

ラジオ、楽、羅刹なんかが出ている。羅刹って言ったのが千歳ちゃんだから納得である。

「ら、洛中洛外凶屏風」

「なにそれ?」

麻琴と初美さんからステレオでハテナが飛んできた。

「有名な絵よ」

「そっかあ。まあ、りじゃないからいいか。武道」

ボクたちは別にしりとりで熱中しているわけじゃなくて、ちゃんとチエックポイントも探しているわけで、

「ちよい中断。あつたよ」

初美さんの視力がいいため、ちよつと遠くからでもチェックポイントの番号と書いてある数字や記号が見えるのだ。……双眼鏡を持ち込んだ班もあるとかないとか。

「チェックポイント27番。書いてある数字はローマ数字の5。記号は内側も塗られた丸」

「うん。ありがとう」

結局うちの班は最低限のチェックポイントだけを巡ることにした。高得点を取ると夕食が豪華になるらしいけど、最低限でもカレーセットがもらえるのでそれで問題ないって麻琴も納得してくれたし、森の中をどンドン進む。

「なんだか、森林浴をしている気分や」

好天にも恵まれ、のんびりとした雰囲気歩いてる。

「う、からだね。ウミガメ」

「女狐」

……女狐で、千歳ちゃんのチョイスがなかなかカオス。

「ね、ね……ネック！」

「クイックアクセツールバー」

パソコン用語だっけ……。明音さん博識だなあ。

「ぼ？ 何かあったかなあ。ぼ……バルブ？」

麻琴の次はボク。『ぶ』で回ってきたか……。部活、部活動、部費、豚、豚肉、豚バラ肉といった単語が既出だ。となると……。

「ブーイング」

「群雄割拠。しりとりもいいけど、そろそろ中間地点じゃない？」

しりとりしながら結構歩いてきた。地図を見る限り、確かにひとまずの目的地である中間地点は近付いてきている。

「やっとお弁当かあ。アタシ結構お腹空いてたんだよ……」

初美さんがお腹をさすりながらぼやく。中間地点には、けっこうな人数がいた。少し開けた空間に、切り株みたいなテーブルと丸太みたいな椅子がいくつかおいてあってまさにハイキングの休憩所って感じだ。

「よし、四組五班だな。きちんと手を拭いてから食べるよ」

先生から人数分のお弁当とお茶のパックを受け取り、班員それぞれに渡す。めいめいに腰掛けて、お手ふきで手を拭く。

「それじゃ、食べようか」

「けっこう疲れたよねえ」

五人で輪になってお弁当を食べ始める。シンプルなおにぎり二つに卵焼きと唐揚げ、

ちよつとしたお漬け物といった内容だ。

「唐揚げはやつぱり悠希が作った方が美味しいよね」

「まあ、手作りところういったのを比べられちゃうと……まあ、味付けとか衣の感じとか……」

「姫さんの料理は見た目から美味しそうやからなあ」

千歳ちゃんも箸でおにぎりを器用に食べてる。明音さんや初美さんはマイペースに食べてる。ふと周囲を見てみると食べ終えた他の班が分かれ道の一つへ進んでいった。

「あたしらはどこに進むの？」

「一番左の道だよ。最短ルート」

最短ルートのチェックポイントさえ回ればカレーセットがもらえる。他のメンバーもそれでいいって言ってくれているし、そんな感じだ。

「みんな、食べ終わったね」

そうこうしている内に、ちよつとしたお弁当なので皆が食べ終えた。ゴミは全て回収して先生の横にあるゴミ袋へと片付ける。

「さてと、四組五班……出発だよ！」

「……おー……」

## #19 新入生研修 2日目 そのさん

「やつとゴールかあ」

しりとりだの連想ゲームなので盛り上がりながら歩くことさらに1時間半くらい。夕方と言える時間になった頃にやつとオリエンテーリングが終わった。チエックシートを担当の先生に渡し、ちよつと待つて食材を受け取る。調理台の数の都合もあつて、いくつかの班で共有ということになった。四組の五班は六班と共通で調理することになった。

「さあ。ここからは悠希の独壇場だね!!」

「いや、あんたも手伝つてよ!」

役に立たないのは重々承知だけど、それでも出来ることはあるだろうよ。

「私らは何したらいい?」

六班の人たちに野菜の水洗い等を任せ、

「あ、わたしはあ? そこそこ料理出来るよお?」

明音さんにはお米を研ぐのを任せる。

「あたしらは?」

麻琴や初美さんが暇になりそうなので火を起こすのを任せる。その辺は大丈夫だろう。……多分だけど。

「姫さんや、ウチはどうしようか?」

「私も手、空いたよ?」

千歳ちゃんや真奈歌ちゃんと一緒にいよいよ野菜を切り始める。カレーの具はシンブルに人参、たまねぎ、じゃがいも、豚肉だ。六班の人に豚肉を任せボクがじゃがいもの芽を取って皮を剥く。人参を千歳ちゃん、たまねぎを真奈歌ちゃんが切っている。

「やっぱり人多すぎても勝手が悪いなあ」

隣で千歳ちゃんが呟く。確かに、手持ちぶさたな人も出てきてしまった。明音さんもお米研ぎ終えて暇そうだし、麻琴と初美さんは火が落ち着いたのを眺めているだけだし、六班の人も他に仕事はない。確かに、これから後は具材入れてルウ溶かしていくだけだからボクだけでも大丈夫だし……。

「じゃあ、ウチと委員長とで洗い物を済ますで」

「あ、班の人に拭いてもらうね」

片付けの算段もしつつ調理を進めていく。重い鍋は麻琴に任せて火にかける。火の様子を見ながら鍋をかき回すのはボクと明音さんと六班の松本さんと交代してする。ご飯が炊けるまでの時間もあるし、それまではボクらもとうとう暇人だ。

「なんかこうしてキャンプっぽい料理させても悠希は似合うね」

「そう?」

火の番をするボクの隣に麻琴がやってくる。

「そういうのは麻琴の方が似合うんじゃない?」

「パパの出番だよ、的なの?」

「何言ってるの。誰が誰のパパなのさ」

「そうじゃなくて、あたしと悠希が夫婦っていう設定でさ」

思わず鍋をかき回す手が止まる。既にカレールウの入った鍋からは食欲をそそる匂いが立ちこめているのだが……。

「な、固まらないでよ悠希! ほらえつと……ね?」

「恥ずかしいこと言ってる自覚はあるんだ……」

「あはは……まあ、ね。ほら、あたし悠希のこと好きだから……悠希にもあたしのこと好きになって欲しくてさ。前に言ったつけ? 春休みに少女漫画読んでたつて。悠希をどうしたらドキドキさせられるか考えて……それっぽく振る舞ってたんだよ?」

麻琴の素直な告白にボクは何も言えなかった。麻琴が本気でボクのことを好きって、分かっているようで分かっている感じがしなかったのかもしれない。

「今のを聞いて別に悠希が自分の態度をどうこう考える必要はないんだけど、ただ単に



あたしが聞いて欲しかったってだけ。そろそろ明音つちと交代でしょ？」

言われて振り向くと明音さんがいた。確かにそろそろ交代してもいい頃だ。

「んじや、あたしはご飯見てるから悠希はゆっくりしててね」

そう言つて去つて行く麻琴。

「ユウちゃん、ヒナつちと何話してたの？」

「え、ああ……気にしなくていいよ。大丈夫だから」

取り敢えず皆がいるテーブルへ向かつて、木製の椅子に座る。隣には千歳ちゃんが座つていて、ボクの顔をのぞき込んできた。

「姫さん、悩んでるねえ」

「そんな感じの顔してる？」

「ちやうちやう、顔には出てないけど……分かるんよ」

「え、ユウちゃん悩み事あるの？ 私で良ければ力になるよ？」

……ボクと麻琴は幼馴染みで、前は異性で今は同性で……それでも麻琴はボクのが好きで。ボクは麻琴の気持ちにどう応えればいいんだろう……。でも、それを千歳ちゃんや真奈歌ちゃんに相談してもいいのかな？

「悩んでいるの、かもね。でも、これは自分で考えなきゃだから」

「そっか、姫さんがそう言うなら……ウチはそれでいいと思うよ」

「ユウちゃん、しっかりしてる人だと思うから……頼るのって苦手かもだけど、いつでも私に頼っていいからね？」

なんだか……真奈歌ちゃんの包容力が目に見える気がした。頼るのが苦手って思われてるんだ……。どうなんだろう、一人で抱えがちなのかな？ でも、やっぱり自分の気持ちは自分にしか分からない筈だから、ボクと麻琴の関係は自分で考え抜かないと、ね。

## #20 新入生研修 最終日 それから

ご飯は上手く炊けていなかったものの、カレーを美味しくいただき、ナイトハイクという名目でキャンプ場から研修センターへと戻る。ペンライト一本の明かりで進む道は昼間とはうってかわって静謐な雰囲気で……いつそ幽霊でも出るんじゃないかっていう状態だった。夕食前のことなんて一切気にせず麻琴に引っ付いてセンターまで歩き、なんとか帰ることができた。

「では二日目もあと寝るだけになりました。明日は大掃除と片付けだけなので……取り敢えず寝ましょう」

そして、初日同様やんやんやしながらも就寝し、翌朝もそれぞれのんびりと起床し身支度を整えた。

「二日間、あつという間だったや。三日目は何だか面白さが微塵もないね」

二泊三日の新入生研修も最終日。とはいえ、掃除して帰るだけの一日であり麻琴が言うように面白いイベントはない。だけど、二日間お世話になったセンターに感謝を示すべく掃除は丁寧に行く。それぞれが部屋を掃除しクラスごとに割り振られた場所も分担して掃除を行う。四組は三組と一緒に体育館の掃除を担当することになっている。

三組には調理部の人がいらないからなあ……他に知り合いもないし。まあ、おしゃべりしながら掃除しちゃダメだけど。

「それじゃ、さつきと終わらせちゃおうか。各自、ここにいる姫宮悠希の指示に従って動いてよね！」

「ちよつと麻琴!?! あ、あんた何言ってるの!?!」

「こういうのは司令塔が居た方がやりやすいらしいし」

そういう問題じゃないでしょう……そもそもニクラス60人近くを上手く動かせるわけないじゃん。ボク、基本的に先頭きつて動くタイプじゃないんだから。

「じゃあここは私に任せて。はい、四組学級委員の森末です。まずはモップがけを行うのですが、モップは十本しかないので三組の——」

モップがけや窓の水拭き、から拭き、廊下の掃き掃除や細かい箇所掃除までてきぱきと仕事を割り振るもなちちゃん。まさに頼れる委員長姿がそこにはあった。

「分からない部分があれば三組は川藤さんに、四組は私に遠慮無く聞いてください。以上、各自取りかかってください！」

「ああ、川藤さん三組だっけね」

「誰? その川藤さんって」

もなちちゃんが名前を挙げた人を、麻琴が知っていたようだ。特に他意はないが尋ね

てみる。

「陸上部の人でね、短距離。速いけど体調にムラがあつて、この前も貧血で倒れてたっけ」

確かに麻琴が調理部に来たときに誰か倒れたつて言つていたような。

「はいはい、その二人も持ち場に行つてね。体育館外の水道だよ、お願いね」

「あいよー」

「行こうか」

もなちやんに促されて体育館を出る。春とはいえ朝の空気は冷たくて、意識がしやつきりする。

「いやあ、水冷たいね!」

備え付けのたわしを水でぬらす麻琴が声を上げた。まあ、その冷たさをがまんして掃除しないといけないからボクもやるけど。

「うう、確かに冷たい!」

こういつた水道の流しつて汚れが何処にあるのか分かりづらい部分があるけど、取り敢えず隅々まで磨く。

「ここつて掃除する必要ある?」

「まあ、そう言わずに手を動かしながら」

掃除の時間はそう長くはないけど、あんまり雑にやるのはイヤだからやる。そんなことを思いながら暫く麻琴とちよつと話をしながら掃除をしていると、もなかちゃんが掃除の終わりを教えてくれた。

「退所式やるから広場に集合ね」

「分かった」

「了解だよー」

広場で行われた退所式はシンプルなもので、学級委員で構成される実行委員会の委員長である川藤さん（よくよく考えたら入所式でも同じように挨拶をしているわけだから見ず知らずの人ではなかった）の挨拶があり、学年主任からねぎらいの言葉とこの研修の代休とゴールデンウィークを合わせた長い連休での諸注意を受け、ボクたちはバスで学校へと帰ってきた。そこでもう解散となり、ボクと麻琴はお母さんの車で家まで帰ることになった。

「またね、悠希！」

「うん、また今度！」

この新入生研修でボクと麻琴の距離感が変わったかどうかは分からない。でも結局、麻琴はいつもの麻琴だし、ボクもボクのままがいい。そういう風に思ってる。

## 幕間 ゴールデンウィーク編

## #21 父との遭遇／本屋さんへ

新入生研修が終わり、代休とゴールデンウィークの合わさった長い連休に突入した。それなりに課題もあるし、研修の感想をまとめろというものもある。そんな連休の初日、四月二十七日土曜日の朝、ボクはリビングで父に会った。

「やあ悠希。話は希さんから聞いたよ。大変だったね」

ボクやお姉ちゃん、そして夏希の父である姫宮光。大手アイドルプロダクションの企画部長でありながら、今でも最前線でアイドルたちをプロデュースしている生粋のプロデューサーだ。

「ところで、アイドルなんて興味ない？ 今ならきつと世界一にだってなれるさ」「お父さん、ボクは普通に生きたいよ。アイドルにはならない」

開口一番、というわけではなかったけど、やっぱりアイドルへと勧誘してきたお父さん。まあ、お互いに想定の範囲内だったらしい。

「まあ、そう言うだろうと思っていたよ。勿体ないなあ。悠希は男の子だった時からアイドルに興味なかったもんなあ」

父の仕事柄、アイドル関連のグッズが家には多くあったが以前から心惹かれることもなく、テレビで見かけても特に何を思うわけでもなかった。何でかはよく分からないけど。

「光希にも無理させたし、唄や踊りをさせなかったけど、こうなることなら教えておくべきだったのか……。縁とは思議なものだよ」

自分がプロデュースしているであろうアイドルたちのライブ映像をチェックしながら、うんうん頷くお父さん。

「そうだ悠希、小遣いは足りてるかい？ 女の子なんだ、服にすぐ飛んでいつちやうだろ？ 今まで通り本を買ったり買い食いしたり、人付き合いもあるだろうから、持って行きなさい」

そう言つてそばに置いていた封筒をボクに渡すお父さん。……けっこう重い。

「星鍵への入学は希さんがねじ込んだと聞いていたけど、もともと行くつもりだった高校の合格祝いと中学の卒業祝い、それから高校の入学祝いのまとめだ。半分は口座に入れたが、半分は渡しておこうと思つてな」

……これで半分なんだ。ちよつと、いくら入ってるか分からない重みなんだけど。

「えつと、ありがとう」

そう言つて部屋に戻る。ドキドキしながら、封筒の中身を確認する。……一万円札



が、ひ、ふ、み、よ、いつ、む……え？

「十五万円……高校生が持つていい額じゃないって。どど、どうしよう？」

確かにうちは敏腕アイドルPと凄腕服飾デザイナーの家庭で、それなり以上にいい暮らしをしているけれど、だからといって普段からこんなに大きい額を持つことはない。これはもう……どうしよう？ 確かに服や化粧品にお金かかっているけど、こんなにいいのかな？

「ラノベと……あと新しいレシピ本でも買おうかな」

どっぷりとはまっているわけじゃないけど、ライトノベルはよく読むしアニメも見ると。文化系の人間ってそういうもんだよねって認識してる。……取り敢えず、本屋さん行こうかな。

駅前のそこそこ大きい本屋さんに来た。服装はパステルカラーのチエックが入ったシャツに白のロングスカート、風が吹くと肌寒いからデニム地のジャケットを羽織っている。流石にスカートには慣れたけどまだヒールの靴は履けない。

「あ、ユウちゃんだ！」

聞き覚えのある声に振り向くと、明音さんがいた。

「明音さんもお買い物？」

「うん。これを買いにきたの」

手に持っていたのは映画化されると噂の有名な小説。けっこう泣けるラブストーリーらしい。

「ユウちゃんって普段何読むの？」

「ラノベとか、ミステリーとか？」

けっこう好き嫌いせず読む方だと思ってたけど、ケータイ小説とか純愛系の小説って読んだことないかも。

「けっこう男の子っぽい趣味なんだね。こういうの、あんまり読まないの？」

……男の子っぽい趣味なんだ。ええと、どうしよう。

「読みたいなああって思っていると、ドラマになったり映画になったりするから、つい、ね」  
いい感じに誤魔化せたのではなからうか。そんなことを思っていると、明音さんが閃いたような表情をした。

「わたしが読み終わったら貸してあげるね。映画は夏らしいし、見に行こうよ。綾ちゃん、こういうの全然興味ないみたいで、一人で行くのも嫌だからなかなか行けなくて」  
「うん、それじゃあ今度行こうか」

女の子になって感性も少し変わってるかもしれないし、いろいろ読んでみるのもいいかもしれないあなんて思いながら返事をして、明音さんはお会計に向かった。ボクも

欲しい本買って帰ろうつと。

## # 2 2 未来へ駆け出す

連休中盤、夜になり寝る前にふとスマホを確認したらもなかちゃんからメッセージが来ていた。

『明日か明後日、予定がなければ学校へ来て下さい。前に話した絵のモデルをお願いします』

研修中に約束していた話だ。明日なら予定もないし大丈夫かな。そういう旨の返信をして、その日はもう寝た。そして翌日。制服を着て学校へ向かうと、正門前にもなかちゃんが待つていた。

「おはよう、ユウちゃん。美術部が使ってる旧校舎の美術室の場所を知らないだろうなああって思ってたさ、迎えに来ちゃった」

「ありがとう！ 授業で行く美術室しか知らないからそっち行くとこだったよ」

もなかちゃんに連れられたのは旧校舎と呼ばれる棟で、部室棟とも言われている。案内された部屋は授業で使う美術室とほぼ同じサイズで、カンバスは既にイーゼルにセットされていた。

「取り敢えず……脱いで欲しいんだけど、ダメかな？」

「……え？ ええ!？」

最初、もなかちゃんが何を言っているか理解できなかった。

「裸婦画を描くの?」

「あー違う、違うの。イメージボードがこれ。こんな感じの絵が描きたいの」

スケッチブックに描かれていたのは、走っている女の子の姿だった。ただ、着ている服が複雑で、様々な職業の衣装がパッチワークのように配置されている。

「この絵には、私たちが未来へ走っていて、そこには無限の可能性があるっていうのをイメージしているの。裸を描いてから上に服を重ね塗りする感じで。あと、背景に制服を描いて高校生から大人になるイメージを添えたい」

「下着は……していいよね?」

「あ、ごめん。そう、いいよ。流石に全裸になってもらうわけにもいかないよね、女の子しかいないっていつでも。えへへ……私、絵を描くとなるとちよつと視界が狭くなるっていうか、興奮しちゃって。あでも、別にエッチな意味じゃなくて……でもなんていうか、研修のお風呂の時、ユウちゃんの裸見たらその……イメージが鮮明になった感じがして」

「分かった……協力するね。その脱ぐね」

制服を脱いで、もなかちゃんが用意してくれていたハンガーにかける。下着姿でカン

バスの前に立ち、走っているようなポーズをするのだが。

「もうちよつと胸を張って、そう。しっかり前を、未来を見据えている感じ」

「これ、写真で撮っちゃダメなの？」

「ダメ、ユウちゃんの持つてるオーラは写真に写らないもん」

お、オーラかあ……。描く人にしか分からないものなんだろうなあ。イメージボードに描かれていた服、スーツや警察官、ツナギとかナース服、シエフとかパティシエみたいなのもあつたなあ。ボクは……。何になるんだろう。

「表情曇ってるよ？ どうしたの？」

「え、えつと……。その、イメージボードにあつた服のことを考えてて。ボクは将来どんな職業になるのかなあって」

「ううん……。難しいよね。私も正直言つて将来何がしたいかかって具体的には考えてないし。絵は好きだけど、画家っていうのはちよつとね……」

「ボクも料理は好きだけど、お店を開きたいっていうのは無いんだよね」

「好きなこととやりたいことつて少しずつ違うんだよね。あ、せつかくユウちゃんをモデルにしたしエプロン姿の部分も欲しいかも。あと、ユウちゃん凄く可愛いし、アイドルとかいいんじゃないかな？」

「あ、あはは……。アイドルはちよつと興味ないかなあ」

お父さんがプロデューサーなんて言ったらますますアイドルをオススメされちゃうかな？

「アスリートって感じはないよね。イメージボードの時はモデルを誰にするか決めてなかったから、色んな衣装があるけど、ユウちゃんに決めたからには似合うものを優先しないよね」

「ありがとう、完成が楽しみ」

「私こそありがとうね。ユウちゃんみたいに勉強も出来て凄く可愛い女の子でも、進路に悩むことがあるって聞けて良かったよ。絵に描いたこの子が進む先は全部が全部光じゃなくて、暗い中でひとときわ輝く小さな光なのかもってイメージが湧いてきた」

「未来は何が起こるか分からない方が面白い。誰かがそんなことを言ってたよね」

テレビドラマかはたまたマンガか、どんなシチュエーションで使われた台詞かも分からないけれど、確かにボクともなちちゃんにとって意味がある台詞に思えた。

「本当にありがとう。いい絵が描けそうだよ。だからもうちよつとだけ、時間をちようだい」

そう言ってもなちちゃんは筆を動かすペースを速めた。ボクはそんな彼女の横顔が写った窓ガラスをぼんやりと眺めていた。

## #23 お出かけしよう

連休の初日と二日目で課題を終わらせたボクは家でのんびりと過ごしていた。四月も終わり、今日は五月一日。読んでるファッション誌ではもう夏のコーデイネットが紹介されている。デザイナーである母のところに、献本が届くのだ。お母さんにそれを渡されているから、本屋さんでもファッション誌は買わない。女の子になってからの習慣と化したファッション誌を眺める時間もけっこう大事だ。流行はさておき、可愛い服の組み合わせを模索するのはなかなか楽しい時間でもあるし。

最低限購入を決心した服に目印をつけていると、枕元に置いてあるスマホが鳴りだした。頻繁に着信の来る人には、それぞれに固有のメロディを設定しているので、誰からなのかすぐに分かる。威風堂々の場合は……麻琴からだ。お互いスマホなのにメッセージより電話をしてくる。ボクがまだガラケーだった時のくせだろうか。

「もしもし。何の用?」

「なんか冷たいな……まあいいや。明日さ、デート行こうぜ」

ツイッター

切った。電話を。何をほざくんだ……むしろ何故にボクはドキドキしているんだ



……。いくら麻琴がボクのことを好きだからって、別にそれを意識する必要なんてないだろう？ 自問自答を繰り返してうちに、再びスマホが着信を告げる。

「切るこたないだろ!？」

「悪かったわね……。いいわよ……。行く。どこにするの？」

「あそこ……。ほら……。アウトレット!!」

ちよつと遠いな……。まあ、行くつて言っちゃったけど……。

「分かったわ。他の皆には、ボクから誘つてみる」

主に明音さんや初美さん、千歳ちゃんやもなちゃんかな。研修のお疲れ様会にするのもいいかな。

「二人つきりじゃないのか……。気にしないけどね。つかあたしハーレムじゃん!! 大丈夫、悠希が正妻だから!!」

「うるさいうるさいうるさい!! 何がハーレムよ!! もう……。おやすみ……」

うう……。なにを考えているのよ……。ボクは……。そもそも、麻琴は“僕”に好きだと言ってくれた——この際、その直後のことは気にしない——なのに、“僕”は何処に行ってしまったのだろう……。でも、麻琴は今のボクも……。ああ分かんないよ。ベッドに仰向けになり、照明に手をかざしてみる。陰になっても分かる程の白磁のような白く小さな手……。元から女爪だったが、より小さくキレイになった爪……。どれもが磨き抜

「かかれた美少女のもので、”今の自分”であるボクの一部だ。ふう……今さら考えたって戻れる道理なんてない。人生は流れを読んで、いかに流れに沿えるかが分かれ目だ。流されたって……いいじゃないか……。うん、それでいいんだ。グループLINEだともなちやんがいけないから、個別にメッセージを送り、明音さんと初美さんからは来るといふ返信を受け取った。千歳ちゃんともなちやんは忙しいようだ。それからボクはクローゼットの扉を開けて、明日の服選びに取りかかった。なによりも明日の服選びだ。明日は天気予報では行楽日和の晴天で気温もそれなりに上がるらしい。もう半袖の時期だろう。」

「これに……これに……。よし、決まり!!」

翌朝の午前9時過ぎ、ボク達四人は駅のホームにて電車を待っていた。麻琴が遅刻したせいで乗る筈の電車を逃したのだ。そんな訳で麻琴の奢りでアイスを食べている。

「にしても、今日の悠希は可愛いな」

麻琴が今日何度目か分からない一言を発した。

今日のボクの格好は淡い水色のワンピースに白いカーディガンを重ねている。ちなみに顔はすっぴん。一方の麻琴はパンツスタイルで、長い脚が一段と長く見える。当然ながらプレゼンティッドbyボク。初美さんも似たような感じで、スレンダーな体型に非常に似合った服装になっている。驚いたのは明音さんの格好だ。白くてふわふわと

レースに飾られた……いわゆるロリータファッションなのだ。いや、似合ってる。超似合ってる。着ている本人のキャラもふわふわとしているし。って、そうじゃなくて……熱が籠りそうだからちよつと心配になったのだ。

電車の中ではお互いの部活での話をした。部活で広がる交友関係っていいよね。ボク以外の三人は運動部なので、そこは少しだけ疎外感を感じる。そんな中で筋トレの話を始めようとした麻琴には呆れた。あからさまに不服そうな顔をしたら明音さんが氣付いて筋トレの話は終了した。普段はユルいけど、さすが学年主席だ。氣配りができてる。休日とはいえ、地方の在来線の乗車率なんてたかが知れてる。ちよつびり声は大きかったけど、いっばい笑っているうちに小一時間の電車の旅は終わりを告げた。

やってきたアウトレットは隣接する市のご真ん中にあり、交通の便は非常にいい。しかし、

「流石に盆地だわ……。暑い……」

四方を山に囲まれた盆地故の暑さ……取り敢えず私はカーデイガンを脱いだ。初美さんから羨ましそうな呟きが聞こえたが気にしない。女子だけだからって露出度高過ぎるのかな？ 日焼け止め塗った方がよかつたかも。でもそんなこと気にしてられない。こういうのは張り切っていかないね！

「さあて、  
買い物しよつか!!」

## #24 お買い物しよう

「沢山買ったねえ」

あちこちの店を覗いては買うか悩んだり、いぎ買うとなるとレジの列に並んだり、試着しようとするれば、そこも行列になっていたりとしているうちに時刻はとつくに一時を過ぎていた。お腹も空いてきたのでテーブルのある広場で、

「お弁当を持ってきてたんだ！ 重たくなかった？」

籠バックに入れていたお弁当箱を取り出す。正直な話、かなり重たかった……。買った服や小物はまとめて麻琴が持ってくれていたけど。

「平気だよ。さ、食べよう。天気も予報外れに曇ってきちゃったし」

ときばきとウェットティッシュと割り箸を四膳配る。手を合わせて食べ始める。お弁当箱は小さなおむすびの段とおかずの段に分けてある。四方から箸が伸びる。

「美味しい〜！ ユウちゃんいいお嫁さんになれるよね!!」

「そおだねえ〜羨ましいなあ〜」

唐揚げを頬張った初美さんに玉子焼きを頬張った明音さんが同意した

「なれるかな〜？」

キャベツの炒め物をモグモグしていた麻琴が、勢いよくそれを飲み込んでテーブルを叩きながら立ち上がった。

「あたしがそうはさせない!!」

な……何を言ってるのよ……。何も言葉が出ないよ……。私が呆然としていて、

「わ、忘れてっ、今のナシ!!」

普段とは違う真剣な声色に二人は気付いただろうか？

「ユウちゃんは愛されているのねえ〜」

明音さんの一言で固まった空気は払拭されだが……。

その帰り道のことだった。

「送ってくよ。また何かあったら心配だし……」

駅で初美さんと明音さんと別れた後に、麻琴が私に提案してきた。

麻琴が心配しているのは、セクハラ被害のことだ。部活の終了時刻の関係で帰り道で一人になることが多くなり人通りも少ないため、非常に狙われ易いかもしれない。この前に現れた時には、取り敢えず撃退に成功した。ほら、ボクだつて曲がりなりにも少林寺拳法の有段者だし。女の子になつて小回りも効くし。ただ……体力面は……ううん。ま、一人だつたから余裕だつたけどね。

「複数人で来たなら無理だから、一人で帰っちゃダメだよ」

帰り道ではボクの手は麻琴に握られていた。指を絡ませ恋人繋ぎで……。

「お昼のことにも通ずると思うんだけど……あたしとしては、悠希にセクハラで怖い思いはしてほしくないし……」

なんとなくだが、ここまでは友達想いのいい話に思えるのだが、麻琴に限ってこれで終わる訳がない……。

「悠希にはこう……なんだろう？ 純潔でいてほしいというか……。誰かに汚されたくないというか……」

ようするに独占欲が出たんだ。ちよつぴり意外かも。でも……、

「ねえ、麻琴は……誰が好きなの？」

”ボク”の口を吐いたのは、そんな言葉だった。甘く優しい声は……何に響くだろうか……。

「もちろん悠希だよ。”今”の悠希なのか”昔”の悠希かは……分からないかも。悠希は……」

……そつか……なら、ボクの想いは言わぬが花、かな。

「女の子には秘密の一つや二つ、なくっちゃだよ!!」

……視界がちよつとぼやけるのは、雲間から刺さる日の光のせいかな？

はあ……これじゃどつちが百合なのか、分からないじゃん……。



## 近づく夏と二人の距離

## #25 くもり空かえり道

ゴールデンウィークと中間テストが終わり、結果も戻ってきて一喜一憂していると五月も残すは一週間だ。ボクはおおよその教科で高い点数を取れ、コネで放り込まれた学校で不安だったが、学年順位も高い位置をキープすることができた。明音さんも一桁順位を何科目かで取っていて、普段どんな風に勉強しているのか聞いてみたが、授業をしっかりと聞くのが一番だと返されてしまった。……授業中そこまで集中しているようには見えないのにね。一方の麻琴と初美さんは下から数えた方が早いような順位で、次の金曜の放課後に追試を行うようだ。麻琴には何度も勉強するよう言っているのになあ。

そんな火曜日、家庭科部は活動をしない曜日なので七限が終わると帰り支度を始める。今週は掃除もなくてラッキーだ。すると、普段は部活に直行する麻琴が横から――テスト後に行った席替えにより麻琴はボクの真横にきた――話しかけてきた。

「今日は顧問が出張だから、部活がないんだ。だからさ、一緒に帰ろっか」

そう言って既にボクのカバンを持って帰る気満々だ。心なしか散歩を待って尻尾を

振る犬を連想した。

「じゃ、そうしようか」

「イエーイ♪」

二人で並んで教室を出て廊下を進む。麻琴と並んでいると、ボク一人の時より向かってくる視線が多いような気がする。……どうしてだろう？

「あたし達……いいカップルに見えるのかもよ？」

——ドンツ——

……転んだ。あまりの衝撃に足をもつれさせてしまったのだ。痛い……。

「だ、大丈夫か？」

「麻琴が突拍子もないことを言うから!!」

最近のボクは……変だ。麻琴に対して妙に気を張っているというか……。意識しているせいなのかな。麻琴の好意は確かに嬉しい。ボクだって麻琴のことは嫌いじゃない。ただ、今の自分が麻琴と付き合うのは客観的に見てどうなのか、それが気になってしまふのだ。それからもう一つ思うことがある。なんでボクが女の子になったのに麻琴は男の子になってくれないんだ……と。思ったところで意味はないと知っているのに

……。

立ち上がろうとすると麻琴が自然と手を差し伸べてくれた。立ち上がってスカートに付いた埃を払う。麻琴に一応お礼を言つて下駄箱へ向かう。とはいえ、一年生の教室から下駄箱まではそう遠くない。すぐに昇降口が見えてきた。その奥にはどんよりと鈍色の空が広がっていた。

「曇ってるね……もうじき梅雨入りだっけ」

六月から夏服に衣更えだが、今週は移行期間という訳で私や初美さんは既に夏服にしてある。麻琴が未だにブレザーを着ているのは違和感がするが……。

それよりも今は……、

「麻琴が傘は要らないつて言うから……家までもつの？」

この曇天の中、ボク達は傘を持っていない……。今朝は夏希もお弁当の日だったせいで朝が慌ただしくつて天気予報をきちつと見ていないのだ。

一抹どころじやない不安を引つ提げて湿った風をうけながら帰る……。

すると……はあ……。

「降ってきたね……急ごうか」

最初はポツポツ、すぐにザーザーと……通り雨ならいいけど……。

## # 2 6 雨と相合い傘とお姉ちゃん

「はあ……はあ……はあ」

案の定とでも言うべきか走り出して五分もしないうちに息切れを起こしてしまった。違うんだ、準備体操とかしてなかったし……。

「しつかりしてよ……ほら、危ない!!」

よろめく私を麻琴が抱くように支えてくれた。が、

「ん、今日はピンク——いで!! 痛い痛い!! ちよつ、待つて……」

雨に濡れたボクのブラウスはすっかり透けてしまい……ブラが……ぐすん、お嫁に行けない……いや、行く気なんてサラサラ無いけど……むしろ何処へ? そんなことを思いつつも、私はバシバシと麻琴の背中を叩いていた。

そもそも、

「ま〜こ〜と〜!!」

麻琴が傘を要らないって言うから!! やっぱり降ったじゃん!

「ちよ、待つて! ほら、取り敢えず私のブレザー着て!! で、折りたたみ傘があるから使おう!」

そう言つてボクにブレザーを押し付ける……。ボクが着ると……。ブカブカでみつともない。

「そもそも、なんで傘を持つているのよ!？」

麻琴はボクから顔を背けるような姿勢で、

「ただ純粹に相合い傘がしたいだなんて言えるわけないじゃんよ……」

そう呟いたのだった。いや、言つちやつてるし……。

「仕方無いわね……。ほら、相合い傘……。しないの?」

間髪入れずに「する!!」と返事した麻琴に思わず相好を崩すのだった。にしても、今日の麻琴はやつぱり犬つぽい。

相合い傘しながらちよつと見上げた位置に見える麻琴の横顔がどこか凜々しく見えて……。なんか恥ずかしさを感じながらも家へと着いた。まあ、十分少々といったところか。

「た、ただいま……」

着いた……。なんか普段より疲れたかも……。だつて麻琴がボクの腰に手をあててくるんだもの……。スカートの中にも手を入れてしてくるし……。ふう……。

「おかえり悠希——つてびしょ濡れじゃん! あ、麻琴ちゃんも。ほらほら二人でシャワー浴びてきな。制服はなんとかするから」

出迎えてくれたのは姉だった。講義はどうした……。おかしいな、姉の通う大学は国立の筈だけど……。

わりとどうでもいいことを考えながら浴室に向かう。姉は除湿機のコンセントをさしている。

「ブラウスは洗濯機に放つて平気よね。下着もネットに入れて放り込んで。とにかく、温まつてらつしやい。あ！ ちよつと待つてて、お風呂おいだきしちやうから」

お風呂の操作をしつつ洗濯を始めつつある姉、姉は文系ながら家電全般に強い。D V Dの配線も自力でできてしまう。やはり器用だ。ボクも調理系の家電の使い方を何度も教えてもらったものだ。

「万事解決！ あとはごゆつくり」

あと、変な気を回すことに定評がある。別に、あんまりゆつくりするつもりもないのだが。

## #27 虹色アーチ

「いや〜悠希とお風呂なんて今まで考えたことなかったよ」

「……………いや、そりやそうでしょうよ。」

「にしても、やけにハイテンションね」

「どれくらいハイテンションかって？ そりや、調子つ外れな鼻歌を歌う程にはテンションが高い。」

「だって〜悠希と湯船に二人つきりでしょ？ なにこの肌色率ってなるし、あーでも手のやり場に困っちゃうな〜。ほら、上も下もや——痛い痛い痛い!! 首はヤバい!!」

いくらなんでもRが15で足りなくなりかねないので、ここらでストップ。そもそも、手のやり場に困るの時点で突っ込みたかった。目ですらないのか、と。

「あーでも揺れる”いいもの”見れたか——目潰しはアウトだっ…………フェイントで本命はデコピンか…………あふ…………あは…………」

「こ、コイツ…………真正の変態淑女か…………ダメだ…………このままじゃ二人して新たな性癖が露見しかねない…………。いや、麻琴は既に同性愛に目覚めて…………いや、それはお互い様の可能性があるから言わないべきか…………。」

「ま、落ち着いて落ち着いて」

「いや、麻琴が落ち着いてよ!!」

「お姉ちゃん!! お風呂上がったけど?」

「あー長かったわね。麻琴ちゃん是我的サイズの合うかしら。取り敢えず新品を出しておいたから一式プレゼントするわ。なーに気にしないで、悠希がお世話になってるお礼と思つて受け取つて」

ボクには昼間に乾かしていたであろう昨日着ていた服を渡された。パジャマでいいのに……。

ちなみに姉が麻琴に渡した服とは……、

「に、似合うかな? 私服のスカートなんて暫く穿いてなかったし……」

寒色系のドレスシャツにモノトーンカラーのタイ、それに黒いスカート。黒といっても真つ黒ではなく、フリルと銀の刺繍が施されている。さすが大学生のコーデ。いや、母のチョイスなんだらうけど。大人っぽくなりすぎない絶妙なコーデだ。

「素直に似合うと思うよ」

率直に誉めると麻琴は照れたように俯く。久々に見る表情かも。

「部屋でちよつと休もうか」



そう言つて階段を昇り、麻琴を誘うのだが……、

「お、誘われてるねあたし♪」

ボクと麻琴の間で誘うの意味に差異が生じているっぽい。

「おーここが悠希の部屋か！ 去年と全然違うね!!」

いや、そりやそうだろうね。ん〜なんか今日のボクは「いや」と「そもそも」を乱用している気がしてならない……。気のせいにしておこう。

「まあね。ま、座つて……て、もう座つてるし！ いや、ベッドに座らないですよ!!」

しかも右手でマットレスをトントンしているということは、呼ばれてる？

（行つたら最後、麻琴の毒牙にかかつてしまうわ）

（もう別によくね？ 流されちゃえば？）

ボクの中で天使と悪魔が議論を始めた。いや、なんか前提がおかしいぞ。無意味な思考を放棄して窓の外を見る。

「ん？ 晴れてきたね」

空はすっかり晴れ渡り、あの雨がウソのようだ。

「外いってみつか」

麻琴が立ち上がつてボクの手をとる。ちよ、階段は危ない!!

二人とも登下校で履く革靴は濡れているので、麻琴は新聞回収に使われるサンダル。ボクはクロックスで外にでる。

まだ空気は湿っているが青空が清々しい。

「見てよあっち」

「わあ〜!!」

太陽の光で輝く七色のアーチ、こんなに大きくてくつきり見えるのは初めてかも。

「こんな雨の一日も……」

「いよね♪」

## #28 生徒会選挙（1）

梅雨空が少しずつ夏の空気を引き連れてきた霽囲気がある六月末。ボクたちが通っている星鍵学園高等部は生徒会選挙の話題でもちきりだった。部活の時間でもそうだがこの時期は湿気が多くてカビや腐敗の心配があるから調理はあんまりしていない。のんびりとしたお茶会の時間が多い。参加が義務づけられているわけじゃないけど、つつい足が向いてしまう。第二家庭科室へ向かう廊下で、見覚えの無い人とすれちがった。綺麗な黒髪の人だった。……一瞬、目が合ったような。

「ゆうーちゃん！」

「うわっと」

後ろから勢いよく美夏ちゃんが抱きついてきた。美夏ちゃんは調理部の同級生でクラスは五組だ。

「今の生徒会長だったね」

「え？ そうだったんだ。何か用があったのかな？」

「さあねえ？ ま、取り敢えずお茶会だよ！」

美夏ちゃんに促されるように二人揃って教室に入ると、ふんわりと香ばし匂いが鼻を

くすぐる。今日はスコーンとそれぞれ好きな飲み物で過ごしているようだ。席に着くと他の部員たちはやはり生徒会選挙を話題に話していた。

「三組の川藤さんが出馬するんだってね。二組からも書記に立候補する人がいるんだけど、四組からはいないの?」

「いないらしいよ。って、希名子ちゃんも川藤さん知ってるの?」

「川藤さん、ユウちゃんと同じくらい有名だと思うよ?」

……ボクまで有名な人扱いなのってどういうことなんだろうか。

「川藤さん、学年首位だからねえ。どうしても有名になっちゃうよね」

「あ、確かに。テストの度に最高得点者で名前聞いているかも。そっかそっかあ。いつも明音さんの次席に凄いなあって感心してばかりで更に上がっているってちよつと忘れてたかも」

「ああなるほど。次席の支倉さんは四組だったね。で、川藤さんは陸上部でも有力選手らしいのよ」

調理部の一年生、もう一人——六組の片岡美夏ちゃん——も、やっぱり川藤さんのことを知っているらしい。クラス遠いから体育とかでも接点がないに……。なんだか、ボクのアンテナが低いみたいいな感じで嫌だなあ。まあ、この前の合宿でちよつとだけ見かけたけど。スレンダーで綺麗な人、っていう印象だったかな。

「二年生後期から会長になる可能性の高い副会長に立候補する人、だね。けっこう優秀な人って聞いているけど、ほんとにすごいっぽいねえ」

「あ、あまほ先輩？」

一年生が集まっていたテーブルにひよっこり、その小柄な姿を現したのは部長の高須あまほ先輩だ。なんで三年生の先輩が生徒会選挙に立候補する一年生のことを知ってるんだろう。

「ふふん、私は今の会長と同級生でね。しかもなかなか仲いいから教えてもらえちゃうんだよねえ。さつきもお茶会にいたし」

「今の生徒会長さんもすごい美人ですよ。びつくりしちゃいましたよ」

「確か弓道部でしたよね。大会でも上位になったって」

そうか思い出した。入学式で挨拶をしていたっけ。まっすぐに綺麗な髪を高く結つたすらつとした和風美人の、落ち着いた声で凄く上手な話と一緒に記憶がリフレインする。名前は確か……。

「実村碧海先輩、でしたっけ？」

前に千歳ちゃんから話を聞いたこともあったっけ。忙しくて弓道部に来ることは少なかったけど、来たら一二年生がすごいそわそわしちゃう程のカリスマの持ち主だつて。

「そうそう。私はきよちゃんって呼んでるの。もうじき生徒会長のお仕事が終わっちゃうからけっこう寂しそうな顔するんだよねえ。そんな時は私がお菓子をあげるの。えへへ、元気になってくれるんだよお」

今度の選挙で任期を終えるから一年生にとってはやっぱり入学式くらいでしか会わないけど、それだけでも凄い人だし、生徒会の仕事を誇りに思っていたことが伝わってくる。

「今度の生徒会長って今の副会長さんなんですよね?」

「そういうことになるね。そつちの子は流歌ちゃんが同じクラスだった気がするや。おわつとつと、私、塾に行かなきゃだ」

先輩も三年生だし、勉強忙しいんだろうなあ。名残惜しそうに帰り支度を済ませた先輩が、ふとこつちに戻ってきて、ボクの目を見て、

「姫宮さん。ぎゅつとさせて?」

なんて言うんだ。なんだか可愛くって両腕を広げた。

「じゃ、じゃあ、どうぞ」

先輩の細い身体を抱き寄せると、胸に顔を埋められる。さほど身長の高くないボクよりもさらに十センチ近く低いあまほ先輩は、しばらくぎゅつとされていると満足したよ  
うで、

「うん、元気でたよ!!　じゃあ、今日のお茶会はお開き。後は柑菜ちゃんに任せるね」  
そう言って颯爽と家庭科室を去って行った。

## # 2 9 生徒会選挙 (2)

部活でお茶会をした週の金曜日、いよいよ生徒会選挙の立候補者が公示された。四組から立候補者はおらず、そもそも一年生で立候補している人はやはり少なかつた。ただ、副会長に川藤さんと六組の人が立候補していて、信任ではなく、選挙戦となるようだ。

「あれ……?」

立候補者の下に小さく筆頭推薦人の名前が書かれているのだが、川藤さんの欄には森末真奈歌と書かれている。もなかちゃん……川藤さんの推薦人やってたんだあ。知らなかつたや。もなかちゃん、全然選挙の話をしてなかつたし。

「あ、ユウちゃん。生徒会選挙のポスターまじまじ見てどうしたの?」

「すごいタイミングだね……もなかちゃんが川藤さんの応援をするって聞いてなくて」

「そう言えば言っていなかつたね。実は中学一緒だね。塾も一緒だったんだよ。それで頼まれちゃって」

「なるほど。じゃあもなかちゃんの応援演説も楽しみにしてるね」

そんな話をしながら教室に移動し、ホームルームを迎える。そこで先生から星鍵の選



挙について話しを受ける。

「この学校での選挙期間は来週一週間だ。それぞれの候補は朝や昼休み、放課後に選挙演説をする。信任もあるが選挙戦になるところもある。しつかり聞くように。次の金曜の午後、講堂で応援演説と最後の演説が行われ、その後、投票を教室に戻って行う。……そう言えばうちのクラスは委員長が関係者だから選挙を選ばないといけないな……誰かやる人はいないか？」

先生がそう言つてクラスを見渡すが、誰も手を挙げない。投票後の集計や投票における諸注意をする仕事くらいだろうけど、面倒なのは否めないだろう。

「うちのクラスのホームルーム会計は誰だったか……そうか、雛田か」  
「げげ」

ホームルーム会計、特に仕事がない役職らしくめんどくさがりの麻琴がジャンケンで勝ち取つたのだが……こうなるとは。

「いや、あたし、ほら、おおざっぱだし、違う人が……」

「そう言うなつて。これは仕事なんだから。頼むぞ、雛田」

「……はい」

先生に言われてしびしびといった声で返事をする麻琴。

「選挙は水曜の昼に集まりがあるから来週、忘れずに行くように。んじゃ森末、挨拶頼

む」

「はい。起立、礼！ 着席」

そうしてホームルームは終わった。中学の時の生徒会選挙とは規模も違うし、どんな風になるのか分からないけど、さつき見たポスターからは候補者たちの熱気みたいなものを感じた。あと……会長候補の人の筆頭応援人が二人とも秘密だったのはちよつと気になるなあ。

## #30 生徒会選挙（3）

それからの一週間というのはあつという間で、立候補者の中には名刺を配る人もいたり、自分が生徒会長になったら何がしたいかをポスターに書いていたりする人もいた。ちなみに、生徒会長は前期の副会長がなることが多いが、ごく稀に選挙で違う人が当選して就任する場合がある。その場合、前期の副会長は会長補佐という役職になるらしい。もつとも、そうなることは滅多にないそうさ。比較的真面目な生徒の多い星鍵と云えど、規模の大きな生徒会選挙は一つのイベントと化しているようで、思い出作りに立候補する人もいる。まあ、実際の選挙と違って供託金もないしね。

「はいじゃあ、廊下に並んでー。講堂に行くよー」

もなかちゃんが既に講堂へ向かっているの、選管である麻琴が前で指示を出している。明音さんほどじゃないがゆるーい指示でも、クラスは出席番号順に並んで列も整った。

「麻琴がああいうのやるの合わないなあ」

「ねえ。マコちゃんのする仕事じゃないよねえ」

初美さんや明音さんもこの反応だ。そりゃボクだってそう思うけど。そうこうして

いる内に講堂へとたどり着き、各クラスが順番に並んでいるのを見ながらボクたちも並ぶ。講堂は第一体育館の一階にあり、基本的にパイプ椅子が常に出されている。星鍵の体育館はそもそも規模が大きい。球技系の部活が使うことを前提にした体育館とは別に武道や器械体操の部活が使う第二体育館がある。尚、プールは第二体育館に併設されている。

「そろそろ始まりますので皆さんお静かに」

マイクを使って二年生の先輩がアナウンスする。おそらく放送委員の人だろう。お昼の放送なんかで聴いたことある声だ。よく通るからこそ、こういう時にも司会進行役を務めることができるんだらう。

「これより、生徒会選挙全体演説会を始めます。まず、立候補者の紹介を行います。呼ばれた候補者は返事をし、立って一礼の後、着席してください。会長候補、現職副会長、二年一組、佐原しずくさん」

「はい」

最初に名前を呼ばれたのは今の副会長で、生徒会長へ立候補した先輩。遠目に見ていると惚げな印象がするのだが、返事の声はとても凛としていて、これまで副会長を務めてきただけの自信が感じられた。大和撫子っぽい美人な先輩だ。

「同じく会長候補、二年五組、十時光さん」

「はいっ！ あ、返事してから立つんだっけ？」

お茶目な笑いで会場をゆるつとさせたのは、佐原先輩とは対照的な先輩。髪は肩にかかるくらいの長さで少し明るい髪色をしている。その見た目はもうアイドルも裸足で逃げ出しそうな美少女ぶりに抜群のスタイル。そしてそのオーラ。名は体を表すとはまさにといった感じだ。

「では続きまして副会長候補。一年三組、川藤澄佳」

「はい」

弛緩した空気をびしやりと引き戻るように、透き通った声が講堂に響く。

「同じく副会長候補、一年六組、島柚花菜」

「はい」

ちよつと弱々しいその声の持ち主は、小柄で気弱そうなおよそこういう舞台に立つようなタイプに見えない子だった。実は凄く秘めたる意思があるのかもしれないけど……。

「続きまして書記候補、二年一組、加藤美咲さん」

「はい」

書記に立候補した先輩は眼鏡をかけた理知的で大人びた人。

「続きまして会計候補、二年六組、時任紗奈さん」

「はい」

会計に立候補した先輩は小柄ながら声量があつて芯の強そうな人だ。

「ではこれより、各候補者の筆頭応援人による応援演説を行います。まず、会長候補である佐原さんの筆頭応援人、実村現会長の応援演説です」

……それ、ちよつと狡くない!? 副会長としての働きを見てきたのだから応援したくなる気持ちは分かるけど、まさか会長本人が出てくるとは……。

「諸君、久しぶりだな。実村碧海だ」

それからの先輩の演説はとても流暢で、佐原先輩の実務経験や事務能力の高さ、行動力などをきっちり分析した上で評価している。これ以上ない応援演説だった。

「実村現会長、ありがとうございます。続きまして、同じく会長候補である十時さんの応援演説はこの私、南里夏歩がさせていただきます」

南里先輩の演説も確かに上手で、十時先輩のアイドル性を前面に押し出し、必ずや明るい学校にすると力強く宣言した。堅実だが確実に心を掴む演説をした実村先輩ととにかく煽り上手な南里先輩。応援演説だけでも十分に聞き応えがある選挙だ。そして……。

「続きまして、副会長候補、川藤澄佳さんの筆頭応援人、森末真奈歌さんによる応援演説です」

「初めまして、一年四組、森末真奈歌です。私は、今回立候補した川藤さんとは中学校の頃からの知り合いです。彼女は中学生の頃から生徒会活動に打ち込み、会長も経験した才媛です。現在は一年三組の委員長として、また、先日の新入生研修では実行委員長として活躍してくれました。川藤さんは視野が広く、物事を柔軟に考えることが出来る人です。そして考えたことを実際に行動へ移せる人物でもあります。彼女なら、副会長として十全たる働きができると思います。川藤澄佳に清き一票をお願いします。ありがとうございます」

先輩たちの個性豊かな演説の後であっても、堂々と原稿を読み上げたもなかちゃんも本当にすごかった。普段からクラスの委員長としての姿を見ていたけれど、ステージの上にいるもなかちゃんは先輩たちに引けを取らない程に立派だった。その後も演説会は続き、立候補者本人の演説も全て終わると、クラスに戻り投票へ移るよう指示が出た。取り敢えず、またあのゆるい麻琴の指示で教室へと戻るのだった。

## #3 1 夏休みまったなし

選挙の投票結果は即日公開され、概ね順当な結果になった。生徒会長は佐原さんだし副会長は川藤さん。書記や会計は信任投票の結果信任された。そんな生徒会選挙が終わると――

「終わったあゝ!!!」

「麻琴、終礼があるから騒がないの」

怒濤のような期末テストが始まり、麻琴と勉強会……ボクが一方的に教える会をしつつ迎えた一学期末テストの最終日。テストから開放された麻琴はすっかりご機嫌だ。テスト期間中は席を出席番号順に戻すため麻琴がボクの目の前にいる。部活もないから二人で一緒に帰れたのに……。い、今のナシ!! それより、今は終礼だ。夏休みまでのカウントダウンは、あと僅かだ。一週間だけ、あと一週間さえ通えば夏休みだ。夏の陽射しも相まってダラダラと終礼を終えて麻琴と並んで靴箱へ向かう。

「もうすぐ夏休みか。ね、どこ行こうか?」

気は早い夏休みの計画をしてもいい気もする。とはいえ、ボクはどちらかというところインドアな人間なので出掛ける気はないが……。



「観光とかしたいな〜」

敢えて出掛けてみたくなった。心境の変化というものだろうか？ そんなボクに麻琴が提案してくる。

「温泉とかいいよね？」

ん……いいかも。肩こりに効く温泉とかいいよね。あーいいかも、女子会だよ!!

「いいね！ そうしようか！」

「珍しくテンション高いな。これが夏休みパワーか」

夏休みパワーの真偽はさておき、綿密に計画しないと。

「せっかくだし、人数は多い方が楽しいよね？」

麻琴に尋ねると二人きりという台詞が出そうだったので、却下と言ってやった。

さてボクも夏休みが楽しみになってきちゃった！

週明け、つまり一学期の最終週の月曜日のお弁当タイムに私は温泉旅行の話の切り出した。

「夏休みに、みんなで温泉に行けたらなって思ってるの。だから予定を聞いておこうと思つて。その辺よろしくね」

そして部活では、夏バテ回避をテーマに創作素麺料理を作っている。調理のかたわ

ら、ボクは希名子ちゃんに温泉旅行の話をしてみた。

「あ、それならお得様から貰った招待券があるのよ。ほら、うちは自営業だから出掛けられないのね。せつかくだから行こうよ」

話が意外な方向に向かつてきたぞ？ さすが和菓子屋さん……。

部活が終わってからボクは希名子ちゃんと一緒に和菓子屋、ふたみ屋へ向かっていった。部活の時間以外で希名子ちゃんと話すことは珍しくて何を話したらいいか分からなかった。取り敢えず希名子ちゃんをじっくり眺めてみる。背筋が正しくて、清楚な雰囲気だ。和服に馴れている姿勢、お店では和服姿なのだろうと思った。髪を今は垂らしているが、お団子にしたら似合うだろうなあ。目もくりつとして、あらためて可愛さが伝わってくるなあ。

「そんなに見られると恥ずかしいよ……」

あと、めっちゃ謙虚なのよ!! 大和撫子の鑑だよ。そうこうしている内にふたみ屋さんに着いた。

「お、おつきい……」

立派な店構えで、ちよつぴり甘い匂いも香ってきた。和菓子もいいよねえ。家だとなかなか作る機会がないけど。

「ぎ、入って」

希名子ちゃんに続いてのれんをくぐる。カウンターには優しそうなお婆さんが立っていた。

「ただいま、お祖母ちゃん。こちらは友達の姫宮悠希さんよ」

希名子ちゃんに紹介されお辞儀をする。そのまま座敷に通されたボクは状況が掴めなくて、ただただ座っているだけだった。さつきのお婆さんが、ボクにお茶と羊羹を振る舞ってくれた。一口食べてようやく落ち着くことができた。食べ終わる頃に希名子ちゃんが襖を開けた。まるで旅館の中居さんがするように正座で開けて、入ったらまた正座で閉める。そしてその服装は、やはり和服だった。似合ってるのなんの。

「これがさつき話した招待券。七枚もあるのよ。全部持つていく？」

七枚か……どうしよう。ん？

「希名子ちゃんは来てくれる？」

「大丈夫だと思うよ。もうじき大学生のお兄様が帰省してくるはずだから。お姉様も今年は帰るそうですし」

へえ……お兄さんもお姉さんもいるんだ……。ずっと長女だと思っていたや。だつて、すごく礼儀正しいし、性格もきつちりしているし。

「じゃあ七枚頂いちゃうね。あ、これ期限があるや。この期間で行こうね。じゃ、ありがとう。」  
「馳走さまでした」

二泊三日で半額だなんて、さっそくこの旅館をネットで調べなきや。

## #32 温泉に行くのは誰？

翌日、ボクは麻琴、初美さん、明音さん、千歳ちゃんに昨日貰った割引券を見せながら温泉旅行の話をした。

「この三日間になるけど、平気そう？」

「お、大会明けだ。行けるよ」

一番に反応したのは初美さん。そっか、運動部だと夏に大会があるもんね。麻琴は大丈夫かな。

「麻琴は？ 陸上に被らない？」

「こつちも大会明けだから平気だよ。よく休めそうだよ」

良かった……って私は何を安心してんのよ!!

「嬉しそうじゃん？」

「全然そんなことないんだからねっ!!」

あ……そもそも麻琴が……。いいや止めておこう。初美さんと明音さんがニヤニヤしているし。

「明音さんは……大丈夫そうね」

めっちゃ頷いてる……。楽しみなんだろうなあ。

「千歳ちゃんは？」

「その時期、神社のお祭りがあるのよ。まあ、規模も大きくはないし大丈夫だろうけれど、一応確認を取っておくわね」

これでボク、麻琴、初美さん、明音さん、希名子ちゃんが確定で、千歳ちゃんは保留。もう一人声をかけるなら誰がいいかな……。？ 取り敢えずみんなにも聞いてみようかと

「明音さんや初美さんは誰か誘いたい人はいない？」

「いや、特にはいいかないかな」

「うー、わたしもいいかなあ」

となると悩むなあ。あ、忙しいかもしれないけど部長に声をかけてみようかな。

家庭科部は活動日以外でも常時お茶会をしている。家庭科準備室を部室としているため、家庭科室を通って部室に向かう。

「部長、ちよつとよろしいでしょうか？」

ドアを開けてすぐの席に部長は座っていた。

「わーい姫宮さん!! いい香り……。お茶してく？」

やっぱり抱き付かれるのか……。部長、軽いなあ……。歳上なのにすごく可愛い。

「そろそろいいですか？」

「なでなでして。もひゅー……。はい、満足!! で、どったの?」

部長は頭をなでられるのがすっかり気に入ったみたいで、頻繁にねだられる。ボクもとうとう母性本能が……。いや、ないない……。

「いや、温泉なんていかがですか？」

「ん、いつ? あ、この日程か……。ごめんね、塾の集中講義が入ってて。うう、行きたかったなあ」

そっか……。残念。先輩をなでしながら、お土産の約束をして部室を後にした。三年生の夏休みだもんね、忙しいよね……。

部長の予定が合わないことを知ったボクは、一人くらい年長者がいた方がいいんじゃないかと思つてこの前十九歳になったお姉ちゃんに帰宅後、夏休みに温泉へ行かないかと誘つてみた。即答で行くと告げられ、大学生の夏休みはそれほど暇なのだろうかと思ひながら話をまとめた。その後、千歳ちゃんから予定を空けることが出来たという連絡が来た。これでボク、麻琴、初美さん、明音さん、千歳ちゃん、希名子ちゃんとお姉ちゃんの七人だ。お姉ちゃんはまだ自動車教習の真つ最中だから電車での移動になる。そ

の辺は既に調べてあるから大丈夫だけど。さて、忘れちゃいけないのが明日明後日は授業があるし、その次の日は終業式があることを……なんか、面倒になってきちゃったなあ……。まあ、行かなきゃなんだけどさ。



## 夏休み

## #33 いざ温泉地へ

電車の揺れる音にも負けない蝉の鳴き声を聞きながら、ボク達七人は旅館のある温泉地へ向かっていた。電車で一時間とちよつと。取り敢えず自己紹介をする流れになつただけ……。ボクだけする必要がないっていうね。

「えーと、一応……。自己紹介してみようかな。姫宮悠希、よろしくね」

今日はセーラー襟が特徴的なマリンプラウスに膝丈のフレアスカート。タイツにするかニーハイにするか悩んでニーハイにしたけど、どっちも暑かったかなあと反省。ま、電車の中は涼しいけど。

「次はあたしで。雛田麻琴です。取り敢えずこんだけ」

眠いのかなんなのか滑舌も悪いまま麻琴は自己紹介を終えた。ちなみに服装は、気に入ったのか以前姉からプレゼントされた服のタイを省略した着こなしだ。

「ユウちゃんと同じクラスの支倉明音です。よろしくねえ」

今日も明音さんはふわふわしている。特に髪の毛とかが。今日もゴールドデンウィークの時と同じでロリータファッションに身を包んでいるんだけど、スカート丈が短かつ

たりノースリーブだったり夏っぽさが協調されている。あと、腰がきゅつとしまっている上にフリルの効果もあって普段以上に胸が大きく見える……。初美さん、ちよつと可哀想かも。

「同じく初美綾だ。まあ、よろしくな」

Tシャツにショートパンツという活動的な初美さんらしい格好だ。外ではキャップもかぶっていて、少年のような見た目だった。

「次はウチかな。本条千歳、今日は誘ってくれてありがとうね、ユウちゃん」

白のワンピースに和柄の帯風のリボンが千歳ちゃんらしくてよく似合っていた。

「えっと、一年二組の双美希名子です。家は和菓子屋です。あ、これお気に入りの簪なんです」

女子高生に簪が似合うなんて思ってもみなかった。しかも希名子ちゃんの格好はふんわりとしたブラウスに長めのスカート。避暑地に行くようなお嬢様って感じなのに違和感なく簪が収まっている。不思議だ……。

「最後はあたしか。姫宮光希よ。大学生で悠希の姉。ま、お姉さんって呼んでよ」

姉はジーパンにTシャツというラフな格好……。ま、素材がいいからギリギリセーフみたいな格好だ。まあ、初美さんと大差無いと言えばそうなのだが。

そんな七人を乗せた電車は、花馬はなま駅に到着した。電車を降りた途端に硫黄の臭いがしてきた。この温泉地特有の臭いが苦手な人も多いだろうが、みんな意外と平気そうだった。

「眠い……悠希……おぶつて〜」

問題児が一人いるのだ。

「いや、流石に……」

「昔は出来そうだったじゃんかあ」

男の子の時でも無理だっただろうし、事情を知らない人の前で言わないでよ！

「ちよ、真琴、何年前の話をしてるの！ ほら、しゃきつとしなさい」

「うう……む。いや、昨日はさ……楽しみにしすぎて寝れなかったんだよ……」

小学生か!! らしいと言えばらしいのだが……。初美さんなら大丈夫そうだけど任せるのもなんか申し訳なし。お姉ちゃんは……と思つてそつちを向くと、目を合わせようとしてもしない。

「自力で歩きなさいよねつ。まずは観光だから。チエックインまで時間もあるし。取り敢えずお昼ご飯を食べれば元気にもなるよ。さ、行こうか」

そうは言つたものの、体力のないボクが何時間も動ける筈もなく、当初の予定より早めにチエックインすることになった。この花馬も、アウトレットと同じように盆地に位

置するために……暑い……暑い……。  
……すぐに温泉に入ることとなった。……不甲斐ない。……  
大事だからもう一度、暑い……。おかげで汗だく

## #34 露天風呂に行く、その前に

旅館はネットで見ていた以上に綺麗で、仲居さんたちも女子高生ばかりの私たちに丁寧話してくれて、本当にいい旅館だと思う。お風呂は屋内と露天があつて、取り敢えず屋内の大浴場でのんびりして出て部屋で荷物を整理しながら一心地ついた。今回ここに来るきっかけとなった割引券をくれた女将はふたみ屋の大ファンで、特別に大きな部屋に全員そろつて寝泊まりできるように手配してくれた。本当に感謝だ。

「こつこつて卓球出来る?」

一人テレビの前に陣取つていた姉が振り向いて尋ねてくる。

「ありますね。卓球とマンガコーナーとミニシアターが二階にあるみたいです」

希名子ちゃんが答えると姉が卓球をやりたいと言い出した。

「いいねいいね、綾ちゃん強いでしょう? どう?」

「え、アタシ? 麻琴でよくね?」

「無茶ぶり? しゃーないな。光希ねーさん、お手柔らかにね」

姉と麻琴の卓球対決とはいえ、なんやかんやで全員で卓球場に赴く……と思いきや途中で明音さんがマンガコーナーに行くと言つて離れてしまった。自由人だなあと思い

つつボクも卓球にそれほど興味があるわけでもないし、そっちへ行こうとしたのだが、  
「悠希はこっち」

二人に揃って手を引かれてしまった。なんだかなあ。無理矢理連れてこられた感が否めない中、お姉ちゃんと麻琴の卓球対決を眺めることに。卓球をやりたいと言い出したのは姉なのだが、別に中高の頃に部活でやっていたというわけでもなく、こういう温泉に来たときくらいしかやらない人なのだ。そこそこ上手だけど決して人間離れた動きはしない。その程度だと、こと運動に関しては凄まじいセンスの持ち主である麻琴は付いていけるのだ。そしてあっさり追い越す。小一時間ほどの戦いは麻琴の勝利で決着した。

「く……麻琴ちゃん。私は君に負けたのではない。若さに負けたのだ……」

そう叫んで崩れ落ちる愚姉……。若さに負けたと言っても女子大生なのだが諸々どういうことなのだろうか。

「もう一回温泉行つてくる？ 汗かいたし」

麻琴はそう言うが、ボク達は見てただけだし……ま、いいか。付き合つてあげよう。

「いいわよ。露天にする？」

「そだね、そうしよつか。皆もそれでいい？」

「ええ、いいわ。支倉さんも連れてそうしましょう」

千歳ちゃんに言われマンガコーナーにいた明音さんにも声をかけて露天風呂へ行く。

「うーん……」

「何を悩んでいるの？」

昔から温泉にくと悩むことがある。脱いだばかりの下着をもう一度身に付けるか否か、だ。しかも今はパンツだけでなくブラジャーまである。一度身につけたものを再びつけるのはマナー違反なのかなんてお母さんにもお姉ちゃんにも聞いていない。ちなみに一回目に内風呂へ入った時は動き回って汗もかいたから全員着替えたのだ。汗、かあ……。取り敢えず今のところほぼ汗はかいていない。なにせ卓球観戦しかしていないのだから。とはいえ、夏だから汗は滲んでいるはず。一応、女の子になってからの方が汗をかかなくなったし基礎体温も下がった。それは関係ないか。替えは持つているが、家と違って限りがある。頻繁に温泉に入って、その度に下着を替えていたら途中で尽きてしまうかも……。

「下着姿でボサツとしてると——」

ひゃん!!

「ラッキー！ フロントホックじゃん！」

「こらっ麻琴！ 勝手に外さないでよ！」

考えていたら麻琴にブラを剥がれた……。そしてその手はいやらしく蠢き、さつきま  
で包まれていたその脹らみに届……。前に肘打ちから数発の当て身をいれる。……  
やりすぎたかな？

「かー！ 痺れるね！ 美少女の反撃って。すげえ背徳感！」

……この変態淑女は……。もう手がつけられないよ……。

「いやー、ごめんごめん。さすがにさつきのはないわ。にしても、サイズのわりに可愛い  
デザインだな。して、サイズはいくつだこりや。つて、いったあい！」

「サイズまで確認しようとするなー！」

まったく……。けしからん。ま、いつか。もう一回だけ着てあげよう。いや、麻琴が可  
愛いって言ったからとか一切関係ないから！

なにげに一部始終をぼつちり見ていた明音さんに言われて、ようやく浴場に入るの  
だった。



## #35 露天風呂

大浴場には熱さの違う二種類のお風呂とサウナへの扉、そして露天風呂への扉があった。ボクらはせっかくなので、ということで軽く身体を洗ってから大浴場への扉を開けた。

「露天風呂って、こんなにいいものだったのね……」

自然の趣が溢れる石造りの湯船からは、盆地を囲む山々へ沈む夕日が見える。きれいな茜色と、その上に広がる薄紫色が鮮やかで大満足の景色だ。

「新入生研修でも一緒にお風呂入ってるけど、やっぱり皆でお風呂っていいよねえ」

明音さんののほほんとした声を聴きながら、ゆつくりと沈んでいく夕日を眺める。お湯は透明でかるくとりみがある。いわゆる美人の湯と呼ばれるような泉質だ。なんだかんだ女の子になって一ヶ月ちよつと。自分の裸には慣れてはきたが、正直に言つて他の女の子の裸はドキドキする。姉はともかく。明音さんは見た目以上に胸が豊かで温泉の湯にふわふわと浮かんでいるし、女の子の部分を守る茂みはやつぱり人それぞれで。なんだか女の子の神秘みたいなものを感じる。

「そういえば明音、生理は大丈夫なのか？」

「ちよ、綾ちゃん！ そういうこと軽々しく言わないの。女の子しかいなくても」

……生理、おおむね月に一回やってくるそれは、子供を出産するために子宮内の膜を血と共に身体の外に出すこと。始まる年齢や、やってくる痛みは人それぞれ。ボクも既に何度かの生理を体感した。痛みはそれほどではなかったけど、胸がつっぱったり、便秘になったりと、少しでもだけ体調を崩した。

「本条さんは神社の娘さんなんですわ」

「ええ。巫女としてのおつとめもしているわ。双美さんは和菓子屋なんやろ？ お手伝いとかは……」

「朝早いのは大変だけど、放課後や、それこそ夏休みなんかは手伝ってるの」

明音さんと初美さんががやがやしているのを横目に、千歳ちゃんと希名子ちゃんが打ち解け始めていた。和の雰囲気漂う二人が話しているとなんだか大人っぽくて素敵だ。家の仕事を手伝うのはやっぱり、自分の生活の一部になるものなんだなあとしみじみ思った。

「暑い時期に熱い温泉入るってけっこういいよな」

岩にもたれ掛かってぼんやりと空を仰ぐ麻琴の隣に移動する。

「でしょ。ボクもこの前の春休みは旅行に行けなかったから、今日は楽しいよ」

「まあ、あんなことがあれば旅行なんて行けないわな」

わりと日頃から挙動が女の子っぽいなんて言われてはいたけれど、実際になつてみると思つてもみないことがあつた。それこそトイレなんてまさしくそうだし。お風呂だつてけっこう大変だ。

「麻琴の家はあんまり旅行とか行かないよね」

「そりゃ、うちは一般的な家庭だからね。悠希の家みたいに年がら年中行ける程金ないって。いつもお土産ありがとな」

「別にうちだつてそう何度も行つてはいないけどさ」

長い休みがあつても両親が忙しい以上、旅行なんて何度も行けないよ。お土産だつてお父さんが行った先の物が多いし。まあ、わざわざ言つてもしょうがないか。とろみのあるお湯に身を委ねながら大きく息を吐き出す。夏の抜けるような青い空に、大きな白い雲がふわふわと浮かんで風にゆつくりと運ばれている。竹でできた壁の向こう側にある木々の葉も少しだけ音を立てて揺れる。

「……今度は二人きりで来よう」

ぼそつと呟いた麻琴に、ボクはそつと頷いた。

「ちよつと、ユウちゃんと麻琴ちゃんもこつち来てよ」

「いや明音、それはちよつと待て」

なんだかずつと恥ずかし話をしていたらしい明音さんと初美さん。ボクと麻琴は明

音さんに呼ばれてお湯の中をずいずいと移動して、二人のところへ向かう。

「二人もいいけど、皆でつていうのも楽しいじゃないね」

「ま、悠希ならそう言うと思ったよ」

時間はまだまだゆっくりと進む。

## #36 温泉旅行？ 勉強合宿？

流石にやあのぼせ気味で、脱衣所に戻ると扇風機の風が涼しい。脱衣籠にかけてあるバスタオルで体を拭いていると、麻琴も浴場から出てきた。

「なんか、光希姉が大学の愚痴を吐いてんだけど……」

高校生が聞いていい話なのだろうか。家じゃ一切愚痴なんて言わないけど……ボクが聞いたらまずい話題なのだろうか。ちよつと心配になる。確かに帰りも遅くて食生活もわりと崩れつつあるけど……一応、作り置きは健康に気遣ったメニューを用意しているんだし大丈夫だと思うけど。

「それじゃ、先に部屋戻ろつか」

てきぱきと浴衣を着てふりむくと、麻琴の手が止まっていた。

「いやあ、悠希……やっぱり浴衣めっちゃ似合うな」

「な、なによ別に。普通よ普通」

さつきも着てたのに何で二人きりの時に言うかな。妙にドキドキしちゃうじゃん。いや、何でドキドキしてるんだボクは。

「ていうか、麻琴だって似合ってるじゃない。普段はだらしないから、浴衣着てればすつ

きりして見えるし、きちんとしてそうだし」

……一言余計だったなあ。麻琴はだらしなく見えるけど、根はきちんとしてるし、わざわざ言わなくてよかったのに。ボクがそんな心配をしても、麻琴は全く気にした様子はなかった。

「ふふ、悠希に誉められちゃった」

ボクがあれこれ考えすぎなのかな。脱衣所を出て廊下を移動し、エレベーターホールに向かう。部屋に戻ったら何をしようか考え、ふと思った。

「麻琴、あんた夏休みの宿題は持ってきた？」

「へ？ いや、何にも」

「……言わなかったっけ？ 二泊三日で皆もいるし、お姉ちゃんもいるし、勉強しようねって」

ボクもそこそこ出来るし、明音さんもいる、希名子ちゃんだって頼れるし、千歳ちゃんも文系科目なら強い。良い環境だし、麻琴にはもつと勉強も頑張ってもらいたいからね。

「え、本気で？ いや、ほんとにあたし何も持っていないよ？」

エレベーターの中で慌てふためく麻琴。三階でエレベーターを降りて部屋に戻る。

「ルーズリーフ持つてるからあげる。勉強はするの、いい？」

「……分かったよお。でも、終わったらUNOやろうね!」

UNOかあ、トランプよりやる機会ないし大人数でも楽しいからなあ。いいけどさ。

「じゃあ、お夕飯まで勉強しようね。お腹いっぱいだと集中出来ないだろうから、お夕飯の後に、UNOやろっか」

お夕飯は17時からそれぞれの客室で食べられるようになってきているらしい。川魚もお肉もある豪華なものらしく、かなり楽しみにしている。それはさておき、取り敢えずに時間は勉強出来る。皆もそろそろ戻ってくるだろうけど、先に始めちゃおうかな。

「どの科目からがいい? 現代文、古典、数学IA、化学基礎、英語もあるね……さあ選んで」

「ま、待つてつて。あたしあれだよ、テキストに直接書き込めないんだよ? 二度手間じゃない?」

「じゃあボクもテキストには書かない。ルーズリーフにやるよ。それに、数学はもとからノートにやるよう言われてたしさ」

「え、そうだっけ?」

……まいったなあ。麻琴つてば先生からの指示ほとんど聞いてないじゃん。

「取り敢えず……数学は後がいいかな。大変だし」

「楽なものなんてないわよ」

なにせ夏休み、課題は重くのしかかる。現代文、古典、数学は普段から使っているテキストの該当ページ。化学基礎はプリント集、英語は薄いけど新しいテキストを一冊。

「教科書もあるから安心して」

「……悠希の荷物、重かった理由がよく分かったよ」

「数学のテキストは希名子ちゃん、古典の資料集は千歳ちゃんに持ってきてもらったけどね」

あまりにも勉強用の荷物が多いと重いし。まあ、お土産とかお泊まりセットはお姉ちゃんのカバンにも入れてきたからこそ、持ってこれたわけだけど。

「もう……温泉旅行がこれじゃ勉強合宿だよ」

とほほという声が言わずとも聞こえる麻琴に、ボクやお風呂から上がった皆で勉強を教え、ついだというか巻き添えというか、初美さんの勉強も進めながら、お夕飯までの時間を過ごした。



## #37 UNO大会

「よしお夕飯食べ終わったしUNOやろUNO」

お膳を下げてもらい、自分たちでお布団を敷いた後、麻琴がUNOの箱を片手に騒ぎ出した。勉強する前に約束したから当然、参加するのだけれどUNO一つでよくもまあここまでテンションを上げられるなあとは感じる。

「最初の手札って七枚だよ。残りは山札で置いておくつと」

順番は言い出しっぺの麻琴からボク、明音さん、初美さん、希名子ちゃん、千歳ちゃん、お姉ちゃんになった。めくった一枚目は黄色の3。

「赤の3と青の3」

青のカードは手元がないから……。

「一枚引いて……青のドローツ」

「じゃあ黄色のドローツで」

「え？ あ、じゃあ四枚引いて……黄色スキップと緑スキップ」

これで順番はまた麻琴になる。

「あたしの番だね。緑の……8」

「緑の6と黄色の6で」

ボクが黄色の6を出した後、明音さんが出したカードは黄色のリバース。順番が反対回りになって、また私の手番だ。順番が回ってきていない何人かがむすつとした顔をしてこつちを見ている。あはは。意外と希名子ちゃんの視線が痛い。目を合わせないようにしつつ黄色の3を出す。

「黄色は持つてないから引くね。黄色0に青0」

「やつと回ってきた。赤0」

お姉ちゃんがカードを出すと、千歳ちゃんは赤のリバースを出した。本格的に希名子ちゃんが可哀想なんだけど、カード枚数だけを見れば初美さんも不利。お姉ちゃんがワイルドを伐つて青を宣言したら、麻琴は青のスキップを出した。

「ウノー！」

UNOのルールの最大の特徴がこれだ。残り一枚になったらウノーと宣言しないといけない。明音さんが青の8を、初美さんが同じく7を出した後、予想外のことが起きた。

「青のドローツー」

「赤のドローツー」

「黄のドローツー」

六枚のカードを引いた麻琴は黄色と赤の1を出した。ボクは赤の4を出す。それか

ら一周回って場には緑の6。麻琴が出したのは……。

「ごめん、ドロフオー。色は青で」

しづしづ四枚カードを引き、青の4を出す。

「これで、ウノ！ 色は緑」

明音さんが出したのはワイルド。タイミングに関係なく出せる札で、出した人の宣言した色として扱うカード。

「マズいな……リバース」

「それは予想外。めくって……パス」

初美さんが出したカードは青のリバース。でも明音さんは一周回ってくることを予想していたらしく、持っていたのは少なくとも青のカードじゃない。引いたカードも青じゃない。そしてボクの番になった。ちよつと意地悪かもしれないけど、ボクも青のリバースを出す。

「また？ うう……あ、青の4と赤の4、ウノ！」

運が良い明音さんがまた手札を残り一枚にした。初美さんの赤1と黄色の1、希名子ちゃんの黄色の4、千歳ちゃんがめくって黄色の9、お姉ちゃんが黄色の2を出してウノを宣言した。

「楽しいよね、久々にやると。よし、これだ」

麻琴が出したのは黄色のリバーズ。お姉ちゃんはため息をついてカードを一枚引き、出したカードは黄色のスキップ。希名子ちゃんの番だ。

「じゃあワイルドを出しますね。黄色でお願いします」

「ラッキーじゃん。ほら明音、引いて引いて」

初美さんが得意げに出したのはドローツー。

「一枚、二枚つと。あ、またウノだ」

出したのは黄色の8と緑の8。なんとという幸運。

「緑ちよつと久々かもね。5」

「青の5」

「なかなか上がれないな。うわ、パス」

「同じく青の5」

「ドローフオー。黄色でお願いします。ウノ」

希名子ちゃんも残り一枚。そしてまたカードを引く初美さん。運が悪い。希名子ちゃんはさつきのワイルドでも黄色を指定してたし、あの一枚は黄色なのかな。

「じゃあ0」

「赤の0で上がり!!」

とうとう明音さんが上がってしまった。最初に手札を一枚にしたのも明音さんだ。

すごい幸運だ。さて、ボクの手札はどっちも赤で1と7。特に考えもなく1を出す。麻琴とお姉ちゃんもそれぞれ赤の数字で進めていく。

「引いて、赤のスキップに緑のスキップを重ねようかしら」

これでターンは私に回ってきた。この段階で初美さん以外の全員がウノを宣言している。しかしここで色を変えられるのはつらい。めくって手に入れたカードは青のドローツー。パスするしかない。麻琴もカードを一枚引くが……。

「緑の9と青の9で上がり！ やった！」

麻琴も大概運がいい。お姉ちゃんはカードを引いて、青のリバースをだした。初美さんには悪いがさつき引いたドローツーを出すしかない。ウノの宣言も忘れない。

「ななななんでアタシばかり……。くう、ドローフォー、赤で！」

そこからはまあ、山札のシャッフルを合間に挟みながら若干の泥仕合感があつた。ちやつかり千歳ちゃんが3番目に抜けて、お姉ちゃんが出したワイルドで赤になり私は真ん中4番目に上がった。終盤に赤が固まっていたのか、赤になると途端に進みが悪くなりながらも、

「スキップ、スキップ、ウノで私の番でめくってワイルド、青で」

「アタシ青ないんだって、あ、青の2」

「あ、ごめんよ。緑の2で上がり」

お姉ちゃんもなんだかんだで上がり、あとは運の悪い初美さんと意外とムキになりやすい希名子ちゃんの対決になった。これがまあ長引くこと。シャツフルの仕方が悪かったのかドローツーが固まっていたり、色にも偏りがあったりして進みが悪い。

「やつと上がったあ」

最後は希名子ちゃんが上がり、初美さんががつくりとしながら片付け……。

「うし、もう一回やろう」

怒濤の二戦目が始まった。……後から知ったことだけど、UNOはトランプでやる大富豪などと異なり、一人が上がったらその時点で決着らしい。カードに割り振られた点数で勝負をするようだ。まあ、後の祭りといったところなのだが。

## #38 お泊まり会 そのいち

それは、温泉旅行からそこそこの日数が経ち、暑さがほのかに和らいだように感じ……：られなくもなくなつてきた八月下旬のことだった。お風呂上がりにフアツション誌を読んでみると、枕元から流れる威風堂々……：麻琴からのメールか電話だ。

「今回は電話か……。はい、もしもし」

「あ、悠希い。あのさ、明日そっち行つてもいいかな？」

え……：どうしよう？ 部屋は片付いているけど、急にどうしたんだろう。

「ほお、なんで？」

「お泊まり会、したくなつちやつた」

「一緒に温泉行つたじゃん。それじゃ足りなかつたの？」

「あたしはいつだって悠希と一緒にいたいと思つているよ」

「……：しようがないなあ」

「じゃ。また明日」

……：え、明日!?

翌朝、宣言通り麻琴がやってきた。

「おつはようございませす!! お邪魔しますよー」

ハイテンションで現れた麻琴を玄関で迎え入れる。

「あ、麻琴さんだ。お久しぶりっすね」

麻琴が靴を脱いでると早朝バスケから夏希が戻ってきた。

「よっ、久々だな。いい汗かいてんなあ少年!」

取り敢えず夏希には洗面所に行ってもらい、階段を昇る。

「ん? どうかした?」

麻琴が昇ってこない。何か気になるのだろうか?

「いや、パンツ見えないかなあつて」

「こら!!」

まったく……スカート短いのにしなきゃ良かった……。

「で、どうして急にお泊まり会なんて言い出したの?」

「んーまあ、悠希に会いたかったっていうのもあるけど、悠希はずっと悠希なわけで、

昔からの、それこそ男の子っぽい遊びとか出来るのかな? なんて思ってたさ」

昔からの趣味とか遊びとかがって言われても、ボクは結局のところ家で料理をしたり縫い物をしたりなんていう時間が好きで、アウトドアな趣味もないし特に女の子になつて



から困っているとか、我慢しているなんていうことはないんだけど。

「そもそも、そういうのがあっても麻琴がいるから出来るっていうのも、ないような気がしちゃうんだけど」

「ほら、キャッチボールとか、ボーリングとかさ、一人じゃ出来ないとか行きづらいような、そんな遊びはないの？ 一応、男子の友達も昔はいたじゃん？ 一緒に何かしなかつたの？」

「一応、っていうのが少し引つかかるんだよねえ」

見た目も名前も女子っぽかったせいで中学時代もわりと女の子と喋ることが多かったし、男子とも接してはいたけど、親友と呼べるような人もいない……さすがに寂しいな。

「そういうえばアイツらはどういう認識でいるんだろうね。小中のアルバムとか確認してみろ？」

「……前に確認したけど女の子として写っていたよ。小学校の頃の写真はあんまり変わってない気がするけど、中学の卒アルはばっちり女の子だった」

「え、見たい」

「見なくていいよ。ほとんどこの姿なんだから」

いったいなんでこんな姿になってしまったのか。まあ、唐突に元の姿に戻ってもそれ

はそれで大変なのだけれど。学校とか交友関係とか。

「悠希い！　ご飯の準備手伝って！」

麻琴とそんな話をああでもないこうでもないとしていると、一階からお母さんの声が聞こえてきた。

「お、悠希のご飯だ。楽しみ」

しかたない、今日は頑張っちゃいますか。そう思って張り切ってキッチンへ向かうと、

「張り切るなら夕飯をお願い。母さん仕事で夜いないから」

釘をさされてしまった。ま、夕飯の方が買い出しもできて好都合だけど。

「分かったわよ。じゃあ、お昼は？　ってパスタね」

「そう、持ってたって」

まったく……持っていくだけなら夏希にやらせりゃいいのに……。

てなわけで、

「いただきます」

お父さんは仕事でいないため、女ばかりの食卓となった。ま、夏希がいるけど。ちなみに、パスタソースはボクと麻琴がボンゴレビアンコ、お母さんがボンゴレロッソ、夏希がカルボナーラでお姉ちゃんがボロネーゼだ。ボンゴレビアンコをご存じだろうか

？　アサリ入りのさらつとしていて食べやすいパスタなのだが、ビアンコがイタリア語で白という意味を持つのだ。逆に赤はロッソでお母さんが食べているパスタは赤い。ついでに、どちらのパスタにも鷹の爪が入っている。ボンゴレビアンコはまさに最近のお気に入りで、パスタとなると高確率で食べている。昔は夏希と同じでカルボナーラを食べていたのだが、いかんせんお腹に重たい……。ま、麻琴は単にボクと同じにしたかっただけなのだが。

## #39 お泊まり会 そのに

さて、お昼を食べてから一休みし、麻琴と夕飯の買い出しに出掛けることになった。時刻は三時を回ったくらいだろうか。近所のスーパーへ向かう間に麻琴にリクエストを聞いてみる。

「やっぱり悠希の唐揚げをお腹いっぱいまで食べたいなあ」

「じゃ、今晚は唐揚げということ。他には？」

「そうだなあ……。エビチリとか？」

エビチリか……。いい海老あるかな？ 取り敢えず、サラダは必要になるね。お味

噌汁には……。キャベツかもやしをいれようかな。

「うん、メニユーは決まった。さ、買うもの買って帰ろう」

「なんか、こうしてると新婚さんっぽいよね」

「う……。あ……。んなことないし!!」

多少の恥じらいに頬を染めつつ、スーパーまですたすたと歩く。ちよつと熱い。家から歩いて行ける場所にあるスーパーの店内に入ると、冷房の涼しさが心地良い。

「さ、買うもの買って、さっさと帰るよ」

かなりの量の鶏肉と、一緒に揚げる冷凍のシウウマイ、エビチリ用の海老と玉ねぎ。サラダに使うレタスとキュウリとトマト。あとニンニクのチューブも。店内をてきぱき回って、欲しい品物をカゴに入れていく。一応、その他にめぼしい商品がないか目を光らせる。そんな中、思いの外いい感じのタマネギを発見し、脳内に思い描いていた献立から味噌汁を却下して中華スープに変更。卵は家にあるしカニカマもそろそろ使いたい。キノコの売り場を確認して椎茸を追加で購入。お買い物用の財布からお会計を済ませてお店をあとにする。

「荷物持つよ。油買ったから重いでしょ？」

こういう心意気は素直に嬉しいんだけど……。ま、いいや。指を絡められた左手には何も言わないでおこう。麻琴の手、やっぱりちよつとだけ大きく感じる。

家に帰ると丁度お母さんが仕事に出るところだった。

「唐揚げ何個か残しといとくから。いってらっしゃい！」

仕事に出る母を見送り、いつものエプロンをつけてキッチンに立つ。ボウルに鶏肉を出し揚げるための準備をする。流石に量が多い。入れる物を全部入れると味を馴染ませるために、放置しつつ海老の下ごしらえを始める。

「手伝おうか？」

キッチンに顔を覗かせる麻琴に戦力外通告を突き付けて、作業に集中する。揚げ物は時間が非常に掛かるため、早い段階で作業を始めた方がいい。全部完成する頃には夕飯にいい時間になるだろう。てきぱきと、それでいてのんびりと準備を進める。この時間、麻琴は夏希とゲームで遊んでる。そんな二人がほんとの姉と弟に見えて少し微笑ましい。ある程度の準備が済むと、ゲームを終わるよう言って食器の準備などを手伝ってもらおう。

「いい匂い♪ 唐揚げキターー!!」

「はい、手を合わせて。いただきます!!」

テーブルには山盛りになった唐揚げと揚げシユウマイ、甘辛く味付けされたエビチリが。さらに、サラダは皿を二つに分けて出した。レタスとキュウリと小さなホタテを、オリーブ油をベースに作ったオリジナルドレッシングをかけたサラダは自慢の出来だ。

「いやはや、悠希の唐揚げをたっぷり満喫できるだなんて……幸せえ」

唐揚げは鶏肉がジューシーで柔らかいのに、脂っこくなくて食べやすい。ニンニクもきつくないため、女子でも全く気にしなくていい。シユウマイもサクサクで軽く仕上がっている。冷凍のカニシユウマイがこんなに美味しくなるんです!

「ふう、(イ)馳走さま」

「あれ？　もういいの？」

「ご飯を四合炊いて良かった。ボクもついついお代わりしちやっだし、育ち盛りの夏希が三杯目、麻琴も三杯目をお代わりするんだろうなあ。あんなにあつた唐揚げが、かなり減ってる。お母さんの分を先に取っておいて良かった。」

「十分食べたよ。麻琴、もう一杯食べる？」

「お母さんもう一杯！」

「誰が誰のお母さんよ!!」

「俺も……いいかな？」

「……お父さんのご飯、残るかな？　ビールを呑みつつ唐揚げをつまむ父を見る。」

ま、平気か。

「軽めにしとくから、最後にしなさいよ。私はお風呂の準備もするから」

「あ、洗い物くらい私も手伝うよ」

「いや、アンタ普段しないでしょ？」

「あたしだつて雛田家の一人娘よ。洗い物くらい出来な……すんません。無理つす」

「無理しようとするな。ま、気持ちだけ受け取っておくよ」

「そう言うとお母様はおとなしくリビングに戻っていった。なんというか、本当に夫婦み

たいに感じてしまった自分が恥ずかしい。お風呂を沸かしたいけど、洗い物でお湯を使ってるから無理か。私が暇な時なお風呂となると、一緒に入る可能性が上がっちゃうなあ……。どうしよう？　そうは言いつつも洗い物は手際よく片付けられ、残すは油の張っていた鍋のみ。

「明日でいつか」

エプロンを外してキッチンを後にした。ちよつと冷たくしすぎたから、お風呂くらい一緒にあげるかな。取り敢えず、お風呂のお湯を準備する。

「麻琴、お風呂は15分くらいで沸くから入っちゃいな」

「悠希は？　入ろうよお」

「じゃ、一緒に入ってあげよう」

はしゃぐ麻琴を横目にテレビをつける。

「出掛ける前の話じゃないけどさ、ボクは前々からアニメを見るのが好きで。麻琴も見るさ。」

「うん！　見る見る。出来れば一話から見たい」

「それくらい心配はするよ。じゃあ、これなんてどうかな」

ボクは女の子たちが料理して食べてまったりするアニメの一話を再生し始めた。



## #40 お泊まり会 そのさん

「ちよつと走り込み行ってくる。あ、お風呂沸いてるからね」

走り込みに行く夏希の声で、ようやくお風呂が沸いていたことを知った。つついけっつこうな話数を見てしまっていた。

「あ、ありがと。車には気を付けなよ!」

知らせてくれた夏希に、注意をしつつ感謝。ついでに、付き合ってくれた麻琴にも感謝。それじゃ、お風呂に行きますか。

「あ、そういうえば悠希の着替えてき、その引き出しに入ってるの?」

我が家の脱衣所は、洗濯機と物干しを置くために広めにできている。そのため、収納もここに置いているのだ。

「あるけど……見ちゃダメだからね」

「えー、選ばせてよー」

「ダメ。恥ずかしい」

そんな問答を繰り返しつつ、お互いに服を脱いで浴室に入る。もわつとした湿気が好きではないものの、手早くシャワーを浴びて湯船につかる。二人で入ってもそれなりに

余裕があるものの、温泉と違ってお互い真正面に座ると流石に恥ずかしい。全部見えちゃってるし。……入浴剤くらい入れておけばよかったかな。濁り湯系のやつ。張りのある胸とか引き締まったウエストとか、しなやかな脚とか、女の子のエリアとか、見ないようにしようとしても、つい目に入るし、顔が熱くなってしまう。

「悠希、背中洗ってあげる」

麻琴はちよつと顔が紅い気がするけど、目が泳いでるなんてことはなくて、生まれつきの女の子だからなのかなあなんて思っていたら、背中を洗ってあげるなんて言われた。向かい合ってるよりはいいかなって思つて、湯船から上がる。

「優しくしてね」

風呂椅子にこしかけて髪も前の方にたらしめて背中を晒す。優しくつてむしろくすぐったいくらいの力で麻琴がスポンジを動かす。それが終わると、お礼に今度はボクが麻琴の背中を流してあげた。髪も洗ってあげて、まったりとお風呂の時間を過ごした。

「そういうえば、悠希のパジャマ姿ってレアだよね。つて、え……」

お風呂上がりのボクの格好は、男子の頃のお気に入りのTシャツを下着の上に着ただけのものだ。男子だった頃の服は夏希にあげる筈だったのだが、肩幅が合わなくて着れない服が多々あり、それで、捨てられそうだったからキープしておいたのだ。ま、本当

は半袖パジャマがあるのだが、夏場はこの格好が一番楽なのだ。それに、男物の服はコーデイナートによつては、可愛さを増幅させる魔法のアイテムにもなるし。

「あ、あざとい格好してるね……。こう……。見えそうで見えない具合が」

「やつぱりパジャマにするよ」

「スト、ストップ！　悪かったって」

確かに弛くて胸元とかパツクリしてるけど、他意があつてそうしている訳ではないし。麻琴の反応を楽しみにしてたとか、そんなのないし。

「ま、いいや。部屋に行こうか」

「うーい」

取り敢えず階段から二階へ向かう。

「あ、今度は見えた。つっても、中身が分かつてると……。なんかつままない」

「こら！　いい加減にしなさいよ！」

「だつたら……。ううん、なんでもない。ただ、もうちよつと覗いていたい」

「さつさと行くよー！」

## #41 お泊まり会 そのよん

「部屋に来たはいいけど、なにする？　まだ十時だけど…」

「え、寝ないの？」

「まだ早いよ？」

まあ、昔に比べると非常に規則正しい生活リズムだとは思うが……お肌を考えれば当然のことなのだ。

「この時間帯って麻琴、メールしないでしょ？　てつきり寝てるのかと」

「あー、その時間になると電池なくなるのよ」

「麻琴のスマホ……初期型だもんね。それは仕方ないわ」

「ていうかさ悠希、その格好でさ、谷間は見えるけどブラの肩紐が見えないのだよ。

ひよつとして……ノーブラ？　つか寝るときはしない系の人？」

「う……うん。お姉ちゃんもお母さんもそうしてるよ」

「へえ……」

「そのいやらしい目はやめてほしい」

「揉んでいい？」

「いいって——」

「本当に!？」

「最後まで聞きなさいよ!!」

「どんだけがめついのだよ! まったく……。流石に怒りたくもなるよ。もつとも、ボクが知らないような女の子に同じこと言ったら、もつと怒ると思うけど。あれ!? なんそんなことを……。」

「本当にダメ? 女の子同士ってこんな感じだよ? 明音つちは触らせてくれたよ?」

「明音さーん、なにやってんのよ……。」

「ね? いいでしょ?」

「なんというか、頼まれたら断れない性格の人の気持ちが分かる……。あーでも、やっぱり……。」

「ちよつとだけだよ? 優しくだよ?」

「あ、ありがとう!! んじゃ早速」

「麻琴の手が真つ直ぐにボクの胸まで伸びる。Tシャツ越しに優しく触れられる。」

「柔らかい……。フニフニだよ」

女の子にしては少し大きめの手……というか、長い指を持つ麻琴の手が、ボクの胸をゆっくりと押しつけてくる。その力加減が結構巧いというか、丁度よくて気持ちいい……。だんだん思考が鈍くなってる気がする……。

「悠希、ベッドに横になって。そうそう。シャツも捲っちゃうね」

生温くなった脳は耳から入った指令を遂行するだけだった。ベッドに仰向けになると、麻琴がボクの上に乗る、押し倒されたような構図になる。

「あーあ、あたしが男だったらなあ。確実に三回はイケるのに……。ま、堪能させてもらおう」

麻琴の指が直にボクの胸に触れる。じんわりと、ゆっくりと正に堪能するという表現がしつくりくる程に、麻琴はボクの胸を揉みしだく。その快感の波は……。もう、いいや。

「あ……うう……んああー！」

「あ、えつと……これ以上やるとあたしの理性が吹っ飛ぶから……やめようか?」

「何言ってるのよ? もう私の理性が吹き飛んでいるのよ? 責任取つてよ。……

というか、もつと……ね?」

「いいの? あたし……女の子だよ?」

「何を今さら遠慮してるのよ……。麻琴にだったら何をされてもいいよ」

「——という夢を見たのに、何で断るのよ!!」

「話長いよ! いい加減にしてよ!」

「だって! あの夢を正夢と信じて虎視眈々と狙ってたのに。ちなみに、明音つちの胸は触ったことないよ。今のところ」

はあ……。麻琴の頼みを断ったら、こんなことになるなんて……。ま、ある意味では私の貞操の分岐点だったわけね。

「もう疲れたよ。寝よう」

「取り敢えず、朝帰りは正夢になったね。でねでね、その後がさ、夢の悠希の乱れっぷりがさ——」

「聞きたくない!」

そんな感じで、ボクと麻琴の長い一日は終わったのです。夏休み最終日となる翌朝、寝惚けた麻琴にキスをされそうになったのは、ここだけの話だ。ただ、この日からあまりを置かず、再び貞操の分岐点に立たされることをボクはまだ知らなかった。

## # 4 2 夏祭り 前編

それは夏休みも終盤、麻琴がボクの家泊り、家に帰っていった数日後だった。

「悠希、お祭に行こうよ」

いつものようにファツション雑誌を読んでいる時に鳴った威風堂々のメロディ、幼馴染みの雛田麻琴からの電話だった。開口一番に地区で行われるお祭に誘われたのだが、どうして泊まっている時に言わなかったのだろうか。それに、

「ボク、浴衣持っていないし……」

「小母様に言ってみれば？ なんとかしてくれるでしょ」

まあ、母に言えば浴衣の一着くらい工面してくれそう……いや、自作しそうだ。それも、寝る間を惜しんでまで。

「でもなあ……」

その時だった、コンコンと私の部屋のドアがノックされたのは。我が家に入る前にノックしてくれるのは母だけだ。そもそも、父は家にいる時間のほうが少ない上に、女の子になったボクの部屋に入ってくることはない。さて、母が何の用だろう？

「麻琴、少し待っていて。どうしたの、お母さん？」



「悠希の為の浴衣が完成したんだけど、着ない？」

「麻琴、聞えた？ お祭、行ってあげてもいいわよ」

ハンズフリーにしたスマホ越しに麻琴にも聞えただろう。お祭、確か明後日だったよ  
うな……。

「じゃあ、明後日の……夕方四時にそっち行くね」

そう言つて電話は切られた。家からお祭の会場まで、それなりの距離があるが、まあいいか。去年は受験でお祭の気分でもなかったし、一昨年は雨で中止だったつけ。ということは、三年ぶりかあ、ちよつと楽しみになってきた。

「じゃあ、浴衣は当日のお楽しみにとつておきましよう」

そう言つて母はリビングへ戻つていった。そういえば私、浴衣の着付けなんてできないよ？ あと、和服の時つて下着はどうすればいいんだろう?? え、知らないことが多いすぎる……。

いろいろ調べた結果、取り敢えずブラは線がくつきり見えてしまい、みつともないの  
ではない方がいい。パンツは穿いても目立たないから大丈夫。ということが分かった。  
「で、これが悠希の浴衣、可愛いでしょ？」

そう言つて母が見せてきた浴衣はいわゆる……なんだろう。モダン系？ 上下一組

なのだが、丈がみじかく、ミニスカ状態。というかフリルで装飾されていて、和風の口リータ服にも見える。どちらかというとな音さん向け。カラーリングは濃紺を基調にしていて、満月と水の波紋、鯉や金魚が描かれていて日本画のような雅やかさなのだが、やっぱりミニスカにフリルなのだ。まあ、実際に着てみるとスカートは留め金で固定できるので着崩れは絶対にしないだろうし、足元まで丈がないので歩きやすいのは事実だ。そして帯である。朱色の帯なのだが、背中の方には真つ赤なりボンが差し込まれている。母が言うには、これを付けないと完成されならしい。まあ、りボンを外せば普通の浴衣にも使いまわせるらしい。袖の方は姫袖になっていて、白いレースで縁取りされている。全体的に着心地もいいし、胸の部分もブラをしないことを前提に作つたらしく、他とは違う布地になっていて、擦れて痛い思いはしないで済みそうだ。ちなみに、足元は素足ではなく、足指の部分が足袋のようになっていて、ニーハイを穿いている。こちらには真つ白に朱のりボンが付いていて、縁日っぽくてめでたい感じだ。最初は批判的な目で見ていたゴシックな浴衣だが、着てみると可愛さや着る人への心遣いが分かる。流石は母の手がけた浴衣だ。

「ありがとう、お母さん。これ凄く可愛い！」

「当たり前よ、私が作って貴女が着ているのだから」

母がそう言ってくれたのが、とても嬉しかった。

「悠希、少し早かったかな？」

着付けを終えて少し経った時、玄関から麻琴の声がした。確かに少しだけ四時まで時間はあるが、今は浴衣姿を麻琴に見せたかった。

「麻琴、どう？」

「ぬお!!」流石は悠希、最高に可愛いよ」

「当然なんだから」

実際に褒められると少しだけ恥ずかしくなつて、プイッと顔を背けた。その時少しだけ髪の毛の先が首を掠めた。あ、この格好だからとツイントールにしたんだつた。二次元感が尋常じゃないが、まあいいじゃないか。

「ていうか、なんで麻琴は浴衣じゃないのよ？」

麻琴の格好はTシャツにジーンズという、あまりにラフな格好だつた。しかも靴もスニーカーだし。

「ま、男っぽい格好の方が彼氏に見えて、悠希がナンパされる確立が下がると思つてね」  
「な！ ま、麻琴にしては考えたじゃない!!」

麻琴の優しさに動転して、久々にツンデレっぽい口調になつてしまつた……。もう、直したつもりだつたのに。

「ふふ、まあ行こうか」

草履を履いて外へでる。手提げの巾着は予め玄関に置いておいて正解だった。夏至を過ぎてから、暗くなるのはどんどん早くなっている。今も、空の向こうはほんのり茜色だ。

「……ん」

車道側を歩く麻琴の左手を無言で二度叩く。

「仰せのままに、お嬢様」

意図を汲み取ってくれた麻琴は、そつと指を絡めてくれた。まあ、お嬢様は余計だけどね。それから会場に着くまで麻琴が低い声の練習をしていたが、どんなに頑張っても少年声で、高身長との違和感が面白かった。

「おお、なんかいい匂いするー！」

お祭りの会場は大きな公園とその近くの大通り、そこに数多くの屋台が並び焼きそばやたこ焼、リング飴を売っている。

「何か食べる？」

「時間も時間だし、そんなにお腹空いていないだよねえ」

そんなことを言いつつ、屋台の並んだ通りを歩いていると、

「そこのお嬢ちゃんと彼氏、どうだい綿飴？」

屋台からだみ声のおじさんに声をかけられた。麻琴が左側の口角を上げている。作戦成功というやつだ。

「それじゃ一つだけ」

そう言つて袋に詰められた綿飴を受け取ると、

「そつちの嬢ちゃんは男除けかい？」

あ、バレてる……。大人の目つて鋭いなあ。

「ふふ、案外本気なのかもしれないよ？」

敢えてウインクをも織り交せて大胆発言、おじさんは目をパチクリさせつつも、幸せになれよと言つてお釣りを渡してきた。柔軟な発想のおじさんらしい。

「行こう、麻琴」

大人には効かなくても、ナンパをしたがるような男の目は誤魔化せているようで、ナンパは全くされない。腕を組んでいるのも有効なのだろう。

「……当たってる」

「当ててんのよ」

という会話をリアルでやるとは思つてもみなかつたが。通りを歩いていて、女同士だと気付いた人からは奇異の視線を受けるが、本来ならこれで当然なのだ。学校だと周囲

の人が理解しすぎている。優しさは時に厳しさを忘れる原因になりかねない。

「どうした、悠希？」

「ううん、何でもない」

でも、困難を乗り越えてこそ幸せがあるんだ。

## #43 夏祭り 後編

空にも少しずつ夜の帳が下りてきた。藍色の空に星が瞬く。この祭りの目玉でもあ  
る火花が打ち上がるまで、時間もまだある。どうしようかと二人で歩きながら考えてい  
ると、

「や、やめてくださいー！」

道を気にせず歩いていたせいで人気の少ない場所へたどり着いていた。そこで聞え  
た女の子の声、声のする方を見ると四人の男が女の子の周りに陣取っていた。ナンパか  
恐喝か、とにかく放つてはおけない！

「麻琴、助けるよー！」

そう言つて、その女の子の元へ駆け出した。

「そこ、何をしているのー！」

「ちよ、悠希」

男達は高校生くらいで、悪趣味なピアスに金髪、見るからに不良だった。下種な笑  
いを顔に貼り付けて、私を値踏みするように見ている。不快だが、私だつて元は男だ。気  
にしなければ問題ない。

「いい女だ。彼氏は頼りないし、搔っ攫うとしようか」

男の一人が麻琴に向かつて拳を振るってきたので、鳩尾を狙って一蹴り。呻き声を上げながら倒れこむ男を一瞥し、するべきことを考える。

「麻琴はその娘を安全な場所へ。ここは任せて」

初めてかもしれない、強い怒りの感情を顕にするのは。心の底にいる「漢」が騒いでいる。右拳と右足を引いて構えを取る。つくづくミニスカで良かった。これなら蹴りも楽に出せる。

「てめえ、可愛いからって容赦はなしだ！ 痛めつけた後に辱めてやる！」

残り三人、覆い被さろうとして来た男の咽喉下に蹴りを入れて残り二人。女の子になつて柔軟性が増したおかげだ。パンツが見えようが今はどうでもいい。殴りかかってきた男には胸骨に肘打ち、顎に裏拳で伸した。二人倒れた時点で、三人目の拳には恐れが見えていた。さて残すは一人、そう思っていたらその男が急に倒れた。

「いいとこ取りかな？」

戻ってきた麻琴が一撃でノックダウンさせたようだ。まあ、いいとこ取りであることは確かだ。

「あの、助けてくださって、ありがとうございます!!」



女の子は涙を滲ませていた。そうとう怖かったのだろう。

「もう大丈夫だよ。ボクは姫宮悠希、星鍵高校の一年生。そっちは……」

「雛田麻琴、悠希の彼氏。まあ、頼りないけどね」

今日一日は彼氏を名乗ると言っていたや。今くらいは別にも思ったが、まあいいや。

「うう、あたし、紺屋澄乃といいます。ありがとうございます、先輩がた。あたし、

星鍵を受験します。いつか、お二人みたいになりたいです！」

それから暫らく澄乃ちゃんと話をした。澄乃ちゃんは中学三年生で、今日は家族の手伝いに来ていたらしい。ところが、自由時間になつて屋台を見ようと思つたら道を間違え、そこであの集団に囲まれてしまったらしい。それで、家族のやっている屋台へと連れて行くと、

「おう、さっきの嬢ちゃんか。つて、澄乃！ どこに居たんだ?！」

綿飴を買ったあの屋台だった。それじゃあ理解もあるだろう。だつて澄乃ちゃんのボク達を見る目、かなり輝いている。おそらく麻琴が女なのもバレているだろう。澄乃ちゃんを安全な場所へ連れて行くように行つた際、普段でも出さないほどに高い声を出していたから。取り敢えず、お礼をしようにも綿飴じゃなあ、と唸るおじさんにお礼はいいですと何度も言つて、なんとかその場を後にした。

「なんか、お祭を楽しめぬ気分ではない気がする」

「まあね。ちよつと疲れちゃった。家に来る？ 今なら誰もいないだろうし」

ちよつと興奮め感もしていたので、結局ボク達は家に戻った。

「シャワーでも浴びる？」

取り敢えず部屋着を取りに自室へ向かうと、麻琴も着いてきた。なんだか上の空な様子だけど……。

「ま……と？」

部屋に入つてすぐ、ボクは麻琴に抱き締められていた。

「悠希、なんで勝手に危ないことに首を突っ込むかなあ？ 心配したんだよ？ もつと

あたしを頼つてよ！」

言われてみれば全くもつてその通りだ。自分の危険も省みずに、勝手な正義感で麻琴を心配させた。

「ごめん……。ごめんね」

ボクはただただ謝ることしか出来なかった。

「それにね、悔しいんだ。悠希が誰か他の女の子に優しくするのが。妬ましくてしょうがないんだ……。だから、今日だけは悠希であたしを満たしてほしい……」

足元が少しだけ揺らぐ、そのまま倒れこんだ先はベッドだった。

「悠希、大好きなんだ。だから……その……我慢できないんだ！」

唇に当たる柔らかい感触、キスをされたのだと気付くのにかなりの時間を要した。永遠のような一瞬の時間が過ぎ、ボクの意識を現実に戻したのは麻琴の泣き声だった。

「分かんないよ。悠希のこと大好きなのに、どうしたらいか分かんないの。大好きなのに、悠希のこと大切にしたいのに滅茶苦茶にもしたい！ あたしはどうしたらいいの……」

泣きじやくる麻琴を抱き寄せ、泣き止むまで……眠りにつくまで抱いていた。麻琴の気持ちは嬉しい。だけど、ボクはそれに応えていいのだろうか。もし男のままだったら、ボクは麻琴を……。思い悩んでいるうちにボクに眠りについていて。翌朝、あどけない麻琴の寝顔に思わず相好を崩した。

「ゆう……き、だいしゆき……」

とはいえ、こんなことが起きても、ボク達の日常は変わらない。これを素直に喜ぶべきか、ボクには全く分からない。ただ、またいつも通りの日常がやってくる。だから今日もいつも通りに一日を過ごす。夏休みの残り僅か、二学期がボク達を待っている。

二学期といえは文化祭だよね

## # 4 4 新学期事件 (1)

二学期初日、麻琴と一緒に登校すると……、

「や、百合カップル！ 久しぶり」

昇降口でもなかちゃんに声をかけられた。彼女こそ、高須先輩の従妹なのだ。まあ、それを知ったのは最近のことだが。というか、呼びかけられ方に大いに誤解があるので、けれど。

「今更ながら、鍵宮の靴箱って便利だよね」

もなかちゃんはボクらの困惑っぷりを気にすることなく、靴を履き替えながらそう言った。確かに、鍵宮の靴箱はロッカータイプで、二枚の板を使って三足置くことも、板を外せばブーツを置くこともできて便利なのだ。ボクの場合は三段にして、上履きのスリッパと体育用の運動靴、登校用の革靴をそれぞれ入れている。そんな靴箱を開けると……ん？ 何か落ちてきたぞ？

「え、ら……ラブレター!?!」

麻琴の食い付き速いな……。え!?! ラブレターなの……。貰ったの初めてだ

……。つて、そりやそうか。

「あたしに何の断りもなく……誰から！」

麻琴がボクの周りで忙しくステップを踏む。落ち着いて欲しい。

「ユウちゃん、ヒナっち、久しぶりやん。あ、もなちゃんもいる！」

初美さんが登校してきた。さらに、

「なに、この状況。ヒナっち、カバデイでもしてるの？」

そう続けた。ま、そう見えないこともないかも。いや、見えないでしょ。

「いや、聞いてよ綾っち」

珍しく麻琴が説明をして、取り敢えず教室に向かうことになった。教室に向かうと明音さんが飛び出してきた。そういえばこの二人、別々に登校してるんだっけ。ちよつと忘れてたや。

「おはよお〜」

相変わらずのユルさにホツとする。で、初美さんが靴箱での一件を話すと、

「開けてみようよお」

意外な程に食い付いた。なんとというか、明音さんは私服の趣味から分かるけど、非常に乙女なのだ。仕方なく今朝の手紙を開けてみることにした。

『姫宮悠希さま』

貴女の姿を見かけると、どうしてか胸が苦しくなります。その美しき髪に、唇に、完璧な貴女は一輪の百合のように美しい。私はそんな貴女に恋い焦がれてしまったのです。このようなことを、手紙でしか伝えられない私の臆病さをお許しください。そして願わくは、お返事をいただけたらという所存であります。

碧海』

実村

「結構熱烈だよね。それに、誠実な印象かな。ま、あたしの悠希を渡しはしないけど」

読み終えた麻琴はそう締めくくった。その直後、麻琴が素つ頓狂な声をあげた。

「よくよく見たらこの手紙、前の生徒会長からじゃん！」

「え!? ……ほんとだ」

麻琴から手紙をひったくって差出人を確認する。確かに、実村前会長の名前が達筆で記されていた。

「実村先輩か……ふうむ。美人さんではあったが悠希は渡さない！」

まさか先輩から手紙をもらうなんて。ボク、どこで目立っていたんだらう。困惑するボクをよそに、麻琴は麻琴でなんだか息巻いていた。

「まあ、そんなことはどうでもいいさ。さっさと断ってきちやおうぜ」

麻琴が勢い勇んで教室から出ようとするのだが、

「ちよつと待つて。取り敢えず始業式があるから！」

そんな感じで学級委員のみなちやんに連れられて体育館への移動を始めるのだった。とはいえ、実際に断るのはボクなわけだけっこう緊張感に襲われているのだった。

## # 4 5 新学期事件 (2)

始業式での校長先生の話しはあまり覚えていないけれど、夏休みにあつた様々な大会の結果を表彰していたのは覚えている。だって、初美さんが壇上にいたのだから。一年生ながらも、レギュラーとして活躍しているらしい。ちなみに、生徒会長の挨拶は佐原さんの担当のため、実村先輩の姿を見ることはなかった。

教室へ戻ると、課題を集められた。麻琴もきちんと提出できたようで、一安心といったところか。初美さんが若干、提出できていないようで、副担の石川先生に頭を下げていた。数学の課題を忘れたのだろうか。明音さんに写させてもらえばいいのに……。ま、大会で忙しかったんだらうなあ。

「はい、じゃあ今日は解散だ。車に気を付けて帰れよ」

夏バテ気味なのか、気だるげな村瀬先生の挨拶で解散となった。でも、

「村瀬先生、実村先輩は生徒会室にいますか？」

ボク達には用事があるのだ。この村瀬先生、他の先生からの信頼が意外と篤く、生徒会の担当教師でもある。ま、あまり仕事はないらしいが。それほどに、実村先輩が有能



なようだ。とはいえ、もう生徒会長じゃないから、帰っている可能性もある。

「ああ？　ああ、アイツらなら……いるだろう。そろそろ学園祭もあるからな。三年は

二年のサポートに入りつつ、生徒会長としての心得を示していくもんだからな」

あ、もうそんな時期なんだ……。鍵宮の学園祭は10月に行われ、二日間の文化の部と一日限りの体育の部があるのだ。体育の部を体育の日に行うため、必然的に文化の部は土日にあたる。開催まで二ヶ月を切った。忙しいのだろうけど……よし！

「麻琴、行くうー！」

「OK！　村瀬先生、さよならっ」

教室を後にして、ボクと麻琴は生徒会室へ向かった。教室棟である南校舎の三階、階段を昇った真正面に生徒会室は位置する。何故か取り付けてあるインターホンを押してみる。いたって平凡なベルの音が鳴り、扉を開けたのは先輩本人だった。

「あら、いらっしやい。執行部に加わりたいのかな？」

先輩の第一印象は、とつても綺麗な人……というものだった。生徒会選挙の時は遠くからであったけど、間近で見るとその印象はますます強くなる。麻琴と同じくらいスラツとしていて、白い肌は新月の夜のような髪と絶妙な対比になっている。切れ長の瞳

も相まって、和服の似合いそうな人だ。胸元も含めて、とか言ったら失礼だね。

「いえ、本日は……先輩に用がありがとうございました」

ボクが会長を観察している間に、麻琴が話を進めだした。

「分かっているさ。場所を変えよう。二人ともちよつと来てくれ」

移動した先は使われていない空き教室。机すらないここで、ボクらは対面する。

「つい二人とも言ってしまったが、私は姫宮と直接話をしたいのだがな」

「取り敢えず聞いてください。あたしと悠希はお互いに、なくてはならない存在です。

つまり、悠希はあたし以外の人の想いに応えられないのです。だから、先輩……ごめん

なさい!!」

普段以上に好き放題を言う麻琴に、ツツコミを入れたくなつたが、入れたら状況が悪くなるのは明らかだ。流れに委ねるんだ。

「そうなんです。だから……実村先輩、ごめんなさい!」

麻琴に做つてボクも頭を下げる。……もしボクが男性の状態で、先輩に告白されたら

……なんて一瞬、考えたけれどこんな状況にならなければそもそも出会いもしなかつた  
だろう。

「時間を取らせてすまなかつた。私も女の子が好きということに悩んだ経験があつて  
な。今は吹つ切れて堂々と君に惚れる程なのだが。そうか、君たちはもう……。うむ、

「幸せになつてくれよな」

竹を割つたような、さつぱりとかつ毅然としたその姿は、ボク達には辿り着けない程の美しさを放っていた。

## # 4 6 文化祭に向けて (1)

新学期も始まり三週間が過ぎ、課題テストも全て返却され順位の書かれた成績表も渡された。ボクの成績はまた少し上がり総合7位。苦手な数学も30番台に抑えた。得意な英語では明音さんに勝つ大健闘。それに、麻琴も勉強の結果が出たのか、普段よりいい順位をマークしていた。実村先輩は高須部長とクラスが同じなため、ここ最近お茶会に参加しているらしい。ボクも何回か一緒にお茶をしているが、お互いに気まずさは一切感じない。そして目下の悩みは……。

「悠希、次の授業は体育だよ！」

そう、夏休み明けの女子体育は柔道なのだ。ちなみに夏休み前は集団行動と球技だった。あ、あと体力テストもあつたや。嫌な思い出しかないから忘れていたや。それで、柔道が嫌いとか、先生が嫌という訳ではない。ただ……。

「柔道って、女の子同士だと……凄くいかわしいよね！ 特に寝技!!」

隣に居る変態淑女が非常にうるさい。ここで星鍵高校一年四組の時間割を確認しよう。

月 英語文法 体育 家庭基礎 化学基礎 現代文 数学ⅠA

火 数学ⅠA 古典 選択芸術 現代社会 情報 英語長文 保健

水 現代文 家庭基礎 英語文法 数学ⅠA 化学基礎 情報

木 体育 選択芸術 古典 現代社会 英語長文 数学ⅠA

金 家庭基礎 選択芸術 英語対話 現代文 数学ⅠA LHR

こんな感じだ。毎日ある数学……担当が石川先生じゃなかったら辛かったな。あとは、女子校らしく、家庭基礎や選択芸術が多い。芸術は美術、音楽、書道から選択でき、ボクと麻琴ともなかちゃんは美術、初美さんと千歳ちゃんが書道、明音さんが音楽だ。

さて、場所は変わって柔道場。赤と黄緑の畳が敷かれた体育館の一部だ。体育館一階の四分の一の面積を占める。他は剣道場と卓球場と器械体操のエリアになっている。

「悠希が白い帯を締めているって、変な感じするよね」

「まあ、ボクは慣れたけどね」

ボクは護身用に少林寺拳法を習っていたのだが、小学校三年で始めて中学二年の三月に二段になった。六年生の時に初段を取って黒帯になった上に、白帯でいる期間が短かった。麻琴はボクが白帯をしていることに違和感を覚えるらしい。ちなみに、麻琴は少林寺拳法を習ってこそいかなかったが、大会や昇級昇段審査は見に来てくれたため、黒帯姿は比較的に慣れている。

「やっぱり黒帯の方がカッコいいよね」

まあ、そうこうしているうちに、体育担当の先生もきて、授業が始まる。

「はいじゃあ、二人組になって。今日から立ち技やるよ！」

今日から立ち技ということ、麻琴のテンションが少し下がったように見えた。そんなに寝技がいいのか！ というわけで、ボクと組むのは背の順の関係でもなかなちゃんだ。ちなみに麻琴の相手は初美さんで、明音さんの相手は日下部さんという、やっぱり小柄な女の子だ。さて、先生の説明を聞きながら技の形を覚える。中学生の頃の場合は残っていないので、一から覚え直しだ。

「終わったあ。もう九月だけど、ああやって組み合うと汗かいちやうね」

授業が終わって更衣室。初美さんは武道だと巧く身体能力を活かせないらしく、技を綺麗にできなかつたそうだ。

「組み合って汗をかくって、響きがやらしいよね」

「その発想はいい加減にいなさい！」

初美さんの発言にピンク色の返しをした麻琴の背中をはたく。拗ねたように口を尖らせる麻琴と、それを笑う明音さん。いつもの光景だ。

「この夏服、薄いのに透けないからすごいよねえ」

「確かに。生地も厚くはないのに。ありがたいことね」

明音さんと千歳ちゃんが制服を褒める。みんなボクの母がデザインしたことは知らないのですが、ボクも適当に頷いておく。別に秘密ってわけじゃないけど、なんとなく。

「麻琴、教室に戻ろう。移動教室だから急がないと」

家庭基礎の時間は三階にある東講義室へ行って授業を受けるので、教科書を取りに行く必要がある。……のだが、

「ああ。あたしのと、悠希の教科書、持って来てあるよ」

「え？ ロツカーに仕舞ってあるのに？」

星鍵の廊下には、教科書や部活用具を入れられる据え付けロツカーがあるのだが、それはダイヤルロツクができるようになっていて、きちんと施錠したのに……。

「誕生日に合わせたら開いた」

「あ、そう。まあいいわ。じゃ、行こうか」

なんとも言えない感じを漂わせながら、ボクと麻琴は皆に先行して家庭科室へ向かった。そういえば文化祭まであと一ヶ月くらい。家庭科部は何をするんだろう？ 顧問である家庭科の先生、三枝先生に聞いてみようつと。

家庭科の三枝先生は、三十台の女性の先生なのだが、見た目はまだまだ若い。石川先生や高須部長と同じパターンの人だ。この学校の人達はこういう歳の取り方をしていくんだか。

「先生、今年の文化祭って、何をするんですか？」

前の時間の板書を消している先生に尋ねる。相変わらず服装から若々しいこと。しかもこの先生、既婚者だ。深く訊いたことはないが、先生の旦那さんは在宅でお仕事をしているそうなので、幼い子供がいても、教師の仕事ができるのか。とはいっても、家事をする必要はあるので、基本的には定時で帰る。まあそういう訳で、あまり部活に顔を出すことはない先生だ。放任主義とも言う。

「それなら、高須さんに一任したわ。まあ、喫茶店が恒例だけどね。和風か洋風か、それが問題ね。双美さんがいるから、和風かも知れないわね。でも、去年も和風なのよ」

それを聞いて麻琴が、メイド喫茶やらないかなあと呟いたのをボクは聞き逃さなかった。それだけは……恥ずかしいかな。高須部長次第かあ。今日の部活の時間に発表されるのかな。

そして、午後の数国の連打に耐えて部活へ。

「はい、聞いて！ 今年の文化祭はメイド喫茶やりまーす！」

……あ、あれはフラグだったのか。そんなあ。

「そして、メニューもざっくり決まったよ」

「先輩、メイド服って……どうするんですか？」



二年生の九重先輩が部長に尋ねる。先輩は会計も担当しているから、やっぱり気になるところだろう。たしかに、部員は三年生が二人、二年生が五人、一年生が四人で、全員で十一人だ。接客班と調理班を分けるにしても、五着くらいは必要だろうし、それを買ったり作ったりなんてしたら、食材の予算をそうとう削らなきゃいけない。それじゃ喫茶店をやる意味がなくて本末転倒だ。

「それなら、開店から二ヶ月で潰れたメイド喫茶から無料で未使用品十着を頂いたから平気！ 一着というか、自分の分なら私でも作れるから大丈夫!!」

ああ、確か近くにメイド喫茶が出来たんだった。すぐに潰れたけど。やっぱりニーズと働き手がなかったのかなあ。そこから十着、で部長はお手製で。これで十一着。ぼっちり足りるのね……。

「じゃあ、今週は衣装合わせするから、欠かさず来てね。じゃあ、今日は解散しよう。お疲れ様でした！」

ということ、部長が帰ってしまい、ボクも帰宅することに。まあ、楽しみなのは変わらないし、度胸だよ！

## # 4 7 文化祭に向けて (2)

秋分の日を挟んだ水曜日は日課変更で金曜日課になった。その最後、LHRの時間に事件は起きた……。

「えー。先日の文化祭実行委員会での話し合いで、議題になったのは初日の盛り上がり  
が微妙だということでした。そこで、文化祭初日にミスコンをやろうという案が出まし  
た。そこで、誰を推すのか話し合います」

えっと……状況に思考が追いついていませんが、確かに文化祭の初日は内部公開で行  
い、運動部の食品販売は行われず、文化部の発表が主軸になる。そのせいで、運動部に  
所属する生徒たちが部室に引き籠もる事件が発生しているらしい。だ、だからといっ  
て、ミスコンはちよつと……。だって、ナンバーワンよりオンリーワンという価値観の  
中で育ってきた世代なのに……。そんなの、良くないよ！ しかもここ女子校だよ!?!  
絶対いろいろ波乱を招くって。

「という筈だったのですが、実村前会長が直々に悠希ちゃんを指名したので、いいよね？  
反対者がいたら……かかってこい!!」

勇ましくファイティングポーズを取るもなちちゃん。……………ん？ ……ん?! な、な

んだってえ〜!

「待った!! ボクに拒否権は?」

「ありません!!」

文化祭実行委員として、黒板を背に話すもなかちゃんに、とうとうボクの堪忍袋の緒がギブアップした。おかしい。こんなの絶対おかしいよ!! ミスコンの話も一切聴いていないのに、強制参加だなんて……。拒否権まで全否定されて……。泣いちゃうよ? もなかちゃんに泣き落としは効かない気がするけど。

「委員長閣下! ミスコンの審査内容と審査員、あとグランプリになった時のご褒美の内容を開示プリーズ」

委員長に閣下なんて敬称を付けて質問したのは麻琴……反対してえ。

「応えてしんぜよう。審査内容は自己PR、水着審査、そしてラブレターコンテストの三つ。審査員は全校生徒。グランプリのご褒美は、『鍵姫』の称号と、金券の類と、当代きつての才媛である実村先輩の直筆授業ノート。これさえあれば、もうこの先しばらく楽勝だってさ」

しばらく楽勝ってどういうことかはさておき、そのすごさだけは伝わってきた。ていうか金券って、図書カードとかかな? あと……鍵姫って? かつこいいけど、そういうのを求めているわけじゃ……。

「とういか、十月に水着って寒くない？」

初美さんから、素晴らしくまともな発言が飛び出した。確かにそうだ。

「大丈夫、体育館でやるから。まあ、人々の熱気で熱くなるさ」

いくらお金のある高校とはいえ、体育館に暖房設備はない。とういか、熱源は人なの!?

「あとお、ラブレターコンテストってなあにい？」

今度は明音さんからの質問。水着で動揺してしまっただが、もつと危なそうな部門があるんじゃないか！

「それはね、ラブレター風に仕上げた文章を参加者に読んでもらおうという企画。すごいでしょ？」

なにがよ……。もう……。これ断れる空気じゃないし。誰か出場したいっていう人いないの？ まあ、この話を聞いた後じゃ無理だろうけど。

「じゃあみんな！ 姫宮悠希をミスコンに送り出してほしいかな!?」

「いいとも!!」

その反応はちよつと古いよ……。もう。結局、勢いにのまれるまま当事者が蚊帳の外で決まっちゃった。そういうえば、高須部長はどんな反応するんだろう？ いっそ、部長も出ればいいのに……。希名子ちゃんも普通に推薦されていそうかも。まあ、メイド喫

茶と同じ。度胸で乗り越えられる。そう信じたい……。

## # 4 8 大錠祭 (1)

それから結構な時間が経ち、とうとうこの日がやってきたのです。

『第十七回 星鍵高校 大錠祭』

だいじようさい、と読むこの高校の学校祭の始まりです!!

『今年の大錠祭初日のメイנסテージ、鍵姫選出のミスコンです! さあ、司会は放送委員会長の佐藤美鈴です!! ただいまの時刻は午前九時半、開幕式でのコンテスト参加者披露の熱狂も止まなのまま、始まりました! では、自己PRからですよ。まずは11ホームルーム、高橋真紀さん!!

「どうも! 高橋真紀です。自分は可愛いというより格好いい系だと思ってはいるが、投票してくれたら嬉しいな、仔猫ちゃんたち」

『フウ〜〜。一発目から王子様系ですの! これは大興奮ですの。さて、この佐藤のキャラが壊れないうちに、登場してもらいましょう、12ホームルーム、双美希名子さん!!』

この企画、何が凄いつて視聴覚室の大モニターに生放送していることだ。ちなみに、控え室にも小さなモニターが置いてあり、希名子ちゃんの様子が見える。

「双美希名子です。家庭科部に所属していて、特技は和菓子作りです。家庭科部ではメイド喫茶をやっているのです、是非、遊びに来てくださいいね。お待ちしております」

『わーお。自己PRなのに部活の宣伝をする！まさに奥ゆかしい大和撫子!! じゃんじゃん紹介していきますよ、13ホームルームからは未来のアイドル、岸边さあやさんです!』

「アイドル目指して早10年。岸边さあや、歌って踊ります!」

明るくポップな歌を歌いきった岸边さんが戻ってきた。いよいよ、ボクの出番だ。

『なぜこれでデビュー出来ないのか!! 会場が一気に熱くなりました!! そして、この熱気をさらにヒートアップさせる今回の注目人物、14ホームルームの姫宮悠希さんだ!!』

幕から出てステージへ。歓声上がる。ステージはやや高いしスカートは短いし、パンツ見えていなければいいのだが。なんてね、中は水着さ……。

「どうも、姫宮悠希です。ボクも家庭科部に所属していて、今もメイド服です。その、とても緊張してます……」

ボクの着ているメイド服は、コルセットっぽい部分のせいで非常に胸元を強調される造りで、ノータイの上に第一ボタンがないので、かなりいかげわしい感じが否めない。こんな改造を施したあまほ先輩に流石にちよつと文句を言った。ただまあ、直してもら

えずこんな格好でボクはステージに立っている。ああ、どうしてこうなった……。

「えつと、二次審査もよろしくお願いします!!」

取り敢えず逃げるようにステージを去った。それから何人か紹介し、31ホームルームの代表者が出る時、

『おつと! まさかの生徒会前会長直々にその玉体をお運びになり、ミスコンに登場だ!!』

「ふつ、私は女帝か何かかい?」

そう言つて微笑む会長は袴姿で、手には弓を持っている。弓道部なのは知っていたけど、何をするつもりなんだろう?

「今からカメラの上に置かれたリングゴを射抜く」

そう言つて矢を番える会長、とても絵になるのですが、モニターで見るとこちらに矢を向けられているように見えるので怖いのです。そして放たれる矢。

『うお!! 確かに命中しました! 流石、我等の実村碧海!! カッコいい!』

凜然とした姿のまま先輩は舞台袖に戻ってきた。それから何人かの三年生がステージに立ち、自己紹介やアピールをし、第二審査へと移った。

『現在、海上のボルテージはうなぎ登りだ!! そして括目せよ! これが美少女達の水着だ!!』



控え室にも聞える放送委員長のアナウンスを聞きながら、メイド服を脱いでいく。隣では希名子ちゃんが真っ白なフリフリのついた水着姿でステージへ向かっている。ちなみに、ボクの水着は水色をベースに濃紺とのチェック柄になっている。さっきのいかかわしいメイド服と比べてしまうと、確かに露出は多いが逆に健全な気がする。だから、きつと大丈夫だ！ 見た感じ三年生にボクより胸の大きそうな人もいたし。そんなことを考えている内にもうボクの出番になっていた。

「さ、ユウちゃん。頑張つて！」

希名子ちゃんにエールを貰い、ステージへと進むと、

「キヤー!!!」

やけに黄色い声援を受けながら、ファッションショーのようにステージを往復し、控え室に戻る。次はいよいよ第三次審査、件のラブレターコンテストである。というか、ここに大量の人がいてメイド喫茶に人はいるのだろうか？ 売れ行きが不安だなあ……。というか、やっぱり第三次審査が恥ずかしい。ちなみに、なぜか実村先輩の水着はスクール水着（旧式）でした……。

## # 4 9 大錠祭 (2)

『いよいよ始まった第三審査!! ラブレターコンテスト!! 18個あつたサンプルテキストから、この不肖佐藤美鈴がキャスティングし、お送りします』

最終審査ということで、制服に着替えてステージ裏で待機しているボクたち。

『さあさあスタートだ! 最初のシチュエーションは放課後、夕日の差し込む中、告白相手には自分とは別に意中の人がいる。でも我慢できずに言ってしまった。そんな感じの愛の告白! どうぞ!』

……この人、変態音響監督みたい。とか、思っちゃダメかな?

「あのね、私……ずつと君が好きなの! 君が私を見ていないことくらい分かってる。でもね、私じゃ……ダメなのかな? お願い、私と付き合ってください……」

『うおお!! いいね! すごくいい! 言葉にできないから、次、いつてみよう!』  
 そう言われて登場した芙蓉先輩。家庭科部の次期部長さんだ。4組ということで、理系女子な感じでのラブレターだった。

「わ、わたしと君の相性は科学的にみてもバッチリだ。むろん、科学がなかりうとそれは変わらない。そうだろ?」

ああ、いいわ。突っ込みにまわるクールな先輩が、顔を真っ赤にして告白っぽいセリフ。3番目の人はちよつと強気な感じでの告白だった。そして、希名子ちゃんの出番。『さあお次は和菓子屋の娘さん。都会の大学へ行つてしまふ幼馴染みへの告白というシチュウでいつてみよう!』

「待つて! その……あなたが都会に行きたがつていたことは知っているわ。でもね、私は……あなたの帰る場所になりたい! だつて、あなたが大好きだから!!」

『いいね! もう、なんか目覚めそうだよ! 諸君、今、幸せだろ? まだまだ続け、この宴!!』

そんな感じでラブレターコンテストは続いていく。戻ってきた希名子ちゃんや先輩に緊張をほぐしてもらいつつ、いよいよ次がボクの出番。大丈夫、セリフは暗記した。短かつたし、忘れていない。

「いつてくるね」

『お次は第二審査で注目を集めた姫宮さん。究極のラブレターを読み上げます。どんなシチュエーションなのか!?!』

おそらく実村先輩の案であろう短文。勢いよく声に出す。

「先輩! ボク、先輩のこと大好きなんです! どんな障害があつても、一緒にいたいんです! 側にいさせてください!!」

『ボクっ娘後輩いいですよね！ たまらん』

「やあ、いい感じだったよ。姫宮」

「先輩……。あはは、先輩のも期待してますね。……それから、その……。先輩はどうしてボクのことを……？」

告白された時に聞けなかったことを、尋ねてみる。答えてくれるだろうか。

「私は面食いでね。手紙にも書いただろうが、君の容姿にいたく惚れ込んでしまったのだよ」

「……そ、それだけなんですか!？」

「ああそうさ。恋に理由を求めらんじやない。私の持論だがね。そもそも、君はもつと己の容姿がいかに人を惹きつけるか考えた方が良い。少なくとも、この女子校という空間にいるうちにな。つと、そろそろ出番か」

そう言うとき先輩は緊張も見せないまま待機位置に進んでいった。最後から二番目の人がこちら側に戻ってくると、先輩が颯爽と舞台へと歩みだした。

『さあさあ、このラブレターコンテストのとりであり、このミスコンのおおとり。我らが女傑、実村碧海の登場だ！ シチュエーションは中世、敵国の王子を愛してしまった姫騎士。王子の首に剣をあてつつ、本心は殺したくない一心。さあ、最後の交渉といこうじゃないか!!』

どんな設定だよ！ 時代も国も変わっちゃったよ。でも、その設定カッコいいなあ。「いいか、一度しか言わない。命が欲しければ、黙って私のものになれ！」

凄い……。演劇部顔負けの音量、毅然としたその姿はまさに高貴な姫であり、勇ましい騎士！

『カッコいい！ 惚れる！ まじ、最高ですよ、せんぱーい!!』

コンテストの結果は二日目のファイナーレに発表されるらしく、文化祭初日の午前をしい切ったミスコンは一時閉幕となった。更衣室で制服から部活用のメイド服に着替えていると、

「おや姫宮。水着のままか？」

と、先輩に尋ねられた。そう、下着代わりに水着を着たままなのだ。ちなみに、ラブレターコンテストのときは時間短縮のために水着から制服を着用するように指示された。

「ボクのメイド服はスカートがすごく短いので。水着の方がいいんです」

手短に返答しながら、急いでメイド服に着替える。時刻はそろそろお昼時。軽食もてがける家庭科部のメイド喫茶にお客が集中しているかもしれない。希名子ちゃんの宣伝も効果あるだろうし、指揮官ポジにいる芙蓉先輩もこっちにいるから、今頃は高須先輩が目回しているかもしれない。

「では先輩、失礼します」

先輩に一礼してから、芙蓉先輩と希名子ちゃんと三人でメイド喫茶に向かう。「模擬店の方にも行かせてもらおうわ」

先輩の声を聞きながら、熱気の残る体育館をあとにした。

## #50 大錠祭 (3)

「お帰りなさいませ、ご主人様」

大錠祭も二日目、運動部も食品の販売を行い、さらに外部への公開も行われ、最も人の出入りが大きく、最も盛り上がる一日だ。ボクたち家庭科部が開く模擬店、カフェ・ド・フルールも大盛況だ。本来なら調理班にいるはずのボクや希名子ちゃんを目当てに来店する人も多く、フロア担当にシフトした。

「メイドさん、これを！」

みたいな感じでお客さんからメアドを手渡されることがしばしばあったが、

「いけません、ボクはメイドですから」

とロールプレイングを交えながらお断りしている。ちなみに、男性だけでなく女性にも同じ対応をしている。たまに熱の籠った視線を送り続ける女性がいるから怖いものだ。あ、お客さんだ。

「お帰りなさいませ、お嬢様方」

「やつほー、悠希。澄乃ちゃん見つけたからナンパしてきた」

「って、麻琴！ あんた来るの、何回目!?!」

「昨日の午後から数えて六回目かな」

「えっと、お久しぶりです。姫宮先輩」

「お久しぶり、澄乃ちゃん。麻琴になにかされなかった？」

店に訪れたのは夏祭りの日に助けた紺屋澄乃ちゃん。あの日のことを思い出すと、その後のことまで思い出して紅くなってしまっているので、これ以上は思い出さない。

「いえいえ、雛田先輩にはエスコートしてもらって。ね、メグちゃん」

メグちゃんと呼びかけられた女の子は、澄乃ちゃんと同じくらい小柄で、どこかふんわりした感じの女の子。誰かに似てる？

「あれ、その制服ってどこのだっけ？」

「え？ 田島東中ですけど、どうかしました？」

ボクの質問に澄乃ちゃんが答えていると、さきほどメグちゃんと呼ばれた女の子がわずらずと口を開いた。

「あの、前に澄乃を助けてくださったのですよね？ わたしからもお礼を言わせてください。ありがとうございます」

「あ、メグちゃん。そんな、もう、お母さんみたいだよ」

親友なのかな、いい娘だね、メグちゃん。

「あ、申し遅れました。わたし、支倉メグルと申します。恵が留まると書いて恵留と読み



ます。わたしも、星鍵（ほしぎ）を受験するつもりです」

……支倉？ 支倉!？」

「え、麻琴、ひよつとして?」

「あたしも今知った。ほぼ確実に……」

ボクと麻琴が驚いた顔をしていると、

「やあやあユウちゃん、ひなつち。遊びにきたよお。つて、おや? メグちゃんだあ。メグちゃんも遊びに来たの?」

ボクと麻琴の頭に浮かんでいた人物が登場。

「アタシもいるんですけどね。なにこの反応のなさ」

初美さんも明音さんの後ろにいた。千歳ちゃんやもなちゃんそれぞれ部活のお仕事があるみたいで今日は来られないらしい。なお実村先輩は昨日来た。

「あ、とりあえず、お帰りなさいませ、お嬢様」

お客さんへの対応を忘れることなかれ、です。幸い店先で話しこんでいたのは短い時間で、他のお客様に迷惑をかけることも、先輩に怒られることもなかった。六人掛けのテーブルに案内し、ボクも休憩をもらって席に着く。

「取り敢えず、飲み物の注文だけ受け付けるけど?」

「あたしアップルティー」

「わたしココアがいいかなあ」

「あ、あたしもココアでお願ひします」

「アタシはコーヒーでいいや。ミルクとガムシロ必須だからね」

明音さんとメグちゃんがあつた時点で姉妹かどうか聞く必要性を失った気がする。でも、まだ従姉妹とかもありえるからね。でも、二人とも田島東中か。まあ、いいか。

「注文取つてきました」

「あれ、さつきユウちゃん休憩つて」

「飲み物だけ取つてきました。自分で動いた方が早いかなと思って」

家庭科室に移動すると、希名子ちゃんが調理の最中だった。少しだけ会話をしながら飲み物の仕度をする。トレイに置いて教室へと向かう時に、

「追加注文の時は呼んでね」

希名子ちゃんからウインクをもらった。気のせいかもしれないけど、商魂が垣間見えた気がする。

「はい、おまたせ」

それぞれの目の前に飲み物を置き、自分の前にもココアを置く。ホットかアイスはメニュー表の上に置かれた指が主張していたので、その通りにもってきた。支倉姉妹(仮)がホット。澄乃ちゃんはアイス。ボクも働いてちよつと熱いのでアイスココアだ。

「えっと、明音さんとメグちゃんって」

「従姉妹だね。母親が一卵性の双子だから、母親似のわたしたちが似るのも当然だけだね」

はあ、なるほど。

「でも、メグちゃんの方がしつかり者なんだよお」

「でも、お姉ちゃんの方が勉強も運動もできるんです」

二人が同時に言うから、何を言っていたのかよく分からなかった。ただ、仲のいいことだけは分かったと思う。

「じゃあ、澄乃ちゃんとの再会と、新しい友達に、乾杯!!」

「乾杯!」

こんな感じで楽しいひと時を過ごすことができた。ちなみに、きちんと追加注文もしてもらった。サービス気味にカットされたケーキを満足そうに食べる皆の笑顔で、ボクも元気をもらった。

「じゃあ、ボクは仕事に戻るね。楽しんでいてね、澄乃ちゃん、メグちゃん」

四月になればまた会える。あの二人なら鍵宮の制服も似合うだろうな、なんて思いながら仕事へと戻るのだった。

## #51 h a p p y b i r t h d a y 悠希

一年で最大のイベントである大錠祭が終わり、一日。十月十四日。平日ではあるが大錠祭の代休で学校はお休み。そして、今日はボクの誕生日だ。

「悠希、誕生日おめでとう！」

「「おめでとう!!」」

それでもってボクは明音さんの家に招待されて、誕生日会に参加している。参加しているというか、ボクが主賓なんだろうけど。メンバーはボク、麻琴、明音さん、初美さん、希名子ちゃん、千歳ちゃんだ。もなかちゃんも参加したがっていたけど、用事があつてダメらしい。あまほ先輩も忙しいらしく、残念がつていた。

「えへへ、今日くらいは悠希が家事をしなくていいように、しなくちゃだもんね？」

「まあね。お姉ちゃんも家にいるし、洗濯とか洗い物も大丈夫だよ」

「本当に、ユウちゃんは主婦っぽいよね」

「主に色気だよね」

「ちよつと、初美さん！」

こんな感じで、特別なこともなく普段通りに過ごしている。そして話題は自然と大錠

祭のことになり、

「いやあ、やっぱりユウちゃんが鍵姫になると思っていたよ！」

文化の部の最後に発表されたミス鍵姫コンテストの結果、実村先輩との接戦の末にボクが鍵姫になった。

「なんとというか、会長に仕組まれた気がするんだけどなあ……」

「そんなことないよ！ 悠希の実力だよ！」

「そうそう、ユウちゃん可愛かったもん」

「ユウちゃんの魅力、皆に伝わりましたね」

「まあ、体育の部に関しては何も言わないけどね」

……むう。大錠祭は二日間の文化の部と一日だけの体育の部に分かれる。いわゆる文化祭と体育祭だ。そしてその体育の部。ボクがかなり足を引っ張った。仕方ないじゃん。運動が苦手なんだから。その上、

「二人三脚は面白かったなあ」

明音さんのおっとりボイスで言われた二人三脚。

「だつてさあ、どうしても悠希と組みたかつたんだもの」

麻琴と二人で走つたのだが、背格好も走る速度も全く違う。最終的には麻琴がボクにあわせたせいで堂々のビリだ。実況がミスコンと同じ佐藤先輩ということで、鍵姫うん

ぬんも散々言われたし。さらに、

「借り物競争にも驚かされたわね」

鍵宮の体育祭は競技数が多く、一人二種目は当然で、三種目以上参加する人も多々いる。全校対抗リレーの参加者なんて四種目出場だって有り得る。

「そういえば、麻琴は何を持って来いっていう指定だったの？」

麻琴が参加した借り物競争。近くで応援していたボクは、麻琴にお姫様抱っこされた状態でゴールテープを切った。状況を理解できないまま自分の応援席まで運ばれたボクだったけど、そういえばなんだったんだろう？

「ああ、あれね。一番の親友って書いてあったんだ」

「むむー！」

「まあー！」

「ふふふ」

麻琴の発言に初美さんと希名子ちゃん、千歳ちゃんが、微笑ましいものを見るような顔つきになった。……なんだこの状況。

「麻琴さんはユウちゃんが本当に大好きなんですわね」

希名子ちゃんが麻琴と会話をするので、なんか珍しい気がするかも。

「いやはや、当然ですとも。部活の時間では悠希のこと、お願いしますね」

「もちろんですよ！」

……ボクの与り知れぬ所で不思議な同盟が結成されている？

「あ！　そういうえば、皆は進路、決めた？」

雲行きが怪しくなりつつあったので、自分から話題を振ってみる。とはいえ、これと  
いつていい話題がないので、つい学校のことになってしまった。

「ユウちゃんはどなの？」

真面目な希名子ちゃんが真つ先に反応してくれた。とはいえ、自分に返ってくるとは思っていなかったが。

「ボクは進学コースだよ。理系に。管理栄養士になるの」

「そう、あたしの為にね」

首を突っ込んできたのは麻琴。……当然ながら。

「どういうことお？」

首を傾げる明音さんに、今度は麻琴が答える。

「あたし、大人になってもマラソンしたいの。走るこしか出来ないし。で、大学で駅伝とかもしたいから、あたしも進学。ただ、文系にするの」

「あら？　ユウちゃんとは別なの？　私も文系の進学コースなのだけれど」

「そだよ」

千歳ちゃんの言葉に、麻琴の表情が少しだけ真剣なものになる。

「麻琴がマラソン選手になって、ボクがそれをサポートする。そのためにも、文理別々に進学するの。ただ、大学は同じにするんだけどね」

「え、ユウちゃんが行く大学にヒナツチも……?」

さりげなく麻琴をテイスる明音さん。まあ、テストの順位の差を知っているからね。しようがない、か。

「麻琴が堂々と正面から入試に挑むと思う?」

「悠希、それは……ひどくない?」

しよげる麻琴を見ながら話をすすめる。

「麻琴はAO入試ね。ボクはテスト受けるけどね」

「私立の総合大学、翔輝館大学。レベルは学部によってまちまちだけど、文系だと経済学部が低めかな」

「ああ……それって隣の県じゃなかったっけ?」

「姉の友達が進んだ学校なんだ。設備とか結構いい大学らしいよ」

「そっかあ。光希さんは元気?」

「まあまあかな。あまり健康的な生活を送ってはいないけど、元気ではあるよ」

忘れがちだけど、うちの姉はここのメンバーと温泉にも行っている仲だ。大錠祭の日



にも会っているし。

「で、明音さんは？ どうするの？」

「私も進学う。理系で、生物受講組だね」

「あ、ボクもだよ。生物受講するの」

「みんな進学かあ」

ぼつりと零した初美さん。ひよつとして……

「就職……するの？」

「うん。文系に進むんだけど、就職コース」

「にしても理系ばっかだねえ。私もだけどさ」

「そっかあ。希名子ちゃんも理系だよね」

「そうそう、店を継ぐから」

居ずまいを正して語りだす希名子ちゃん。兄と姉が一人ずついる彼女が、お店を継ぐの？

「うち、和菓子屋なんだけど、姉は洋菓子にぞつこんで、ケーキ屋に嫁ぐ始末。兄は甘いものが苦手らしくつて。早々に経営側へ、だよ。今は経営学を勉強してるの」

「だから希名子ちゃんがお店を継ぐために免許取りに進学するんだね」

「えへへ」

本当に家業が好きなんだなあ。姉と兄が離れていくのに。つて、そういえば？

「お姉さんも夏休みには手伝いにくるんだよね？」

「店番くらいしかしないけど。孫を見せに、がメインかも」

孫との発言に皆も驚くが、

「お姉さん、何歳？」

ケーキ屋に嫁いだ和菓子屋の娘つて、何者？

「姉は6つ上。兄は4つ上」

「ほおん。みんな夢溢れてるなあ」

……一人だけ就職ということで、段々と初美さんの様子が……。

「あたしも女子大生になってみたいけどさ、社会に出たいなつていう気持ちもあるんだあ。来年からはバイトも始めるし」

「初美さんバイト始めるの!？」

「一年だけね。年末の郵便局に始まり、コンビニとかね」

「あれだね、社会人の先輩だね」

「まだ、だからね？」

そんな感じで、まったりとした時間が過ぎていき、

「もうこんな時間だねえ。お母さんが夕飯の仕度始めてるから、わたしも手伝ってくる。」

もう少しゆっくりにしてね

「はっ」

## #52 月明かりの下で

「楽しかったね」

「うん」

支倉家を後にしたボクたち。夕食は大きな鍋ですき焼きだった。明音さんのお母さん独自の割り下で味付けされた牛肉は柔らかくてジューシー。仕込みを長時間していたのか白菜、エノキ、椎茸らも凄く味が染みていて美味しかった。ご飯もいいお米を使っているのか、炊き方がいいのか、ふっくら甘くて少し食べ過ぎてしまったくらいだ。食後にはこれまた手作りだという杏仁豆腐まで頂いてしまった。滑らかで、優しい甘さとフルーツの酸味が相性抜群で、レシピまで教えてもらって……今までにないくらい楽しい誕生日を迎えられた。

「スピード、気をつけてね」

「もちろん！ 大事なお姫様を乗せているからね」

そんなボクは今、麻琴が漕ぐ自転車の後ろで横座りしている。お回りさんに見つかからないことを祈るばかりだ。ただ、麻琴にぎゅっと抱きついていられる今は少し嬉しい。凄く落ち着くし安心できる。吹き付ける秋風は少し冷たいけれど、麻琴の温もりをより

強く感じられる。

「悠希、人気だからプレゼント一杯だね」

麻琴の自転車のカゴには皆から貰ったプレゼントが入っている。夕食直前には澄乃ちゃんやメグちゃんもプレゼントを持って来てくれた。明音さんが連絡していたそう  
だ。

「話は変わるけど、明音うちのお母さん、若かったね」

「本当に変わるね。でも確かに……明音さんとも凄く似ていた」

明音さんのお母さんとメグちゃんのお母さんは双子なのは聞いていたけど、年齢云々とかは全然聞いていなかった。だから、初めて会った時はその若さに驚いてしまった。うちのお母さんの澆刺とした若さとは別の、言葉にしがたい雰囲気だった。性格は母娘で少し異なり、お母さんは流石に大人の落ち着きがあった。明音さんもしっかり者では  
るけれども。

「はい、到着」

下り坂ばかりであつという間に家に着いた。時刻は九時前。空を見上げれば満月が輝いていた。そんな満月を、玄関扉の前で麻琴と並んで見上げる。

「今夜は月が綺麗だね」

不意に、麻琴が呟いた。

「それって……」

「意味を知ってて言ってるよ。一応、あたし文系だし」

「気恥ずかしそうに頭を掻く麻琴。夏休みに一悶着あつて以来、麻琴が素直な想いをボクに言ってくるのが減っていた。お互いに片想いをしているような感覚だった。でも……」

「実はあたし、悠姫へのプレゼント用意してないんだ。ねえ、何が欲しい?」

「優しい笑みを浮かべながら問いかける麻琴。不思議と、ボクが欲しがっているものを知っているようにも見える。だから、かなあ……」

「じゃあ、そのお——」

何も考えずにボクの言った言葉に、麻琴が素早く反応したのは。

「——ちゅ」

二回目……だろうか。こうして麻琴と唇を重ねるのは。柔らかな感触に心まで包まれるような、そんな感覚がボクを満たす。だが、

「お姉ちゃん……麻琴さん……」

引き戸の開く音と共に、聞きなれてきた低い少年の声が聞えた。

「……夏、希」

「そんな……そんなのって!!」

ボクと麻琴の間を割って駆け出す夏希。ロードワークに行くつもりだったのだろう。玄関にはストツプウオツチが落ちていた。それがまるで、ボクたちの時間が止まってしまったかのように思わせた。

## #53 家族会議

「やっぱり、こうなるとは思っていたのよ」

姫宮家の8畳の和室に、ボクと麻琴は正座している。目の前には母と姉が正座している。夏希のことは心配だけど、ケータイは持っているから大丈夫だろうとは母の弁。

「麻琴さん、君は昔から悠希にべったりだったからねえ。私としては、悠希は君を嫁に迎えるだろうと考えていました」

でも、と前置きをして母は話を続ける。

「何故かは分からないままだけど、悠希は女の子になってしまった。今の私は、以前程二人の関係を認められないのです」

ボクはひたすらに膝の上に置いた手を見ることしかできなかつた。そんなボクの左手を取って、麻琴が口を開いた。

「あたしは……私は、悠希の性別に関係なく、悠希のことが好きなんです。だから！ どんな苦難を乗り越えてでも悠希を幸せにします！」

「そういう問題じゃないのよ！ 私だって、孫を抱きたいのよ！」

「母さん！ それ、私と夏希に失礼！」



ずっと口を開かなかったお姉ちゃんが、溜息を吐いてから言葉を発す。

「確かに、私は見ての通りだし……夏希はまだ中学生。正直、私だって悠希と麻琴ちゃんがかくつくものだろうと思ってた。甥か姪を抱っこする機会もあるだろうってね」

「お姉ちゃん……」

「光希さん……」

麻琴の右手に、ボクのを重ね顔を上げる。

「それにね……」

さつきより重い口調で、お母さんは話し始めた。

「夏希のことも考えてほしいのよ。夏希だって年頃なのよ。突如現れたナイスバディの美少女が家にいる状況をどう捉えるかしら。しかも、悠希は夏希を弟としか考えてないから、露出の高い格好で平気で接するし、お風呂上りに洗面所であたり会っても何も言わないでしょう？」

……確かに、全裸で夏希に遭遇したことが何度か会った。特に、春先はお互いに状況を飲み込みきれていなかったから。

「あの子には刺激が強すぎるのよ、悠希の存在は」

確かに……ボクはどんどん感覚が女の子になってしまったから、よく分からなかった面があるけれど、この身体の魅力は確かなものだ。人に見られることも多かった。

「もう一点、気がかりなことがあるの」

トーンを変えずに母は口を開く。今度はボクではなく、麻琴の方を向いて、だ。

「麻琴さんのご両親はうちと違って、悠希が最初から女の子だと記憶しているのでしょうか？」

「そ、そうです……」

私の左手を握る力が一瞬だけ強くなった。これから話されることを察知したのだろうか。

「ご両親に、話しましたか？ 自分は女の子を愛してしまった、と。うちと違って、あなたは一人娘。責任があると思いますか？」

「……夏ごろから一つ、考えがあっただんです。10年後の計画。上京して、向こうで養子を貰って、男には逃げられたことにしようって。そんなことを、考えていました……。その子を悠希と一緒に育てられたら……。幸せだろうなあって」

「勝手なことを……。悠希も麻琴さんも、魅力的な女の子です。もっと、建設的な将来をですね……」

「お母さん！」

我慢できなかった。してはいけないと思った。だからこそ、自分の意志を示さないといけないんだ。

「ボクは！ 麻琴以外の人を愛するつもりなんてない！ それは！ 昔から変わら  
ない、姫川悠希という存在そのものだから！ 性別なんて関係ない！ 麻琴と一緒にいる  
自分が、姫川悠希という人間だから！」

俯いたままの麻琴を抱き寄せて、啖呵を切つてやった。思えば、お母さんに反抗する  
のは初めて、かな。

「母さん、私はこっちに味方するよ。今のは心打たれたね」

ボクと麻琴を抱きしめるように、お姉ちゃんの腕がまわされる。

「はあ……仕方ないわね。じゃあ、光希に彼氏が出来たら二人の関係を認めましょう」  
「え、ええ!!!」

かくして、女だけの家族会議はお姉ちゃんの悲鳴によつて幕を閉じた。もちろんそれ  
が母なりの冗談で、ボクに考える時間をくれたということなのは重々承知だ。けれど  
……考えても考えても自分がどうすればいかなんて分からなかった。

## ふゆやすみ

## #54 離別

さしものお姉ちゃんも、そんなすぐにさあでは彼氏が出来ず、ボクと麻琴の関係は今までにないくらい宙ぶらりんの関係になっていた。一緒に登校する習慣は残っているが、部活のある日は残ってまで一緒に帰ろうとすることはしなくなった。麻琴の方がかなり自重しているようで、腕を組むことも手を繋ぐこともしていない。そんな日々がずっと続いて、とうとう二学期の終業式になってしまった。クラスメイトのみんなにはかなりの心配をかけてしまった。別に、喧嘩をしているわけじゃない。お互いがお互いに距離感を考え直しているだけなんだ。

「あたし、塾に通うことにした。冬期講習からだから、まあ……明日からなんだけど」ボクらに吹く風は冷たく、制服の上からコートを着けていても首元が寒い。……マフラーは秋ごろから二人一緒に巻けるものを編んでいたけど、どうしても使おうとは思えなかった。そんな中、ぼつりと麻琴は塾に行くことを告げた。

「翔輝館の経済学部くらい、AOで落ちても一般入試で行ける学力は身につけないとなあって思ってたさ」

「うそ……去年みたいに、うちに来ない、つもり？」

「そう、なるね。それにさ、やっぱり……男子を好きになつた方が悠希にとつても幸せなのかなつて。あたしが隣にいない方がいいのかなつて」

……なに、言っているの。そう聞き返すのが限界だった。寒さに負けない麻琴の、短いスカートから伸びる足が踏み出される度に、ボクとの距離は開いていく。そう、いつもならボクに歩幅を合わせてくれる麻琴が、自分のペースで歩き始めたのだ。

「別に塾へと男漁りにいくわけじゃないよ？ ただ、さ。やっぱり、あたしの好きだった麻琴は男の子だったから」

そう言つて、どんどん進む麻琴の、後姿に……視界が滲む。

「どうして！ 二度もキスしておいて、なんのつもり!? ボクは……」

「そのボクつて言うのもよしなよ。確かに可愛いけどさ、*“今”*の悠希には似合わない」  
……麻琴の発した *“今の”* という言葉で *“今までの”* 自分を全て否定された気持ちになつた。どうして……。立ちすくむボクを一瞥して、麻琴は足早に去つていった。気付けば、ボクはもう自宅の前について、麻琴の姿は見えなくなつていた。

「——き、悠希！」

玄関の前で、どれだけの時間呆けていたのだろうか。不意に聞えてきたお姉ちゃんの

声に、ようやく反応できた時には、ボクの身体はすっかり冷え切っていた。

「お姉ちゃん……麻琴が……遠退いていくよ。ボクは……どうしたらいいの……」

「悠希、ごめんね。私に男つ気がないせいで……」

申し訳なさそうなお姉ちゃんの声に、今度はボクが申し訳なくなる。お姉ちゃんに彼氏が出来ようが出来まいが、これはボクと麻琴の問題なのに……。きつと、麻琴自身が両親に打ち明けたのかもしれない。……でも。

「う、ぐす……うあああ——」

誰かの前で大泣きするのはいつぶりだろうか。ましてや、こうしてお姉ちゃんに抱きしめられながら涙を流すなんて……昔の自分だったらありえないだろう。

「泣きたいだけ、泣いていいからね」

泣くだけ泣いたボク——違う、私はお風呂場へと向かった。お姉ちゃんに温めてもらったけれど、それでもやっぱり、身体の芯は冷えているから。

「おか……えり?」

先に帰っていたらしい夏希が困惑したような声で言う。正直、夏希がああの瞬間を見ていなければ……いや、夏希のせいにしちゃいけない。私が、麻琴にキスを求めたせいで。そう、やっぱり私のせいなんだ。

「ごめんね、夏希。脱ぐから出て行って」

「わ、分かった」

……ちよつと、強い口調だったかなあ。後悔しながらも、ブレザーを脱ぐ。セーターも脱いで畳む。冬休みになったため、制服は一度クリーニングに出す。丁寧に畳んで洗濯機の上に置く。少し屈んでスカートも脱いでさらにその上に畳んで置いてから一息つく。ブラウスは乱暴に洗濯籠に放り込む。体を起こすと、涙の跡でひどい顔をした私が鏡に映る。レモンイエローのブラに包まれた私の胸は……苦しいくらいに女の子を主張している。男の子のままでは全く分からない。下着も脱いで浴室に入る。温まりきらないシャワーを頭から浴びて、泣き跡を消すように顔を拭う。お風呂場の壁に手をつけて、少し前かがみになる。視線は下を向いている。お湯は伝ってこない。なのに、どうしても視界が滲む。結局、シャワーを浴びるだけで私は浴室を後にし、髪を乾かすこともなくベッドで沈むように眠りにつくのだった。

## #55 決別

「あ、あ……」

あれから二日が経った。あれから、麻琴の声も聴いていなければ顔も見えていない。あの日、濡れた身体のまま、服もろくに着ずに眠りに沈んだ私はひどい風邪に罹った。やっと熱は37度台前半まで落ち着いた。それでも若干高いのだが。身体の節々は痛いし頭もガンガンする。喉も痛いけど……一番痛いのは心だろうか。

「ふう……」

気だるい身体を引き摺って一階へ行く。意識は少し朦朧としている。つと！

「お姉ちゃん!!」

「……夏希」

「まだ寝てなきやダメだよ」

そう言われるがまま夏希に抱えられて自室へ戻った。お姫様抱っこされるとは思っていなかったが、夏希はどんどんと男になっている。すっかり逞しくなっている。そうか、夏希もそろそろ中学二年生になるんだよね。私も……もうじき、高校二年生か。麻琴とは確実に同じクラスにはなれない。……麻琴は、何をしているんだろう。



そう思いながら、さらに三日が経過した。あと四日くらいでお正月になる。この三日間、私はどうにも何をしても身につかない。冬課題は片付けたけど、どうにも普段ならミスをしたくない問題でミスをしてしまった。……麻琴は課題を終えたかな？ その上、おでんに大根を面取りしている時も失敗して指先を切ってしまったり、他にも煮玉子用の玉子をうっかり割ってしまったり……枚挙にいとまがない。あと、一番呆れられたのは課題になっていない書初めのお手本を探して右往左往したこと、かな。お母さんもお母さんなりに気を使ってくれているのか、買物に頻繁に連れて行ってくれたのだが……年末のバーゲンのせいで混雑がひどく気持ち悪くなってしまった。

「……麻琴、何しているのかな？」

いつも麻琴のことが脳裏にちらついて、何事も手につかない。

「お姉ちゃん。パスタ、何にする？」

ぼうつとしたままベッドで横になっている私の耳に、ノックの音が聞えてきた。夏希も、最近はきちんとノックしてくれるようになった。

「……ピアンコ」

そう答えてから数分後、階段を下りると五人分のパスタがテーブルに並べられていた。この頃はお父さんも家にいてくれる。でも……家族だけの冬休みというのは私に

とつて違和感この上ない。そういえば……夏休みに麻琴が来た時、一緒に Pasta 食べたなあ。麻琴もビアンコにしたんだっけ。また、あの頃に戻れたらいいのに。そんな、叶いそうにないことを思いつつ Pasta を食べ終わる。空いた食器を持って台所へ。その時私は母に一つ、頼みごとをした。

「悠希、本当にいいの？」

母の心配そうな声が後ろから聞えてくる。私は頷くだけで応える。

「二年前と同じくらいでお願い」

母の渋々といった返事が聞えると同時に、私の髪に冷たいそれが入れられた。スパツという音とともに、黒い糸のように髪が流れ落ちる。この一年近く、梳くことはあつても本格的に切ることはなかった私の髪。入学前は肩より少し下だった毛先は、今では腰までの位置になっていた。そんな長い黒髪を今、男の子だった頃と同じ長さまで切ろうとしている。たしかに、男子としては長い髪だったけど、女子としてはかなりショートだろう。でも、これでいいんだ。ウジウジした自分と決別しないと。今更だけど気付いたんだ。麻琴の発言——翔輝館の経済学部くらい、AOで落ちても一般入試で行ける学力は身につけないとなあつて思つてき——から分かるように、麻琴自身は私から離れようという思いを本当は抱いていない。だからこそ、今の惨めな私を見せるわけにはいか

ない。

「前髪はどうする？」

「眉にかかるとくらいかな」

そうして暫らくの間、母に髪を切ってもらい、

「後ろ、少し長めに残しておくからね」

そう強く念押しされて断髪は終了した。一応、麻琴よりは長いかな。

「うん、なんかすつきりした。ありがとう、お母さん」

「そっかそっか。じゃあ、おせちの手伝いよろしく」

……え!? すっかり年の瀬、忙しくなりそうです。

## #56 新春

「おやすみ」

「俺も寝る」

「あ、うん。おやすみなさーい」

大晦日。年越し蕎麦も食べ終えた姫宮家、両親は先に眠りリビングには私とお姉ちゃんとお夏希が残っている。

「あ、お姉ちゃん。ケータイ鳴ってる」

蕎麦を食べたどんぶりを洗っている私に、夏希が教えてくれた。夏希にしてみればお姉ちゃんもお姉ちゃんなんだけど、お姉ちゃんと姉さんで呼び分けている。それはさっておき、水道の水を止めてタオルで手を拭く。そうしてやっと気付いた。私のスマホが流す音楽が……威風堂々であることに。指の震えを抑えながら通話できる状態にする。

「もしもし……麻琴」

「悠希……今、いいかな？」

久しぶりに聞く麻琴の声はどこか不安げで、いつものような快活さに欠いていた。

「いい、よ」

それにつられるように、私の声にもどこか不安な感情がこもる。

「今、悠希の家の前にいるんだけど、会えないかな?」

すぐさま玄関まで走って小窓から外を確認する。そこには、こころなしか疲れた様子の麻琴が立っていて、私はすぐに扉を開けて……

「ま、と……麻琴お」

大切な人の名を呼びながら強く抱きしめた。麻琴の身体は冷え切っていて、玄関の前で電話をかけるか悩んでいたことが分かる。

「上がって。何か温かいものでも……」

あ、この前買ったアツプルティーがあるじゃないか。それにしよう。というか、麻琴の前でこの格好はやめよう。夏場はTシャツ1枚で過ごしていたけど、冬場はもこもこのパジャマと半纏で着膨れてしまっている。

「お姉ちゃん! アツプルティー淹れてあげて。私は着替えてくるから!」

「あいよ」

そろそろ年が変わることだろうか。お姉ちゃんはケータイでせつせとメールと打っている。そんなお姉ちゃんにお願いだけして、私は階段を駆け上がって自室へ急ぐ。パジャマシーズンは寝るときも下着はつけている。取り敢えずパジャマだけ脱いで下着姿になる。……そういえば、髪を切ったことに何も触れてくれなかったなあ。まあ、そ

こまで気が回るようじゃ、麻琴らしくないけど。そんなことを考えていたからだろうか、姿見に映る自分が僅かに微笑んだ気がした。

「さてと……何を着ようかなあ」

冬休み、お母さんと買い漁った新品の服が何着もある。組み合わせ自体が考えてあるけど、まだ実際に着ていないコーデもいくつかある。姿見の前で何着か重ねながら、決めたのが……

「お洒落は寒さに打ち勝って手に入れる。お母さん……ハードだよ」

珍しく試してみたモノトーンコーデ。白のドレスシャツには雪の結晶を模した装飾がされていて、このシーズン限定って感じの一着。下は黒のフレアーで、丈は膝上。寒い。でも、脚は一応オーバーニーのソックスに守られている。スカートの裾とソックスの上端の間——いわゆる絶対領域——の重要性はとくに理解したため、このコーデに特段の不安要素はない。セーラー風な襟が特徴のコートを羽織って一階へ降りる。その直前にふと自室の時計をちらりと見ると、『1月1日 水 午前00:31』と表示されていた。服を選ぶのに結構な時間を使ってしまったようだ。

「お待たせ！」

私がリビングに戻ると、麻琴は久しぶりに見る朗らかな笑顔で、

「明けましておめでとう。今年もよろしくね、悠希。さあ、初詣に行こう」

と手を差し出しながら私に言った。

## #57 初詣

「この辺に神社なんてあったっけ？」

三日月だけが輝く夜空の下、麻琴と並んで歩く。麻琴が行こうとしている神社は、町外れにある寂れた神社らしい。人は全くと言っていい程来ないらしい。

「麻琴、疲れてる？」

冷たい風に吹かれながら歩く私と麻琴。二人とも手袋はしていない。マフラーは私が結局編み終えた二人用の長さのマフラーを巻いている。温かいのは、マフラーをしているからだけではない。

「塾もハードだったし、部活の合宿もあったからね。でもまあ、悠希といれば癒される」  
月を見上げながら呟いた言葉とともに、白く吐息が零れる。

「悠希こそ、何か雰囲気変わったね」

「そう……だね。髪、切ったから」

そっか、と短く返事をして口を噤む麻琴。似合うとは言ってくれない。やっぱり今のボクじゃ……。

「悠希、やっぱりあたし……悠希のこと大好きだわ」



「な、何よ。急に……」

このタイミングで言われるとは思ってもみななかった一言に、普段以上に動揺してしまふ。そもそも、普段の状況だとしても今のセリフには動揺する。

「短い期間でも……悠希と会えなかつたり声聴けなかつたりして……すごく辛かつた。目蓋を閉じるだけで悠希のことが浮かんで……」

——ちゅっ——

三度目のキスはボクから麻琴にした初めてのキスだった。

「ゆ、悠希」

「私もね……麻琴のこと大好きなんだって、やっと気付いた。本当の意味で、ボクは麻琴が好き。側にいてくれないと……心が痛い」

絡めた指に少しだけ力をこめる。

「……悠希。ずっと側にいるよ」

「でもさ、来年になったら……違うクラスになっちゃうでしょ?」

「大丈夫。ほら、心は一緒ってやつだよ」

そう言われて、黙り込んでしまう私。ずっと一緒にいるために、今は別々に進まないとならない。そう提案したのは私のはずなのに……やつぱり苦しい。自分で思っている以上に私は麻琴なしではダメになっているのか。結局、言葉を紡ぐこともままならな

いまま、私と麻琴は神社へと着いていた。

「ここだよ。行こう」

石の階段を昇った先にある本殿。人気は無くしんとしているが、決して寂れた印象を与えない。神聖とも取れる空気がそこには広がっていた。二人で賽銭箱の前に立ち、二十五円を入れて鈴を鳴らす。

「初めての共同作業、なんちゃって」

恥ずかしそうにはにかむ麻琴を可愛いと思いながら、お願いごとをする。

（麻琴が陸上で怪我をしませんように）

「ふう。悠希はなんてお願いしたの？」

私が合掌と解くと麻琴が尋ねてきた。その顔が少しだけ上気しているのはどうしてだろう？

「麻琴が怪我しませんようによってお願いしたよ。麻琴は？」

「あたしは……悠希と思いい出をいっばい作れますようにって」

普段は見せない麻琴の乙女然とした表情に、くらくらしてしまふ自分がある。どうしてだろう、男の子だった頃の自分だったら気付けなかったような麻琴の表情を今は鋭敏に気付けるし、愛おしく思うのは。

「か、帰ろうか？」

何かが自分の中で揺らいでいる。それを悟られないように麻琴に提案するが……。  
「もつと、ずつと一緒になりたい。いいでしょう?」

気まぐれな猫が甘えるように、不思議な色香を伴って私の眸をじつとみつめる麻琴。

「……悠希、ここでシよ?」

何を? とはとても聞けなかった。その時、ポケットでスマホが鳴っていることに気付いた。

「ちよ、ちよつと待って!」

メールの送り主はお姉ちゃんで、

『麻琴ちゃんに出したアップルティーにこっさりお酒混ぜてみた。麻琴ちゃん、酔ってる?』

……ここに犯人がいた。熱を持った唇も、上気した頬も、普段以上の甘えっぷりも酒のせいだったのか。

「悠希、スマホじゃなくてあたしを見て?」

とろんとした表情で迫ってくる麻琴。じりじりと後退する私だったが、とうとう垣根に背中があたる。

「ゆう、き……」

私の名を呼びながら倒れこんできた麻琴は既に寝息をたてていて、安心しきった様子

だった。そんな麻琴を見ていたら、私まで眠くなってしまう、麻琴を抱き枕に眠りに落ちた。

「悠希。悠希！ 見て！」

何時間か眠ってしまった私が麻琴に起こされると、辺りはうつすらと明るくなりはじめ、

「初日の出だよ!! あたし、生で見るの初めてかも！」

燦然と輝く初日の出がボクたちを照らしていた。

## 短い三学期はさよならの季節

## #58 ぬくもり

「本当にごめんなさい!!」

私が三学期で初めて発した言葉は友人との再会を祝う言葉ではなく謝罪だった。私の目の前―頭を下げているから厳密には違う―には初美さん、明音さんに千歳ちゃんやもなかちゃんがいる。二学期の終盤、私と麻琴が距離感をつかめずにいた時に心配をかけたことを謝っている。

「えっと、何が?」

初美さんの声に私が頭をあげると、みんな不思議そうな顔で私と隣にいる麻琴を見ている。

「そのお……いろいろ心配かけたから、私……」

「あたしたちがほら、ちよつとぎくしゃくしてた時に気を遣わせちゃったからさ」

私と麻琴が説明すると、明音さんがいつものようにまったりと口を開いた。

「二人とも仲直りしたんだしい、気にしなくてもいいんじゃないかなあ? それよりも」

「ユウちゃんが髪を切ったことの方が重大だと私は思うのよ」

明音さんに続いてもなかちゃんに詰め寄る。

「それに、一人称がボクじゃなくなってる。どういうことかな？」

「ずいずいと近づいてくるもなかちゃんの瞳。まあまあと千歳ちゃんの手が割って入る。」

「順を追って説明してもらいましょう。ね？」

「それはまた今度説明するよ。な？」

麻琴がちらりと私を見る。頷いて返すと、今度は時計を指差した。

「委員長、時間だよ」

三学期の初日、始業式が体育館で行われる。……寒いんだろうなあ。

「ほら、行こうか」

始業式を終えて教室に戻ると、あちこちでおしやべりの花が咲いていた。このクラスで過ごすのもあと数ヶ月。……二年生になったら文系に進む麻琴とは同じクラスにならない。もちろん初美さんや千歳ちゃんとも別のクラスだ。

「とまあ、簡単に話せばこんなもんな。悠希？」

私物が物思いに耽っている間に麻琴が冬休みにあったことを説明していた。

「まあ、元鞘ってやつかな？」

「綾ちゃん……何か古いよお」

「元の鞆に収まる。ふふ、なんか夫婦みたいだね」

「だってよ。悠希」

もなちちゃんが大人っぽく笑うと、麻琴が嬉しそうにこつちを見る。夫婦って、  
「別に……そういうんじゃないよ。ただ……親友だから」

自分と麻琴の間柄を何て表現するのが最も正しいのか、今の私には分からない。麻琴は私に対して明確な好意を持っていて……ボクも麻琴のことは好きだけど……どういう意味で好きなんだろう。

「おっと、そろそろホームルーム始まるから席に戻ろっか」

もなちちゃんが手を叩いて解散を促した。結局、私自身がどう麻琴を想っているのかという問いには答えを出せずにいる。今の関係は気楽ですつと続けばいいとも思っている。だからといって……。

もやもやとした気持ちを抱えたまま、放課になった。希名子ちゃんを加えておしゃべりの時間を延長。食堂の外にあるテラス席を陣取っている。今日は始業式だけだったから時間はまだ正午過ぎ。天気も良くてほかほかしている。

「二人が仲直りできてよかったあ。今度一緒にお店において。サービスしちゃうわ」

和やかな笑顔を浮かべる希名子ちゃん。冬休みはお店の手伝いでてんてこ舞いだっただそうだ。

「二年つて結構あつさりと終わるものね。ふう」

憂いを帯びた千歳ちゃんの表情。年始はすさまじく忙しかったらしい。

「わたしたちも先輩になるんだねえ」

のんびりとした声で明音さんが呟く。

「部活の新人部員!!」

「ど、どうしたの希名子ちゃん?」

手をぼんと叩いて希名子ちゃんが唐突に大きな声をだした。大錠祭の後に、副部長に就任した希名子ちゃんも、来年のことを考えていたのかな?

「四月になったら、部活でもいろいろ変わるでしょ? 部員集めつて大変そうよね……」

「ま、人気の部活は気が楽だけどね」

麻琴が所属している陸上部や、明音さんが所属している吹奏楽部は人気部活の代名詞のような部活だ。初美さんが所属するハンドボール部も、部員は結構多い。千歳ちゃんのある弓道部は実村先輩の影響もあつてか人数は多いらしい。

「文化部つて年によつて波があるからねえ」

去年と今年を比べてか、ふむふむといった様子で言うもなかちゃん。確かに、家庭科



部に二年生の先輩はあんまりいない。暖かな日差しにのんびりとおしゃべりをつけているうちに、誰かのお腹がぐーつと鳴った。

「じゃあ、今日はこの辺でお開きにしますか！」

「おなか空いたから？」

一時近くなつたタイミングで麻琴が立ち上がった。私も、ちよつとおなか空いてきた。

「悠希、お昼食べに行つていい？」

「もちろん！　じゃあ、帰ろうか」

みんなとお別れして家へと歩き始める。麻琴との関係は宙ぶらりんでよく分からなけれど、ゆつくり考えればいい。歩くみたいに、ゆつくりと。今は、それでいい思っている。だから、いつか、きちんと答えを出したいと思つている。

「麻琴。手、繋ぎこう？　手袋、忘れちゃった」

手袋よりも、君の手の方が暖かい。きつと、心まで包まれるからかな、なんて。恥ずかしくて言えないけれど。差し出された君の手は、暖かくて大好きだ。

## #59 三年生のために (1)

三学期は大きな行事も少なく、まったりと進んでいった。冬休みの課題がテスト範囲になる実力テストで、麻琴がようやくやく100位を切ったのが一番のサプライズだったかな。初美さんが200位近い危険域にいて明音さんに滅茶苦茶怒られたのはここだけの話。

「そろそろバレンタインだね」

部活の時間にそんな話題を振ってきたのは希名子ちゃんだった。

「和菓子屋さんでもバレンタイン気にするんだね？」

もうすぐ二月ということで、バレンタインの話題がぼつぼつと浮かぶ頃合。ただ、希名子ちゃんが言い始めだとは思っても見なかった。てつきり芙蓉先輩辺りが部活の話として切り出すものだ。

「確かに、うちでバレンタインのフェアはやらないけれど、お義兄さんのお店だね。手伝いに呼ばれるの」

そういえば、希名子ちゃんのお姉さんは和菓子に嫌気がさしてケーキ屋さん嫁いだって聞いたことがある。ケーキ屋さんならバレンタインはとっても忙しくなりそう

だ。

「ユウちゃんは、麻琴ちゃんにチョコ作ってあげるの？」

「まあね。毎年の恒例行事だから」

希名子ちゃんには言えないけど私が男の子だった頃からの恒例行事なのだ。麻琴にはチョコを湯煎することも出来ないと思う。

「今年はある人が多いから気合入っちゃおうね」

麻琴、明音さん、初美さん、希名子ちゃん、千歳ちゃん、先輩たちにもあげたい。センター試験も終わって三年生たちはほとんど登校してきていない。……あまほ先輩にもあげたいのになあ。

「みんな、ちよつといいかな。今日の部活は話し合いにさせて」

ちよつと急ぎ気味で扉を開けたのは芙蓉先輩だった。教壇に立って話し始めたのはあと一ヶ月程で訪れる卒業式のことだった。総練習が行われる2月下旬に三年生のための食事を開こうということにしたそうさ。もちろん全会一致で賛成となった。そして、部員全員の手作りで料理を揃えたいというのも賛成となった。

「じゃあ、さっそく何を作るか決めようか」

二年生の先輩は芙蓉先輩ともう一人、九重先輩しかいない。二人の先輩を中心にまずは各々の得意料理を発表していく。

ハンバーグ 餃子 唐揚げ 出汁巻き玉子 煮魚 コロッケ

六人の部員それぞれの得意料理がルーズリーフに書かれていく。出汁巻き玉子は希名子ちゃんの得意料理だ。

「煮魚は量を作るのが難しそうね……まあ、私のハンバーグも大きさによるけど」

芙蓉先輩が困り顔だ。確かに他の料理はある程度の量を作ることができるけど、煮魚は時間もかかるし大変そうだ。

「炭水化物は必要でしょうか？」

希名子ちゃんが芙蓉先輩に尋ねる。確かに、おかずばかりだと……ただ、軽食メインなのかがつつり食べられるのがいいのか、それもよく分からない。

「そうね、三年生5人分の主食も考えなければ……。一応、炊飯器はあるから……」

「一番の懸念はね、残った部費で十一人分の食材を揃えられるか、なのよ」

主に会計を担当している九重先輩から苦い一言が加えられた。部費の大半を文化祭で消費するのが文化部の基本的なスタイルだ。今年の場合は衣装代がほぼ無料だったため、浮いたお金があつたものの、それと売り上げを足しても十一人分というのはなかなか苦しいかもしれない。

「在校生は給仕に専念する、それじゃダメなんですか？」

煮魚を却下された美夏ちゃんが先輩たちにきく。

「二応、ひき肉は安く出来ますけど」

家が精肉店を営む千恵ちゃん、ルーズリーフに書かれたハンバーグ、餃子、コロツケの部分の指しながら言った。確かに、ひき肉が沢山必要なメニューだ。

「叶うことなら立食形式がいいし、全員で同じ時間を共有したいじゃない？ あと、肉ばかりというのも良くないからハンバーグはやめようと思うの」

立食形式かあ。確かに、その方が気楽な感じだし話しやすそうだ。芙蓉先輩がハンバーグの文字の上から二本線を引いて却下と書き込む。几帳面な字だ。五つになったメニュー案を見て閃いた。

「ボクの唐揚げを下げているですか？ コロツケと油を兼用できないし、だったらロールキャベツの方がいいかなって」

ボクがそう言うと、芙蓉先輩も頷いて唐揚げを却下してロールキャベツを書き足した。お弁当のメニューにならないから作る機会は唐揚げより少ないけれど、ボクの得意料理の一つだ。

「西村さんからひき肉を仕入れることは確定ね。お願いします」

九重先輩が千恵ちゃんに頼むと、千恵ちゃんは任せてくださいと返事をした。

「やっぱご飯が必要ね。おにぎりでもいいかしら？」

言いながら芙蓉先輩はルーズリーフに書かれたメニューの上におにぎりを書き足し

た。

「お米は私が用意するわね」

「あうう、私は何をすればいいのでしょうか？」

作るものが決まっていけない美夏ちゃんが困ったような声を上げる。

「おにぎり、任せていいかしら？」

「はい！」

「取り敢えず、今日はこれくらいにしましょうか。外はもうかなり暗いですし」

結構な時間を話し合いに割っていたようで、一月末の空はもう真つ暗だ。

「それじゃ、お疲れ様でした！」

「「お疲れ様でした！」」

リュックを持って第二調理室を出ると、廊下の先に麻琴が見えた。

「おーい、悠希！」

軽やかな足取りでボクに駆け寄ってくる麻琴。

「部活が終わったばかりだから迎えにきちやった」

「ありがとう。じゃ、帰ろうか」

暖かな気持ちに包まれながら、群青色の空の下をちよつとだけゆつくりなペースで歩く。この温もりに出来るだけ長く包まれていたいから――

## #60 三年生のために(2)

二月も終盤となり、雪が降る日が何日か続いた。調理部では三年生を送り出す為の食事会の準備が着々と進んでいた。その主な準備というのが、

「こういうのって、小学生を思い出すよね」

「ああ、言われてみれば。でんぶん糊を使ってるから尚更だよな」

第二調理室の飾りつけを作っている。あれこれ分担するスタイルで、私と希名子ちゃん、折り返し紙を細長く切って輪飾りを作っている。小学生の時なんかは何かと出番があつたような気がするけれど、作るのなんて久々だ。ちよつと楽しい。美夏ちゃんと千恵ちゃん、薄い色紙を使って花を作っている。これまた学校行事の飾りつけでは定番で、ティッシュくらい薄い紙を重ねて折って真ん中を輪ゴムで括つてからふわふわするように開くんだっけかな。

「みんな、進捗状況はどう？」

先輩たちは備品である食器や調理器具の点検を行っている。九重先輩は追加で会計関連の仕事もこなしていた。この学校には各部活動に一台タブレットが貸与されていて、生徒会執行部に活動報告したり、学校ホームページの部活欄を更新したり、表計算

ソフトが入っているから会計にも使えるし、テキストエディタもあるからメモやレシビを貼り付けることもできる。インターネットには繋がるけれどフィリングがかなり強力で、レシビ紹介をしている個人ブログにアクセスできないこともしばしば。

「そういえば流歌、しずくから26日の使用許可は出ているの?」

芙蓉先輩が九重先輩に問う。すると九重先輩はしたり顔で答えた。

「確認してなかったのね。とつくよ」

「ありがとう。じゃ、私は包丁でも研いでいようかしら。流歌はどうする?」

備品を保管している準備室へと足を向ける芙蓉先輩が九重先輩に尋ねる。

「なら、私は石川先生のところへ行つてこようかしら」

ん? なんて石川先生のところへ? 確かに副顧問ではあるけれど。

「確か……キーキ作るのが上手なんでしょう?」

「そうそう。頼んでみようかなと」

そうだったんだあ。今年一年副担任だったし数学だから毎日のように話していたけれど、石川先生から料理したりお菓子作ったりなんていう話はされなかったや。

「ユウちゃん、そつち繋げて」

おつとつと。仕事に集中しなきや。希名子ちゃんから渡された折紙を繋げれば、輪飾りは完成つと。



「カラフルになったね」

「華やかかって感じだね」

折紙の基本色は全部入っていて、たまに光る金銀がいいアクセントだ。あとはこれを飾って……あれ？ ふと思った。輪飾りって天井近くに飾るものだと。

「私らじゃ飾る位置に届かないね」

「……あ」

希名子ちゃんも気付いたらしい。ちなみに、私も希名子ちゃんも156センチ。背中合わせだとびったり同じ高さなのだ。

「脚立か台か借りてくるね」

包丁を研ぎ始めた芙蓉先輩の後ろを通って準備室へ。多分、台くらいならあるんじゃないかな。第二調理室の椅子は丸椅子で微妙に不安定だから却下。普段のお茶会で使う時のように座る分には問題ないのだが。それに座面が小さいからやっぱり不安。

「あ！ 普通の椅子もあったんだ」

私が見付けたのは教室で使うものと同じ背もたれのある四角い椅子。いくつか積まれているそれらから一つ持って準備室を出る。

「ん？ あ、飾りつけ始めるのね」

あらかたの包丁を研ぎ終えたらしい芙蓉先輩に声をかけられる。

「去年は高須先輩が飾ろうとしたら、椅子に乗っても届かなくて、もう一年経つんだなあ」

あまほ先輩……可愛い。というか、この部屋の天井が高いんだよね。まあ、うっかり料理を焦がしても天井が煤で汚れたり、スプリングカラーが反応したりしないようにある程度の高さが必要なのも分かるけど。

「じゃ、飾ろうか」

私が椅子に乗って希名子ちゃんから輪飾を受け取る。確かに、天井が高いから背伸びしないと……よし、届くね。画鋏を使って留めて、一度下りないと。

「あ、あのね、ゆ、ユウちゃん……」

椅子を動かそうとすると希名子ちゃんがおどおどしている。ちよつと顔も赤い。理由を聞くと私まで顔が赤くなってきた。

「ユウちゃん、椅子に乗って背伸びしちゃうたら、ば、パンツ見えちゃう……」

「ここまで恥ずかしくなると今更「女の子同士なんだし」って言えない。」

「ジャージとか持つてない？」

「……ないけど、私、タイツ履いてるから、私が椅子に乗るね」

そう言つて希名子ちゃんはそそくさと椅子を動かして上に乗る。私が輪飾りを渡すと、希名子ちゃんも背伸びして画鋏で留める。……確かに見えちゃう角度だ。希名子

ちゃんも実はスタイルいいんだよなあ。

「二人とも〜」

「こつちも出来たよ」

美夏ちゃんと千恵ちゃんが作っていた花飾も完成したみたい。これをどこに飾ろかな。

「副部长、ご指示を！」

人懐っこい笑顔を浮かべる美夏ちゃん。ちよつと麻琴にも似た雰囲気がある。

「どうしようかしら。輪飾りの画鋏を隠すように飾れないかしら？」

「それいいですね。両面テープがあるのでためしてみますよ！」

千恵ちゃんも家のお手伝いで接客業をしているからか、丁寧な口調がデフォルトになっている。

「じゃあ、椅子持ってくるね」

美夏ちゃんが準備室へ椅子を取りに行っている間に、完成した花飾を壁側に寄せる。

「美夏ちゃんに付けてもらった方が良さそうだね。私じゃ届かないかも」

あまほ先輩程じゃないけど、明音さんくらい小柄な千恵ちゃんには届かないと思う。

「私たちでも背伸びしないと届かないものね」

「そうそう、私にまっかせなさい」

椅子を持ってきた美夏ちゃんがやる気満々な感じをアピール。美夏ちゃんは160センチくらいだから背伸びしなくても届くだろう。……パンツも見えずに済むだろう。多分。

「私も手伝おうか？」

「「「のわ!!」」」

「そんなに驚かれると悲しくなっちゃうなあ」

私たち全員が壁側を向いている時に後ろから九重先輩に声をかけられた。そりや、流石に全員驚くよ……。

「いつの間に戻ったんですか？」

「さつきだよ。さつき。石川先生にケーキはお願いしてきたよ」

「楽しみですね！」

「ケーキの願ひするだけにしては長くないですか？」

「確かに。寄り道でもしてたんですか？」

希名子ちゃんが一番初めに驚きから復活し、ボクらも次々と口を開く。

「新しい紅茶を試飲させてもらっていたの。美味しかったわよ」

「流歌、また紅茶頂いていたの？ もう、忙しいのに」

「ごめんね。じゃあ、ここからは全員で準備しちゃいましょうか」

「そうね。これが終われば今日は解散よ」

今日は2月25日の火曜日。明日の昼休みに料理の仕込みをして、放課後、卒業式の総練習を終えた先輩たちに振舞う。

「よし、頑張らなきゃ！」

そつと意気込んだつもりが声に出ていたみたいで、一番近くにいた希名子ちゃんが、ふんわりと微笑んだ。

「そうね、頑張らなきゃね」

調理部全員が三年生のために一丸となっている。そんな感じがなんだかとっても心地いい。

## # 6 1 三年生のために (3)

そして翌日。放課後を迎えた私達は料理の仕込みをしている。私はロールキャベツのタネを仕込み、希名子ちゃんは丁寧に出汁をとっている。芙蓉先輩はハンバーグを却下した後、何を作るのか書いていなかったけれど……ポテトサラダを作っているみたいだ。皆が忙しそうに仕込みをしている。三年生はまだ卒業式の総練習を行っている。

「悠希ちゃん、そっちは終わった？」

餃子を焼く直前の段階まで仕度し終えた九重先輩が話しかけてきた。私もロールキャベツを煮込む直前の段階まで仕上げることができた。キャベツは芯を取ってタネを包んで、短く折ったパスタを刺してとめる。

「ええ、あとは煮込むだけです。コンソメの用意もできてますよ」

コンロに置いた鍋の中にはコンソメスープが注がれている。トマト仕立ても考えはしたが、今日は素材の良さを引き出したい。千恵ちゃんがせっかく仕入れてくれたひき肉なのなもの。

「いい感じだね。でき、悪いんだけどこっち手伝ってくれない？」

九重先輩が作っているのは餃子なんだけれど、焼き餃子のみならず水餃子も用意され

ている。鶏がらスープかつ唐辛子を使ってピリツとした味付けになる予定だ。

「分かりました。餃子作ればいいんですよね？」

「ありがとう」

九重先輩の手伝いをしつつ周りを見てみると、芙蓉先輩はポテサラ用にきゅうりをスライサーにかけている。希名子ちゃんは卵を割り始めた。両手でテンポよく割っている。普段より高めに髪を結っている希名子ちゃんは割烹の若女将みたいでカッコいい。千恵ちゃんはコロツケを揚げる直前の段階まで仕上げている。小柄な体軀にエプロン姿が可愛いけれど、お肉と対峙する時の彼女の表情はとっても真剣だ。精肉店の娘だけれども、牛や豚といった動物も大好きな彼女は食肉に対してとっても真摯なのだ。一方、芙蓉先輩をお願いされおにぎりを作り初めた美夏ちゃん。具はみんなの持ち込みで、鮭や梅干といった無難なものから肉や玉子のそぼろなんてものもある。

「そろそろ時間よ。会場の仕度をする班は取り掛かって」

時刻は午後2時。玉子焼きを焼き終えた希名子ちゃんとおにぎりを作り終えた美夏ちゃんが調理台を急いで片付け、テーブルクロスを敷いたり箸や取り皿を用意したりする。

「あと30分で料理は仕上げましょうか」

午後2時半頃には三年生は卒業式の総練習を終えて移動するはずだろう。取り敢え

ず私はロールキャベツを煮込まなければ。あまり長時間煮込むとキャベツがへたるため、今から仕上げれば丁度いい頃合だと思う。

「そっちはどう？」

千恵ちゃんの方へ行ってみると、こんがり揚がったコロッケがかなりの数並んでいる。私がロールキャベツを作る際に余ったキャベツは千切りになっている。手際よく切ってくれたのは芙蓉先輩だ。今や大皿にはポテトサラダとキャベツの千切りが盛りされている。

「それじゃあ、配膳を始めましょうか。洗い物とか間に合わなかったら取り敢えず準備室に移動して」

芙蓉先輩がハンカチで手を拭きながら言う。いよいよ、三年生とのお別れ会が始まった。ちやうのか……。少しだけ、寂しい気持ちを抱えながら料理をてきぱきと並べるのだった。



## #62 三年生のために（4）

「それでは、三年生の追い出し会を始めます!! かんぱーい!!」

芙蓉先輩の音頭で始まった追い出し会。グラス同士がぶつかる音とみんなの喚声が重なる。シャンパングラスに入っているのはブドウ系の炭酸飲料。一瞬スパークリングワインとかシャンパンに見えそうな感じだ。

「姫宮さーん!!」

「あまほ先輩!!」

乾杯して少し料理を取り、落ち着いた頃あまほ先輩が私の名前を呼ぶ声が聞えたので、とつさに持っている食器とグラスを置く。次の瞬間には先輩が私の胸にとびついてきた。何がきっかけでこんなにも懐いてもらったのか思い出せないけれど、先輩の持つ柔らかな雰囲気や部の雰囲気を作っていて、それがすごく居心地がよかった。

「うう、姫宮さん……」

この一年、いろいろとお世話になった先輩をぎゅつと抱きしめる。

「大錠祭までお別れだねえ。寂しいよお……」

やや涙声でそう呟き、腰に回す腕に力を込める先輩。部長であり、部員のお姉ちゃん

であり、みんなの妹分だった先輩の頭を優しく撫でる。

「ありがとう。私、姫宮さんと会えてよかった」

「私も、一年生の時の部長が先輩で良かった。楽しい部活で、本当に良かったです」

ハグを解いた先輩は朗らかな笑みを浮かべて、もう寂しそうな顔はしていなかった。すたすたと教壇の方へ向かうと、

「これは、一二年生みんなに言っておかないとね。来年、中等部にいる私の妹が進学してくるから、よろしくね」

少しジュースを飲んでから、先輩は甘く優しい声を響かせる。あまほ先輩はやっぱりお姉ちゃんだったんだ。

「美星ちゃんのことです」

中学校から星鍵に通っている九重先輩が懐かしげに呟く。春になったら先輩の妹や澄乃ちゃんやメグちゃんも入学してくるんだよね。あと、一ヶ月ちよつとか……。

「来年の調理部をお願いしますね」

「もちろんです。先輩こそ、大学で小学生と間違えられないといいですね」

いつもは少し堅いとも言える雰囲気を持っている芙蓉先輩が、あまほ先輩に対しては軽口をたたいた時があつて、それが、お互いの信頼の証左であるような感じが、とつても眩しく見えて……。

「ユウちゃん。笑顔で見送らなきや、ね？」

「そうだね。希名子ちゃんの言うとおりだよ。女の子は笑顔でいる方が可愛いもんね」

お昼ごはんの時間に始まった追い出し会は、石川先生作のホールケーキの登場でお馴染みのティーパーティーとなり、全員でごちそうさまを唱和してから、手作りクッキーだとか、いろんな贈り物が贈られた。そして最後に、代表で大きな花束を受け取ったあまほ先輩は、はにかみながら、

「今日はありがとう。それとご馳走様。みんなの料理、すっごく美味しかったよ。お花もありがとうね。でもね、みんなの笑顔が一番の贈り物だよ！　ありがとうね!!」

そう言って追い出し会の最後を締めくくった。

## # 6 3 卒業式

星鍵の卒業式は三月一日。生徒総出で執り行われる。そういえば入学式もそうだった。違うのは、一年生と三年生の位置。ステージ正面に三年生が並び、その後ろは保護者席、そこから両翼に在校生が座る。三年生の隣には教員席と吹奏楽部の隊列が並んでいる。明音さんもフルートを持って待機している。自分が中学を卒業してから一年弱が経っている……というか、中学の卒業式は三月の半ばくらいだから一年間で二度目の卒業式ということになる。

けれども雰囲気は大きく違った。中学の卒業式は合唱をメインにしていた感じがして、その時間を捻出するためか卒業証書の授与は各クラスの代表者だけだった。しかし星鍵は全員に理事長から手渡しで卒業証書が授与される。卒業証書授与式としてはそれが当たり前なのだろうけれど。

厳かな雰囲気の中で式は進み、現生徒会長の佐原先輩が送辞を、前生徒会長の実村先輩が答辞を述べる。

「——先輩方のご多幸を祈り送辞と代えさせていただきます。在校生代表、佐原しずく」

「しずく、ありがとう。在校生の諸君、卒業生代表の実村だ。今日で私たち三年生は卒業となる。三年あるいは六年を過ごした学び舎を去ることは寂しいが、我々が君らの先輩であることは揺るぎない。不確かなことの多い将来に私たちにとって、今までの学校生活というものは確かなものなのだ。進学する生徒も就職する生徒も、もつと時間をかけて進路を決める者もこの先きつと苦しい思いをする時がくるだろう。そんな時、この学校での日々を思い出し、あるいは再びここを訪れるのもいい……そうやって自分を再確認できる場所としての学校を、君たちに受け継いで欲しい。私もそう言われて生徒会役員として尽力してきた。女帝とも呼ばれた私だが、それこそ二年三年前は不甲斐ない生徒だった。そんな私を支えてくれた同級生、そして教え導いてくださった先生方。本当にありがとうございました。名残惜しいですが、以上で答辞とさせていただきます。卒業生代表、実村碧海」

先輩の力強い答辞が一番印象に残った卒業式だった。吹奏楽部の演奏と共に退場する三年生。在校生は椅子等の片付けを小一時間した後教室へ戻り、ホームルームを経て解散となった。明日は日課変更で変則授業になるようだ。帰宅前にスマホをちらりと見ると通知を示す点滅があった。メッセージアプリを確認するとあまほ先輩から家庭科室に来て欲しいというメッセージが来ていた。

「麻琴（まこと）めん、家庭科室に寄るから先に帰ってて」

「……十分くらい待つて来なかったらそうする」

一緒に帰りたいような早く帰りたいようなという表情を浮かべる麻琴に、ごめんのジェスチャーをしながら家庭科室へ向かった。あまほ先輩、パーティの時のハグじゃ足りなかったのかななんて思うと少し頬が緩む。

「来ましたよー」

がらりと家庭科室へのドアを開けるとそこに居たのはなんと実村先輩だった。

「やあ。姫宮が何か悩んでいる気がするなあまほに言われてな。二人で話す時間を取ってもらったわけだ」

あまほ先輩がそんなことを……。

「私、そんな悩みなんて……」

麻琴のことが真っ先に思い浮かんだ。でも今は別に現状に満足しているというか……一時ほど悩んではいけないと思うのだけれど。

「人間関係というより、自分自身について悩んでいるんじゃないか？ 一人称が変わっているぞ」

「それは……その」

「星鍵はお嬢様学校というわけではないが、のほほんとした雰囲気生徒が多いからな。ボクという一人称は浮くだろう？ 私も思ったさ、どうして姫宮のような可愛らしい生

徒が自分のことをボクと呼ぶのだろうか？ とね。でもそう思うことこそ、型にはめて考えることだと後から気付いてね。私も昔はボクっ娘でね……中学に上がってから自分の一人称がマイノリティと気付いたよ。まあ、性的指向もそうなのだけれどそれはいい。姫宮、あまり自分を抑えつけるものじゃないぞ？」

一人称がボクなのは一年前まで男子だったから、なんて言っても先輩は信じないだろう。性別は普通、本人の与り知らぬところで変わったたりしない。

「ボクは……ボクのままでもいいのでしょうか？」

「いいも何も、姫宮は姫宮だ。人は絶えず変化している。その変化のパターンというか……方向性が人間を形作っているのだと私は考えている。私は私という一人称に慣れるまで二年ほどかかったかな。姫宮はどうしたいと思っっているんだ？」

「ボクが……いいかなって。ボクは……ボクですものね」

私という一人称で女の子たちと会話していると、自分というものが溶け出してしまふような……本当に自分にはかつて男の子として生きていた時間があったのかななんていう底知れぬ恐怖感があった。自分をすっかり残すためには、ボクという一人称が自分にはいいと思う。きつと……そうなんだ。

「迷いは少し晴れたか？」

「ええ。ボクでいいんだって思いました。本当に、ありがとうございます」

「後輩を導くのは先輩の役目さ。あまほにもお礼を言うといい。年下相手にはやたら心配性だからな、あまほは」

先輩たちにも心配をかけていたと知り、本当に申し訳ない気持ちになった。それと同じに、後輩の迷いや悩みに気づける先輩になりたいと強く思った。

迷いを吹っ切ったボクを麻琴は笑顔で迎えてくれた。



## 番外編 バレンタインデー

ここで少し時を戻そう。三年生の追い出し会——三年生を送る会だったり三年生に贈る会だったり普通に送別会と呼ばれたりする二月下旬のあのイベント——の準備をしていた頃。希名子ちゃんとも話していたけれど、女子の一大イベントであるバレンタインデーを目前に控えた週末。私は延々とテンパリングの作業をしていた。今までは麻琴と家族の分くらいしか作っていなかったが、今年はいっそクラス全員分くらいのチョコを用意するつもりだ。流石に個別で包装するのは麻琴に明音さんや初美さん、千歳ちゃん、もなかちゃんの分くらいで、他のクラスメイトのはタッパーか何かで用意するつもりだ。さらに希名子ちゃんたち家庭科部員のチョコレートも用意するつもりだ。準備の合間に食べるからこちらもタッパーの予定。姉はチョコレートを作らないから、キッチンが独壇場なのだが今年はある異変が。

「お姉ちゃん、その……俺も、チョコ作ってみたい」

キッチンに夏希がやってきた。夏希はずっと私と麻琴の関係を拗らせたことで申し訳なさそうにしていたが、年明けくらいからは少しずつ関係性も落ち着いている。とはいえ、思春期ということもあり以前の兄弟としての関係性からは少し距離があるのだ

が。

「その、姉さんに恋人が出来たらお姉ちゃんも麻琴さんの関係を認める……みたいな流れになってるって聞いて、なら俺に彼女が出来てもいいのかなって。前々から気になってた女の子がいて……」

「夏希がそこまで考えなくてもいいのに」

でもなんだか、シスコンに思えてならなかった夏希にもちゃんと気になる人がいるというの少し安心。しかもその人に逆チョコを贈りたいなんて……。よくよく考えたら男子が女子にチョコレートを贈るのって、けっこう特別なことなんだよね。麻琴に毎年あげてたから、そういう感覚がちよつと乏しいのだけけど。

「もう何度も言ってるけど、私と麻琴がちよつときくしやくしたのには夏希のせいじゃないし、世間的に少しづつ偏見が薄れているけれど同性の恋愛ってまだマイノリティだし……そもそも私はある日突然性別が変わっちゃったわけで、家族と麻琴だけがそれを知っているけど、全員が知っているとどうか……認識していたら今頃ニュースになっちゃってたよね。あ、話ズレた。その……夏希に好きな人がいるなら、私らどうこうとか抜きにして、真剣に取り組んで欲しいって言うか、難しいね」

私のまとまらない言葉にも、夏希は真剣に耳を傾けてくれた。そして真剣な眼差しのまま言葉を紡ぐ。

「お姉ちゃんとは麻琴さんがどうこうっていうのは、キツカケにすぎないっていうか、自信がないんだ。ミサキっていうんだけど、その子に気持ちを伝えてどうしたいのか、分からない。その子は女バスのエースで、小さい頃からバスケット一筋なんだ。俺に振り向いてくれるか分からない。小学生の頃はバスケットが強いから好きだった。でも中学に上がって、ことあるごとに可愛いつて思うようになった。同じ高校に行けるか分からない。もし別々のつてなつたらあと一年しかない。後悔したくないよ……だから、ちゃんと伝えたいって思ってる。そのためにもう一つキツカケが欲しくて、だからその……チョコレートを作りたい」

夏希がここまで本気で恋愛してて、その相談を私にしてくれることが嬉しかった。もし兄のままだったら相談してくれただろうか。してくれるのかもしれないけれど、ここまで赤裸々に語ってくれただろうか。しかしその感動のあまり、私は一つ重要なことを忘れていた。今まさに、私はチョコレート作りの最重要過程であるテンパリングの最中であるということだ。湯はすつかり冷め、チョコレートも固まりつつある。何度も溶かして固めてをしてしまうと本来持つ水分が抜けてしまうので使い方が狭まってしまう。「あ、ごめん。もっと早く何なら昨日のうちに言っておくべきだったよね。ど、どうしよう？」

「うーん、チョコ買い足そっか。夏希の作る分も必要だし。このチョコはブラウニーに

しちゃうか、あるいはお姉ちゃんに食べさせるか、かな」

さつきからちらちらとこちらを覗く視線に私は気付いていた。夏希は背中を向けているから流石に気付かない様子だが。

「ねえその扱いの悪さはお姉ちゃん泣いちやうなあ」

「うげ、姉さんいつから……?」

キツチンに入ってきたお姉ちゃんに夏希が驚く。お姉ちゃんには聞かれたくなかつたかな? まあ男の子の気持ちは……いや分かるよ。分かるはずなんだけどなあ……でもお姉ちゃんはやつと冷やかしそうな気がしちゃったのかな。

「その反応も傷つくなあ。まあいいや、そのチョコはブラウニーにしてよ。どうせ食べるなら美味しい方がいい」

「お姉ちゃん自分でも作れるんだし、作っておいてよ」

「ええくやだ。だって、どうせ食べるなら美味しい方がいいじゃん」

姉は器用で大抵の事を出来るわりにはしないから困った人だ。

「じゃあこうしよう、私が追加のチョコを車でちやちやつと買ってくるから、二人は残ってるチョコで作り方を教える。どう?」

まあそれでいいかと夏希と合意がいたので、姉を見送り私は残ったチョコレートで刻んでから湯煎しうんぬんかんぬんと説明をしながら、夏希が作りたいというバスケット

トボール型のチョコレート作りを始めるのだった。

## #65 桜よりも君を見ていたい

麻琴をリビングを通してボクは自室へ向かう。寝巻きにしているぶかぶかTシャツを脱いでクローゼットを開ける。取り敢えずキャミソールを着ながらクローゼットを見渡す。まだ着ていない春服がいくつもある。ワンピース系の服もあるが、髪がまだ長くなりきつていないから似合わないかも。ちよつと快活そうな感じに。いつそ麻琴と似た感じで……ペ、ペアルックみたいなのもいいかも。だったら、靴はスニーカーかなあ……つて、何を考えてるんだボクは！

「悠希い、まだあ？ と、わ!!」

「ま、麻琴！ 見ないでよお!!」

思いのほか時間をかけてしまっているのか、麻琴がドアを開けて顔を覗かせてきた。咄嗟に手近にあるクツションを投げる。こっちはまだ下着姿なのにい。

「部屋の外で待ってて!」

お姉ちゃんがまだ寝ていることなんてすっかり忘れて大声を出してしまった。恥ずかしい。着替えを見られたのも十分に恥ずかしいけれど。でも、麻琴だし……。嬉しい訳じゃないけど、嫌ってわけでも……。

「取り敢えず、服を決めなきや。ううん。この組み合わせにしようかなあ。コスプレっぽいけど、可愛いし」

厳密にはコスプレというよりアイドル衣装なのだが。手に取ったのは胸元と袖にフリルがあしらわれたブラウスと赤のタータンチェックのフレアスカート。同色のネクタイもある。これに薄桃色のセーターを合わせたら制服っぽくなるかも。持つだけ持とうかな。一下着姿（この格好）でもあまり寒さを感じないし。

「麻琴、入ってきていいよ」

「着替え終わって——ないじゃん！」

「服は決まったから、着せて」

「え、え!？」

「これは罰だよ。ボクの着替えを覗いたから、ボクの着替えを手伝いなさいってこと」

罰というよりも、ちよつとした悪戯みたいなものなんだけれど。ふふ、麻琴つてば顔が赤くなつてきた。どうしてだろ、相手が焦つてくれるとこっちは落ち着くのだ。

「わ、分かったよ。最初は？」

「ニーハイ」

ベッドに腰を下ろして足を上げる。麻琴はボクの前に跪き、脚に手を伸ばす。くすぐったいけれど、ついこのまま足の甲にキスをされるんじゃないかなんてドキドキして

しまった。

「ん……………」

手つきがいやらしいわけではないのだが、声を抑えきれずにいた。麻琴に脚を凝視されてるせいで、ボクも脚の感覚が鋭くなってしまふのだ。

「悠希、次は？」

「す、スカートよ」

これはあくまで罰なんだから、ボクが強くてないと、麻琴もいつもみたいない感じになっちゃう。きつく言ってやらないと。

「それじゃ、最後にブラウスね」

スカートを穿く時に立ち上がり、続いてブラウスの袖に腕を通す。あとはボタンだ。

「ボタン、留めるね」

麻琴のしなやかな指が布越しにボクの身体をくすぐる。でも、ボクの身体をくすぐるのは指だけではない。

「麻琴、鼻息が荒いよ。もう……………」

「だ、だつてえ。もうちよつとだから我慢して」

「む……………」

そう言いながら、一番下のボタンも留められた。



「麻琴、ネクタイは結べる？」

「う、で、出来ない……」

「やっぱり。お姉ちゃんがあげたタイ付きの服でタイを省略するくらいだものね。」

「じゃあ、ネクタイは自分でやるから、リビングに戻ってて」

クローゼットのドアの内側に付いている姿見で確認しながらネクタイを締める。ネクタイと言ってもショートタイで胸元までしかこない。

「麻琴、レジャーシートの仕度とかしてないんだろなあ。納戸から持つてこない」と

部屋を出て階段を下りたらすぐ曲がる。階段下のデッドスペースを使った収納の中に、レジャーシートもあつたはず。

「このサイズで十分かな。二人つきりだし」

「適当なサイズのレジャーシートを予めスマホと財布を入れたカバンへ入れる。あ、夏希にメールしておかないと。」

「少し出かけるので、お昼は自分でなんとかしてください、っと」

まあ、冷凍のチャーハンだとかカップ麺もあるし大丈夫だろう。チョコレート作りをきっかけに最近では夏希も料理に興味を持っているようだが、この春休みはバスケット部の練習が忙しいようでなかなか時間を作れずにいた。まあ、高校生になるまでに少しずつ練習できたらいいなと思う。思えばボクも今の夏希くらいの年から練習し始めていたは

ずだったから。その頃はまだお姉ちゃんが教えてくれたんだけど、ボクが上達するとすっかりずぼらになってしまった。そんなことを考えながら忘れ物がないかチェックして、リビングにいる麻琴に声をかける。

「麻琴、準備出来たよ！」

「う、うん！ じゃ、行こうか」

玄関の鍵を閉め、二人並んで歩くけど、さっきの着替えが後を引いているのか話しかけてこない。麻琴が話しかけてこないとなると、ボクまで意識してしまつて話しかけれない……。うう、どうしよう。

「あ、あのさー！」

うわベタ！ 実際起こるなんて思つてもみなかつた。

「麻琴が先でいいよ」

「えっと、服、似合ってるなあつて思つて。その、アイドルみたい」

「あ、ありがと。麻琴は、春休みは忙しくないの？ 部活とか塾とか」

冬休みの講習以来、塾に通い出した麻琴。実力テストでは九十二位だったが、期末ではなんと七十五位まで上がった。きちんと成績は上がりつつあるので効果はあるみたいだけど、忙しくつて体調を崩すようなことがなければいいのだが。

「平気だよ。あたし、そんなにやわじゃないから」

「それもそうね」

「もう！　ちよつとくくらい心配してくれてもいいじゃんかよお!!」

麻琴の言葉はどこ吹く風。春風の吹く道を歩くこと二十分強、まずは高校の前を通り過ぎる。ここから十五分も歩けば希名子ちゃんの家『ふたみや』の看板が見えてくるだろう。高校の周辺で中学区が変わるから中学は違ったけれど家は意外と近いのだ。夏休みに宿泊券を貰って以来、足しげく通っているけど、今月は三日に菱餅を買いに来ただけか。

「菱餅、もう売ってないだろうね」

「流石にね。麻琴、桜餅の他に何か買ってく？」

「どうしようか。何かオススメがあったら買ってみる？」

「そうしょつか」

何を買うおうか決めているうちに、ふたみやに着いていた。暖簾をくぐると、

「いらつしやい。あ、ユウちゃんと麻琴さん。お出かけですか？」

桜色の着物に身を包んだ希名子ちゃんが出迎えてくれた。髪を結い上げる簪にも桜の花弁があしらわれている。可愛い。

「一足早くお花見にね。桜餅四つとオススメ二つ、でいいかな、悠希」

「そうねえ、いいと思うよ。お願いね、希名子ちゃん」

「はくい。かしこまりました。えっと、今の時期のオススメは桜餡を使った最中かな。お花見には丁度いいと思うよ。えーと、何かおまけを。あ、ドラ焼き一つ入れておくから半分こしてね」

「あ、ありがとう。えっと、御代とスタンプカードと」

「はい、丁度いただきますね。スタンプが二つで、はい、お返ししますね」

一定額買うとスタンプが一つ押されて、十五個溜めると商品券が貰えるのだ。

「ありがとうね」

「また来てね」

笑顔で見送ってくれる希名子ちゃんに手を振ってふたみやを出る。麻琴が先輩から聞いたという場所はもう少し西側にあるらしい。丁度、高校の真北の辺りだ。途中の自動販売機で温かいお茶も買い、さらに歩く。

「そろそろつてほら、見えてきたでしょ？」

麻琴が指差した先には広い空き地があって、その奥に小高い丘がある。そこに桜の木はあった。

「公園でも何でもないんだけど、桜がきれいでしょ？ まだちよつと早いから人もいないし。独占だよ」

「うん。こんなに早くお花見が出来るなんて」

「それじゃ座ろうかって、シートとか何も用意してない!!」

「やっぱりね。麻琴、財布とケータイしか持ってないでしょ?」

カバンから取り出したシートを広げながら、麻琴に言つてやる。項垂れるばかりの麻琴は見てて可笑しかった。

「じゃあ、お花見始めようか」

そう言つてお茶と和菓子を並べる。小さいお茶のペットボトルで乾杯して、まず桜餅を食べる。

「んー、おいしい!!」

「お茶ともいい相性だね」

桜の葉のしょっぱさが餡子の上品な甘さを際立たせていて、本当に美味しい。

「ねえ悠希、一年間、ありがとうね」

二つ目に手を伸ばそうとしたボクは、麻琴の発言に手を止めた。

「急にどうしたのよ」

「だって、二年生になつたら別々のクラスになっちゃうから……」

俯いて悲しそうに言う麻琴を、ぎゅつと抱き寄せる。

「クラスが別々になつても、ずっと一緒だから。二年生になつても、三年生になつても、大学生になつても、それから先も、ずっとずっと一緒にいるって。約束してあげるから、

そんな表情しないで。ね？」

「悠希い。ありがとう」

「お礼なんて言わなくていいの。麻琴にはボクがいなきやダメなんだから」

お互いの瞳を見つめる。暖かな春の昼下がりに、ふわりと吹いた春風におされるように、どちらからともなく唇を重ねる。温かくて、甘くて、永遠のような一瞬。

「餡子より、キスの方が甘いね」

春。ボクらを見守る桜より、ボクらの頬は色付いていた。

二年生になりました♪

## #66 新しいクラス

季節は巡り再び四月になった。星鍵学園の高校二年生になったボクたちは、クラス発表を見に、そして明日に控えた入学式の準備をするために登校していた。

「悠希、見付かった？」

麻琴にそう聞かれる。テニスコート沿いの窓に貼られたクラス掲示を確認する。二年五組二十二番、そこに自分の名前を見付けた。

「そっちは？」

「あつたあつた。一組の二十五番」

麻琴と別々のクラスなのは分かってたからいいとして、星鍵は六クラスに大体三十数人の生徒を割り振る。一から三組が文系で四から六組が理系。三組と六組が就職組で他は進学組、そんな感じの割振りになっている。同じクラスには……あ、希名子ちゃんがいる。調理部の一年生はみんな理系に進んだけれど、クラスはバラバラになっているようにボクと希名子ちゃんしかいない。千恵ちゃんは進学しないって言っていたから六組だろう。で、美夏ちゃんが四組なのかな。部活はさておき明音さんも四組なのか

な、見当たらない……あ、生徒会選挙に出ていた島さんがいる。島由花菜さん……どんな娘だっけ。あと見覚えのある名前と言えばミスコンにも出ていた高橋真紀さんかなあ。王子様系だったはず。そう言えばミスコンは一度グランプリに輝けば出なくてもいいようになっていっているらしい。今年は高橋さんに丸投げ出来るからラッキーだ。……となると実村先輩は三年生になって初出場だったんだ。生徒会ってそんなに忙しいのかな。

「一組は誰がいる？」

「千歳ともなかは一組だ。ラッキー」

「二人に勉強のことで迷惑かけちゃダメだよ」

「あーい。分かっているし、塾に行つてからけっこう頑張つてるんだぜ？」

麻琴とそんなやりとりをしつつ教室へと向かった。校舎の階段は東西と中央にあり、中央の階段が三組と四組の間くらいに位置している。ボクと麻琴は中央階段を上がって一旦お別れする。寂しいようなそうでもないような。

教室に入ると、何人かがこちらに視線を向けた。あまり意識していなかったがボクはミス星鍵なんだよね。校内ではちよつとした有名人なわけで……。ちよつと視線が怖い。

「やあやあやあ!! 姫さまではないか。この高橋真紀、ミスコンで貴女のお姿を見て以



来この胸の高鳴りを忘れたことは一度もございません！　どうか自分をお側においてはくれませんか？」

いきなり声をかけてきたのは王子様キャラの高橋さん。さつきまで何人かの女子に囲まれていたのに、突如として現われた。思わず硬直してしまっただが、なんとか当たり障りのない言葉を探す。

「えっと、よろしくね高橋さん。その、普通に仲良くしてくれたら嬉しいかな」

「なんとありがたきお言葉。この高橋、何かありましたら必ずやお力になります。では、失礼します」

ミスコンの時はあまり他の出場者と会話していなかったから、あんなにも濃い人物だとは思っても見なかった。さっそくちよつとお疲れ気味なボクに、希名子ちゃんが声をかけてくれた。

「ユウちゃん久しぶり。お花見に行っただって日以來かな？」

「おはよ、そうだっけね。お店にはあの後も二回くらい行っただけど、ちょうど会えなかったみたい」

春休み後半の話をしていると、教室に先生がやってきた。田澤先生という三十代くらいの男性で、取り敢えずクラス委員長を決めると言っただけに皆に着席するように促した。

「誰かやりたい人はいる？　……いないなら、あ、島がいるのか。黒瀬先生から評判は聞

いているよ、どう？ 頼める？」

「は、はい。分かりました」

そんなやり取りがあつて、島さんがクラス委員になった。去年もそうだったようだけど、頼まれたからやっているといる感じがするのが少し気になった。

「おし、クラス委員も決まったし整列して体育館へ向かつてくれ。明日の入学式の準備、てきばき進めてくれよな」

明日は入学式、澄乃ちゃんやメグちゃん、それからあまほ先輩の妹が入学してくる。きつと調理部にも新入生が来てくれる。ボクは少しだけわくわくしながら、体育館へ向かった。

## #67 絶対☆ライバル宣言!?

二年生なったからと言って、特別なにかが変わるといいうわけではない。一年生の新入生研修を来週に控えた四月の中旬、調理部には四人の一年生が加入した。

あまほ先輩の妹、高須美星ちゃん。名前の読み方はみほしではなくステラらしい。高須家のご両親はともユニークなネーミングをされる方のようだ。本人は恥ずかしいからと、みほしって呼ばれる方が嬉しいらしい。あと、あまほ先輩のすあま同様に彼女はカステラのニツクネームで呼ばれることもあるらしい。

紺屋澄乃ちゃんと支倉恵留ちゃんも調理部に来てくれた。澄乃ちゃんは去年の夏祭りの日に出会い、恵留ちゃんと一緒に文化祭にも来てくれた。ちよつとあわてんぼうな澄乃ちゃんと、明音さんとは違ってかなりのしつかり者である。メグちゃんのコンビは、なんだか見えていて飽きない。

そしてもう一人、不思議な雰囲気の子が入部してきた。長身でメリハリのある身体は最近まで中学生とは思えないほど大人っぽいのだが、目元を前髪で隠してしまっている上によくマスクをしている——調理部は調理中マスクをしてもしなくてもいいことになっている。白衣ないしエプロンの着用は必須だけれども——せいで素顔はあま

り分らない。曰く、料理が出来ないからここで学びたいとのこと。宗森静真さん。

不思議とさん付けで接してしまう彼女に、今日も包丁捌きを教える。春先とはいえ天気が悪いと少し冷える。そんな日に嬉しい豚汁を今日は作っている。

「人参と大根はいちよう切りにするんだけど、練習だし乱切りでもいいかも。乱切りはこういう風に断面をね——」

背丈がかなり違うから後ろから手を取り……なんてことは出来ないのです、隣で実演する。静真さんは吸収力が高く、めきめきと上達してくれる。だから教えていても楽しい。夏希にもこんな感じで教えればいいだろうかなんてことも考えながら、調理を進める。出汁の取り方、具材の投入する順番、味噌の溶き方。一つ一つ順番に教えていく。

「最初に具材をきっちり炒めるのが大事。ここでごま油を使うよ。普通の油でもいいんだけど、風味が良くなるから。隠し味みたいな？ そうそう、砂糖を少し入れても深みが増すね。後で入れよっか」

「先輩は優しいですね……」

ぼつりと静真さんが呟く。

「私も先輩みたいになりました……」

なりたかったという過去形の言い方が気になって、なんて声をかけようか考えていたのだが……。

「ユウちゃんちよつとこつちいい?」

美夏ちゃんに呼ばれて、静真さんのもとを離れる。調理は順調に進んでおり、食器の用意をし始めてもいい頃合いだった。大きめのお椀を人数分、準備室に取りに行く。

「なんだか宗森さんだけ異質だよねえ」

「そんなこと言わないの」

根が陽気な美夏ちゃんはどうにも静真さんが苦手らしい。小柄な千恵ちゃんも、長身の静真さんを怖がっている印象。なんだかんだ誰にでも優しい希名子ちゃんと、ボクが面倒を見るが多くなった。まあ彼女は基本的に友好的だからボクも接していて楽なんだけど……ある問題がね。

「姫宮先輩! 勝負です!!」

お椀を持って豚汁をよそうと、家庭科室内に甘い声が響いた。声の主は高須美星ちゃん。……彼女は初対面の時からボクへの好感度がゼロどころかマイナスの値を示しているのだ。逆にあまほ先輩は懐きすぎていた気がするが……。

「ちよつとおっぱい大きいからつて私の! 私のお姉ちゃんにベタバタして、たらしこんで、家に帰っても姫宮さんが姫宮さんがつてうんざりなのよ!!」

理由が明らかでないことだけでも、これを毎度聞かされる身にもなつて欲しいし、ひどい言い方だけでも来なければいいのとすら思う。でも本人は姉と同じ部活とい

う拘りがあるようで、必ず集まる水曜だけでなくお茶会にもけっこうな頻度で参加しているらしい。そっちはボクあまり行ってないから、どんな態度なのか分からないのだけれど。

「私の作った豚汁の方が美味しいんだから、ぎゃふんと言わせてやる!!」

今時ぎゃふんとは言わないよねえと思いつつ、彼女の後ろへ視線をやると九重先輩と希名子ちゃんが、私たちも作ったんだけどなあと肩を落としている。前回もこんな感じで料理勝負を半ば強制的にさせられ、交換して食べたんだけど確かに料理の腕は立つ。はつとさせられるほどだった。でも負けをちゃんと認める潔い性格の持ち主らしく、先週の蒸しパン対決はボクの勝利だった。自分で作ったものを食べられなかったから本当にどっちが美味しかったのかは分からないのだけれど。

まあ今回の豚汁は量もあるから、実際に比べることができる。一人で作った料理ではないから、勝負として成立するのは分からないのだけれど。取り敢えずボくらが作った豚汁をよそって美星ちゃんに渡す。交換で彼女らが作った豚汁をボクがもらう。

「いただきます」

部長の芙蓉先輩の号令で口をつける。確かに美味しい。丁寧に汁を取り、灰汁を除き去したそれは澄んだ味わいだった。味噌と豚の脂が持つ甘みの奥に何か……もう一手間を感じる。……キリツとしてっつ優しさを感じる、これはひよつとして。

「醤油とみりんを足したの？」

「……分かりますか。はい。隠し味なんです、よく分かりましたね。先輩の豚汁……初心者のある班の完成度じゃないです……。なんで、こんなに……美味しいのよ！ 何よこの深い味わいは!! また……私、負けるの……？ ぐす、悔しい、悔しい……ごちそうさま!!」

きちんと完食してから家庭科室を立ち去る美屋ちゃんを、残された部員はただ呆然と見送ることしか出来なかった。